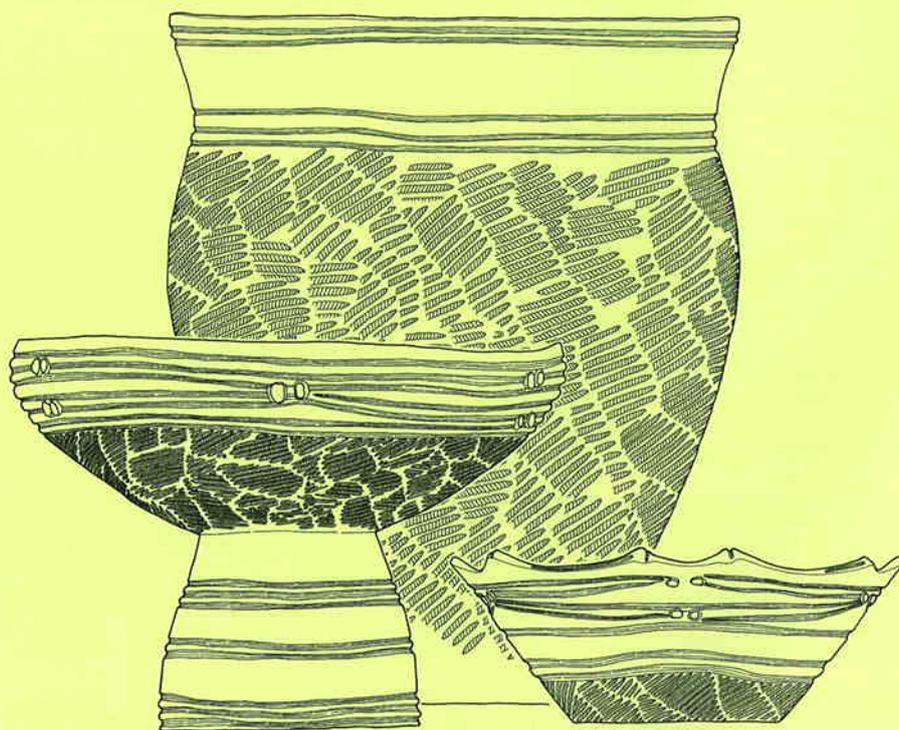


向 田 遺 跡

— 浅岸地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ —



2003. 3

盛岡市・盛岡市教育委員会

向 田 遺 跡

－ 浅岸地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ －

2003. 3

盛岡市・盛岡市教育委員会



卷頭写真1 RD005土坑出土土器



卷頭写真2 第I区遺物包含層出土土器



卷頭写真3 第I区遺物包含層出土土器



卷頭写真4 第I区遺物包含層出土土器

例 言

1. 本書は、盛岡市浅岸字向田・字上村に所在する向田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、浅岸地区土地区画整理事業に伴い実施した平成11～14年度の調査成果の報告書であるが、平成12年12月24日に発生した盛岡市教育委員会文化財取蔵施設火災による記録図面及び写真等の資料焼失のため、12年度以前の調査成果については、可能な限りの資料呈示に止まっている。
3. 本書は遺構および遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集は佐々木紀子、神原雄一郎、藤村茂克、千田和文、似内啓邦、室野秀文、津嶋知弘、三浦陽一、今野公顕、花井正香、佐々木亮二、岩城志麻が協議・執筆した。
4. 本書は遺跡の立地する地形から調査区を第Ⅰ区（上流域）・第Ⅱ区（下流域）に分けて記述した。
5. 遺構の平面位置は、平面直角座標 X 系を座標変換した調査座標で表示した。

$$\begin{array}{rcl} \text{調査座標原点} & X - 32,000,000 & = & R X \pm 0.000 \\ & Y + 30,000,000 & = & R Y \pm 0.000 \end{array}$$
6. 高さは標高値をそのまま使用している。
7. 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業(株)発行）を参考にした。
8. 遺構記号は次のとおりである。なお、縄文・弥生時代の遺構番号は001～、奈良・平安時代の遺構番号は501～、中世及び近世の遺構番号は1001～としている。

	遺 構	記号	遺 構	記号	遺 構	記号	番 号
記 号	竪穴住居跡	R A	土 坑	R D	配石・集石	R H	縄文・弥生 001～
	建 物 跡	R B	竪 穴	R E	井 戸 跡	R I	古 代 501～
	柱 列 跡	R C	溝 跡	R G	遺物集中区	R P	中世・近世 1001～

9. 土器の区分は、縄文土器・弥生土器・続縄文土器・土師器・須恵器・あかやき土器にわけた。
10. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市教育委員会で保管してある。
11. 浅岸地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査にかかる盛岡市・盛岡市教育委員会刊行の報告書は、次のとおりである。

1999.3 前野遺跡 一浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ一

目 次

例	言
目	次
図	版 目 次
挿	図 目 次
表	目 次

I. 調査経過

1. 調査経過	1
2. 向田遺跡の地形・地質	2
3. 周辺の遺跡	3
4. 調査体制	5

II. 調査内容

1. 第I区の調査(第6～8次・10～12次調査)	9
(1) 縄文・弥生時代の遺構と遺物	9
(2) 古代の遺構と遺物	17
(3) 中・近世の遺構と遺物	21
(4) 遺構外出土遺物	25
(5) まとめ	43
2. 第II区の調査(第1～4次・9次調査)	45
(1) 縄文・弥生時代の遺構と遺物	46
(2) 古代の遺構と遺物	55
(3) 中・近世の遺構と遺物	55
(4) 遺構外出土遺物	60
(5) まとめ	75

図 版 目 次

- 巻頭写真1 RD005土坑出土土器
巻頭写真2 第I区遺物包含層出土土器
巻頭写真3 第I区遺物包含層出土土器
巻頭写真4 第I区遺物包含層出土土器

- 第1図版 浅岸遺跡群全景、向田遺跡遠景
第2図版 第6・11次発掘調査区、RA001竪穴住居跡全景
第3図版 RD005土坑全景、土層断面、遺物出土状況
第4図版 RG504溝跡群全景、第I・II区遺物包含層出土状況
第5図版 弥生時代の土器（前期・後期）
第6図版 弥生時代の土器（後期）、続縄文時代の土器

挿 図 目 次

第1図	向田遺跡の位置（1：50,000）	1
第2図	地形分類と周辺の遺跡分布	4
第3図	浅岸遺跡群全体図	7・8
第4図	第I区全体図	11・12
第5図	RA001竪穴住居跡	13
第6図	RA001竪穴住居跡出土遺物	14
第7図	RD019土坑	14
第8図	RD020・021・022・023土坑	16
第9図	RD024土坑	16
第10図	RD019・020・024土坑出土遺物	17
第11図	RG504溝跡群（A群）	18
第12図	RG504溝跡群（B群）	19
第13図	RG504溝跡群（C群）	20
第14図	RG504溝跡群（D群）	20
第15図	RD1009・1010・1011土坑	22
第16図	RD1009土坑出土遺物	22
第17図	RG1009溝跡	23

第18図	RG1010溝跡	24
第19図	河道出土遺物(1)縄文前期・後期	26
第20図	河道出土遺物(2)弥生前期・後期・統縄文	27
第21図	河道出土遺物(3)石器1	28
第22図	遺物包含層出土遺物(1)縄文後期1	30
第23図	遺物包含層出土遺物(2)縄文後期2	31
第24図	遺物包含層出土遺物(3)縄文後期・晩期	32
第25図	遺物包含層出土遺物(4)弥生前期1	34
第26図	遺物包含層出土遺物(5)弥生前期2	35
第27図	遺物包含層出土遺物(6)弥生前期・後期	36
第28図	遺物包含層出土遺物(7)弥生後期	37
第29図	遺物包含層出土遺物(8)石器1	38
第30図	遺物包含層出土遺物(9)石器2	39
第31図	遺物包含層出土遺物(10)石器3	40
第32図	遺物包含層出土遺物(11)石器4	41
第33図	遺物包含層出土遺物(12)古代・中世	42
第34図	第Ⅱ区全体図	47・48
第35図	RD015・016・017・018土坑	52
第36図	RD005・013土坑出土遺物	52
第37図	埋設土器1	53
第38図	埋設土器2・3	54
第39図	RG1005・1006・1007溝跡	58
第40図	RG1008溝跡	59
第41図	遺物包含層出土遺物(1)縄文早期・前期・中期	62
第42図	遺物包含層出土遺物(2)縄文中期1	63
第43図	遺物包含層出土遺物(3)縄文中期2	64
第44図	遺物包含層出土遺物(4)縄文中期3	65
第45図	遺物包含層出土遺物(5)縄文中期4	66
第46図	遺物包含層出土遺物(6)縄文中期5	67
第47図	遺物包含層出土遺物(7)縄文後期・晩期	68
第48図	遺物包含層出土遺物(8)弥生前期1	69
第49図	遺物包含層出土遺物(9)弥生前期2	70
第50図	遺物包含層出土遺物(10)石器1	71
第51図	遺物包含層出土遺物(11)石器2	72
第52図	遺物包含層出土遺物(12)石器3	73
第53図	遺物包含層出土遺物(13)石器4	74
第54図	遺物包含層出土遺物(14)古代・中世	74

《遺物の表現について》

1. 土器

- a. 縄文時代早期に属する土器実測図・拓本は1/2スケールとし、そのほかの土器及び陶器類は1/3スケールとした。
- b. 挿図の土器配列については、モチーフ及び施文技法でまとめた。
- c. 縄文・弥生時代の土器で隆線・沈線の表現は上端・下端の実線・破線で表し、陰影は表現していない。

2. 石器

- a. 剥片石器の実測図は2/3とし、礫石器は1/3とした。
- b. 石器の展開順序は、基本的には左に表面（本文では背面とする）、中央に右側縁、右に裏面（本文中では腹面とする－主要剥離面）を並べ、必要に応じて側縁および縦断面下に横断面を付け加えた。
- c. 剥片石器の摩滅痕は網目スクリーントーンで示し、礫石器の自然面はドットで示した。

☆挿図中の記号・番号は、出土遺物の出土地点および層位を表す。

(例) I 4 - A 1, A₁

↓ ↓ ↓

※1 ※2 ※3

※1 調査座標原点RX±0 RY±0を起点として、X・Y両軸を50m毎に区切る大グリットを設定し、X軸線上を西から東へA・B・C…W・X・Y、Y軸線上を北から南へ1・2・3…23・24・25と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組合せを、大グリットと呼称した（第3・4図）。

※2 大グリットを2m毎に細分割し、小グリットを設定し大グリットの呼称を再び用いた。よって、大グリット-小グリットという組合せで、遺物の平面出土地点を2mごとに表示した。

(例) I 4 - A 1はRX-150 RY-100を北西隅とする2mグリットからの出土を示す。

※3 遺物の出土層位を表す。

I. 調査経過

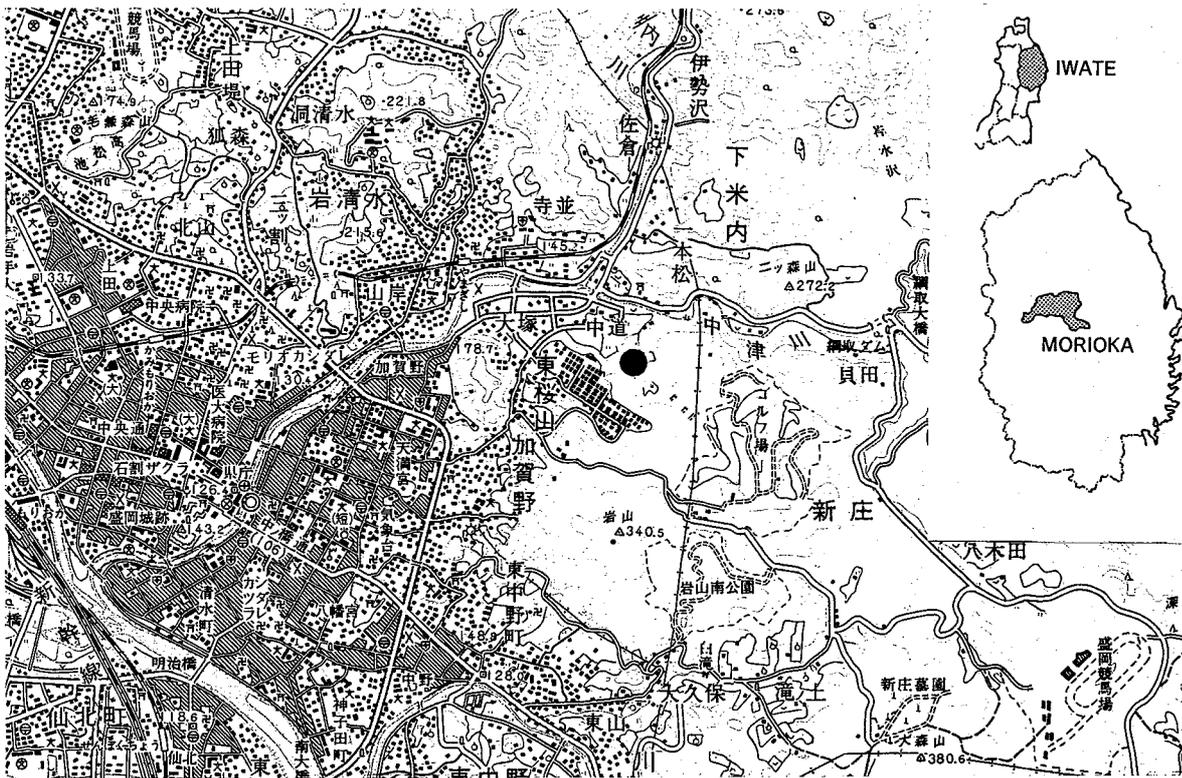
1. 調査経過

遺跡の位置 向田遺跡は、盛岡市浅岸字向田・上村地内に所在する。遺跡は、東方に位置する岩山（標高340.5m）北西斜面を開析する、通称「寺沢」沿いに発達する小規模な扇状地上に立地しており、現在でも扇頂部付近より湧水がみられる。扇頂部を望む丘陵斜面には寺沢遺跡が位置しているほか、既に消滅しているが南の丘陵上（現 つつじヶ丘団地）には縄文時代中期の集落遺跡である稲久保遺跡が位置する。

調査の概要 向田遺跡のほぼ全域が浅岸地区土地区画整理事業造成区域内であるため、盛岡市都市整備部区画整理課と盛岡市教育委員会文化課との協議により、遺跡推定範囲の約33,000㎡について発掘調査を実施することとなった。

遺跡範囲は、扇状地面全域に及び、扇状の半径は約150mである。調査の結果、地点より検出遺構・遺物が異なることから、本報告書では第Ⅰ区（扇状地形の上流域・扇頂～扇央部）、第Ⅱ区（中流域～下流域・扇央部～扇端部）の2区に分けて事実報告を掲載した。

11年度調査 平成11年度は、扇状地の第Ⅱ区にあたる第1～3次調査の2,600㎡について本調査を実施した。その結果、縄文時代中期の埋設土器、弥生時代初頭の土坑、古代・中世～近世にかけての溝跡、縄文時代前～後期の遺物包含層が確認された。



第1図 向田遺跡の位置 (1:50,000)

- 12年度調査** 平成12年度は、前年度同様、第Ⅱ区にあたる第4次調査の3,710㎡について本調査を実施した。その結果、縄文時代中期の埋設土器、縄文～弥生時代の土坑、古代～近世にかけての土坑及び溝跡、縄文時代中期及び弥生時代前期の遺物包含層が確認された。また、第Ⅰ区と第Ⅱ区の間にあたる第5次調査の約16,000㎡について試掘調査を実施した。第5次調査については、全面確認調査2,610㎡とトレンチによる確認調査1,040㎡を実施した結果、この区域は開田等による削平を受けており、また摩滅の著しい土器片が少量散布するのみで遺構は確認されなかったため、本調査範囲から除外することとした。
- 13年度調査** 平成13年度は、第Ⅱ区にあたる第9次調査の2,880㎡について本調査を実施した。その結果、弥生時代の陥し穴状土坑、中世～近世にかけての溝跡が確認された。また、第Ⅰ区においては、第9次調査を除く第6～11次調査の5,960㎡について本調査を実施した。その結果、弥生時代初頭の堅穴住居跡及び土坑、縄文時代の土坑、古代の畝跡、中世～近世にかけての溝跡、縄文時代前～後期、弥生時代初頭及び終末期の遺物包含層が確認された。
- 14年度調査** 平成14年度は、第Ⅰ区にあたる第12次調査の470㎡について本調査を実施した。その結果、縄文時代の土坑、近世の土坑墓、弥生時代終末期の遺物包含層が確認された。

2. 向田遺跡周辺の地形・地質

地 形 盛岡市東部は地質構造上、北上山地の主要な境界となる早池峰構造体の西縁部にあたる。この山地は、高森山（626m）を中心とする高森山山地と、朝島山（607m）を中心とする朝島山山地の中起伏山地、さらに西に続く大日向山山地、岩山（341m）や大森山（381m）を含む建石山山地などの小起伏山地および四十四田丘陵で構成される。

向田遺跡が所在する浅岸地区は、建石山山地北部の東麓と四十四田丘陵南縁が入り組む氾濫平野に位置する。平野部を囲む山地や丘陵地からは多量の土砂が流入し、平野部縁辺には小規模な扇状地・崖錐性扇状地が形成される。向田遺跡は、平野部南東端に形成された扇状地に立地し、遺跡が立地する扇状地基盤は、千枚岩・珪岩・蛇紋岩による小角礫を多量に含む黄褐色粘土質や礫層によって構成される。これらの堆積物は河川堆積物に起源を持つ中位段丘を覆い、中位段丘と扇状地堆積物との層理面付近より縄文時代早期末～前期初頭の遺物が出土することから、形成年代は縄文時代早期以降と考えられる。

地 質 上記した建石山山地の基盤岩は輝緑凝灰岩、粘板岩等からなる古生層が相当し、中野・川目地区を含む周辺地域では古生層に貫入する花崗閃緑岩が基盤となる。

中津川上流域は、輝緑凝灰岩など所謂「グリーンタフ」地帯にあり、凝灰岩層には縞状のチャートを介在させている。小貝沢地区付近ではどのような地層に含まれるのか明らかではないが頁岩が採集されている。中津川・米内川合流点付近に位置する薬師山・浅岸山（八木沢山）・永福寺山では局地的に蛇紋岩・チャートの分布がみられ、「ノロキ石」と地元で呼ばれる軟質の蛇紋岩を山麓及び斜面で多数採集することができる。

中津川・米内川の合流点付近から北上川との合流点に至る下流域には狭い沖積段丘が形成される。中津川・米内川合流点付近においては幾度となく河道が移動したために、段丘が削られて中州状の微高地が形成される。落合遺跡・大塚遺跡・前野遺跡は前記した微高地に立地し、柿ノ木平

遺跡・堰根遺跡・薬師社脇遺跡はさらに古い中位段丘面上に立地する。この段丘面は、基盤となる層が円礫など河川堆積物で構成され、礫層上にシルトが堆積し地表面に至る。堰根遺跡がのる段丘面（段丘Ⅰ）は下位より八戸火山灰、秋田駒ヶ岳噴出起源の火山灰（小岩井浮石）がシルト層上に堆積し、柿ノ木平遺跡・上村屋敷遺跡がのる段丘面（段丘Ⅱ）では、上記した火山灰の堆積がなく、地山は褐色シルトと円礫層によって構成される。

3. 周辺の遺跡

米内川流域 向田遺跡を含む中津川流域・小起伏山地末端の丘陵地には数多くの遺跡が分布している。中津川に合流する米内川は濁川とも呼ばれ、流域の大志田・畑・盲沢・上米内・中米内・豆門地区には流路に沿う小規模な沖積段丘が見られる。

米内川流域には多数の縄文～近世遺跡がある。縄文時代早期前葉の遺跡では、盲沢遺跡・向館遺跡・一本松熊ノ沢遺跡があり、少量ではあるが上記した遺跡において日計式押型文土器が出土している。一本松熊ノ沢遺跡は1967年に発掘調査が実施されており（草間、吉田、武田1968年）、押型文土器の他に白浜式・寺ノ沢式に類似する貝殻文土器が出土している。

縄文時代前期の遺跡では、米内川上流域に位置する畑遺跡で、大木2式を伴う竪穴住居跡が確認されている。遺構を伴うものではないが、上米内遺跡に隣接する向館遺跡より大木4式が、畑井野遺跡で大木6式が出土している。

中期になると遺跡数が増加し、規模が大きくなる傾向がある。代表的な遺跡として、畑井野遺跡・上米内遺跡・盲沢遺跡・大豆門遺跡がある。中期初頭～前葉を主体とする遺跡としては畑井野遺跡・大豆門遺跡があり、中葉～末葉にかけての遺跡としては上米内遺跡・盲沢遺跡がある。立地の面から見て特徴的なのは、中期初頭～前葉の遺跡が丘陵頂部に立地することに対し、中葉～末葉にかけての遺跡は前述した米内川に沿う小規模な沖積段丘上に立地することが多い。

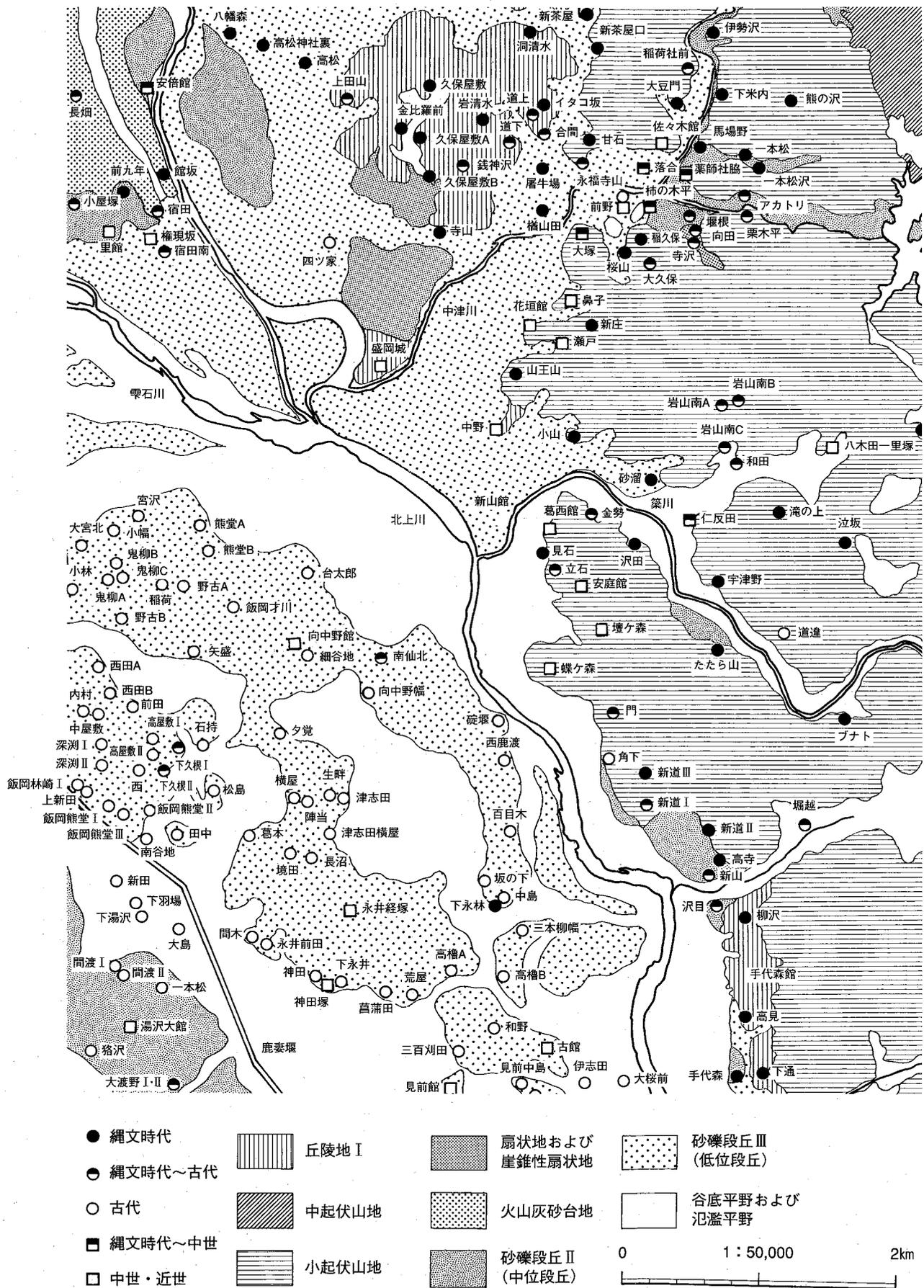
中津川流域 中津川は澄川とも呼ばれ、米内川と合流するまで渓谷が続き、浅岸・矢倉・小貝沢・滝の沢・網取に小規模な沖積段丘を形成するのみである。一方で、中津川上流域では激しい水流によって岩塊が浸食され、小規模な洞穴・岩陰が形成されている。主な洞穴・岩陰遺跡として中津川岩陰・バクチ穴洞穴などがあり、中津川岩陰遺跡からは縄文時代の土器片が採集されている。

中津川流域において遺跡が増加するのは、米内川との合流点付近からであり、主な遺跡として柿ノ木平遺跡・堰根遺跡・向田遺跡・前野遺跡・大塚遺跡・薬師社脇遺跡・落合遺跡・稲久保遺跡等がある。薬師社脇遺跡は、平成11～13年度にかけて宅地造成に伴う事前発掘調査が実施され、縄文時代早期中葉～後葉にかけての集落、古墳時代の土坑墓群、平安時代の集落等が発見されている。

大塚遺跡 浅岸地区区画整理事業区域内にある大塚遺跡は、同事業に伴い平成元～5年度にかけて発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代晩期（大洞C₂～A式）の小規模集落跡、古代～近世に至る遺構・遺物が確認されている。

前野遺跡 前野遺跡は、同事業に伴い平成8～9年度にかけて発掘調査が実施された。調査の結果、9世紀中葉を中心とする集落跡、12世紀以降の村落跡等が確認されている。（1999.3「前野遺跡」盛岡市、盛岡市教委）

柿ノ木平遺跡 柿ノ木平遺跡は昭和50年以降、宅地造成・個人住宅建設に伴う発掘調査が断続的に実施され、



第2図 地形分類と周辺の遺跡分布

平成8年度より同事業に伴う発掘調査が継続的に実施されている。これまでの調査で、縄文時代中期中葉から後葉の竪穴住居跡群、後期の土坑群等が確認されている。また、中世～近世の遺構・遺物も確認されている。

上村屋敷遺跡 上村屋敷遺跡は、同事業に伴い平成10～14年度にかけて発掘調査が実施された。中世～近世に至る遺構・遺物が確認された。16世紀代には向田・堰根地区から引水し、半円形の溝で囲郭された小規模城館跡が存在していたと推定される。また、17世紀以降については方形の環濠屋敷跡が確認されている。

堰根遺跡 堰根遺跡は、同事業に伴い平成8年度以降継続的に実施されている。これまでの調査で、縄文時代中期の集落跡、弥生時代終末期の竪穴住居跡が確認された。古代においても竪穴住居跡が数棟検出され、9世紀の集落跡が確認された。また、中世においては、竪穴建物跡や掘立柱建物跡が数棟確認されるなど、12～13世紀における村落の存在が確認されている。

4. 調査体制

調査体制 浅岸地区区画整理に関連する発掘調査事業は、文化課・区画整理課の両課で対応した。調査に関連する予算事務については区画整理課業務係、地権者交渉・調査日程の調整については同課補償係、調査と造成に係る工程の調整は同課工務係が文化課との協議を持って行い、埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の作成・刊行については文化課文化財係が担当した。

調査体制については次のとおりである。

<盛岡市都市整備部区画整理課>

- 〔課長〕 金子 均 (11～12年度)、川口 節雄 (13年度)、小野寺 哲
- 〔課長補佐〕 工藤 精一
- 〔業務係〕 中村 稔 (11～12年度)、中野 和孝、福島 洋子、上野 正一、佐藤 明彦 (11～12年度)
- 〔工務係〕 東野 盛夫、藤村 幸道、大坪 康宏 (11～12年度)、佐藤 茂士、小笠原 雅彦、
百岡 貴彦 (11～13年度)
- 〔補償係〕 梅田 裕一、宮崎 敏史、石川 雅章、伊東 恭平、岩崎 祐幸 (11～12年度)、太田 博
(11～13年度)、田中 修治、下田 眞備、吉田 大介

<盛岡市教育委員会文化課>

- 〔課長〕 大崎 琢夫
- 〔課長補佐〕 菊地 誠 (11～13年度)、川村 昇子
- 〔副主幹〕 高橋 清明
- 〔文化財係〕 亀山 助正 (11年度)、千田 和文、似内 啓邦、室野 秀文、菊池 与志和 (11年度)、
津嶋 知弘、三浦 陽一、神原 雄一郎、藤村 茂克、今野 公顕、花井 正香、
佐々木 亮二、平澤 祐子 (11～13年度)、仁杉 幸子 (11～13年度)、野口 律子、
格矢 幸吉 (11～13年度)、北田 公子、安井 千栄子 (11年度)、佐々木 紀子、
岩城 志麻、松川 光海、阿部 徳乃、久保田 さやか

また、調査の実施及び整理にあたり下記の方々より多大な御援助と御協力を賜った。御芳名記して深く謝意を表する（五十音順、敬称略）。

<地権者>

浅沼 権造、熱海 絹子、伊東 順子、因幡 つえ子、因幡 登喜夫、因幡 芳男、岩根 多喜男、
上野 道雄、上村 與太郎、上村 仁左衛門、江原 潔、岡沼 博、小川 功、小川 勉、
川村 浩子、川村 スギ、菊地 博、木村 正、國香 恒子、久保田 輝子、小林 博、小林 正敏、
小林 興蔵、佐々木 由太郎、高瀬 賢悦、高橋 良治、竹ヶ原 稔、長岡 秀夫、長岡 覚、
長岡 守、長岡 三雄、藤島 國男、松井 富仁男、三浦 絹子、村井 和子、村井 進、
山本 正敏、吉田 重男、吉田 博

<調査協力者>

阿部 和平、上村 平吉、太田 栄、大森 卓、小林 博、佐藤 立男、田澤 文雄、千葉 清、
長岡 秀夫、中野 安助

<発掘調査・室内整理作業>

池田 正子、石井 広行、石角 奈緒子、泉山 紀代子、伊藤 敬子、井上 志真子、岩根 陽子、
上村 百合子、内山 陽子、遠藤 ユキエ、及川 京子、大鹿 ミヨ子、大森 サナ、大森 祐子、
岡本 美知子、乙部 佳寿代、小原 一成、片島 智恵子、鹿糠 和男、鹿野 奈保美、川上 昌子、
川島 大典、川村 久美子、川村 明子、菊地 泰乃、菊池 美枝子、北口 智里、久慈 玲子、
小林 勢子、小林 ヤヲ、小平 信子、小松 愛子、今田 峰子、斎藤 正二、佐々木 幸子、
佐々木 千景、佐々木 正行、佐藤 和子、佐藤 誠也、佐藤 美智子、澤野 むつ子、四戸 孝丸、
下河原 潤一、白澤 和子、鈴木 ユウ子、高橋 ツヤ、高橋 弘子、高橋 美恵子、立花 武良、
立花 裕、館野 民子、種子 孝三郎、玉井 真由美、千葉 ふさ子、千葉 留里子、千葉 美知、
筒治 悦子、栃澤 等、長岡 ミエ、中島 京子、中田 美奈子、長沼 有紀子、新村 勝雄、
引木 宇吉、日野杉 節子、平野 淑子、深野 章、福田 香乃、藤澤 真奈江、藤田 友子、
細田 省三、細田 幸美、前島 多栄子、三浦 千鶴子、三浦 亮太、村山 伊津子、百岡 峰子、
八重樫 信也、矢羽々 妙子、山崎 絹子、結城 ひろみ、吉田 貴美、吉田 寿吉、米山 徹、
渡辺 博子

〔岩手県立大学学生〕川上 輝、富山 武史、前田 敏幸

〔盛岡大学学生〕竹内 毅匡、増山 光祐

〔早稲田大学学生〕丹野 智之

<御指導・御助言>

相原 康二（岩手県立図書館）、井上 雅孝（滝沢村教育委員会）、日下 和寿（岩手県教育委員会）、
佐藤 嘉広（岩手県立博物館）、高瀬 克範（東京都立大学）、中村 良幸（大迫町教育委員会）、
高木 晃（財団法人岩手県埋蔵文化財センター）



第3図 浅岸遺跡群全体図

Ⅱ. 調査内容

1. 第Ⅰ区調査（第6～8・10～12次）

位置 第Ⅰ区調査区は、北西へ傾斜する扇状地形の扇頂～扇中部にかけての地区で、北縁には沢（寺沢）が北西方向に流れる。また、第Ⅰ区中央南東部から北西部にかけて沢が入り込んでおり、沢筋に沿って現在の道路が敷設されている。調査区は前記した道路を境界に、西調査区（第6次調査区）、東調査区（第7・8・10・11・12次調査区）の2区に分けた。

第Ⅰ区は平成13・14年度の2ヵ年にわたり調査が実施され、総調査面積は6,430㎡で調査区内の標高地は153.6～149.4mをはかる。各調査区の期間および調査面積については以下のとおりである。

西調査区

第6次調査 調査期間 平成13年4月4日～5月30日 調査面積2,300㎡

東調査区

第7次調査 調査期間 平成13年4月4日～5月30日 調査面積720㎡

第8次調査 調査期間 平成13年6月25日～7月30日 調査面積1,020㎡

第10次調査 調査期間 平成13年9月17日～10月9日 調査面積450㎡

第11次調査 調査期間 平成13年10月9日～11月16日 調査面積1,940㎡

第12次調査 調査期間 平成14年5月7日～5月30日 調査面積470㎡

なお、第Ⅰ区北西辺から第Ⅱ区までの地区（第3図）は過去の開田により大きく掘削されており、試掘調査においても遺構等は検出されなかったため本調査は実施していない。

（1）縄文・弥生時代の遺構と遺物

検出状況 第Ⅰ区の基本層序は、小角礫を多量に含む黒褐色と暗褐色土による混合土（Ⅰa層）、小角礫を多量に含む褐色土（Ⅱa・b層）、礫を含まない黒褐色土（Ⅲa・b層）、礫を含まない暗褐色土層（Ⅳ層）、礫を多量に含む褐色シルト層（Ⅴ層）、スコリア粒を含む黒褐色土（Ⅵ層）の6層に大別され、遺構検出は、Ⅲ・Ⅳ層上面およびⅤ層で行われた。

縄文・弥生時代の竪穴住居跡・土坑跡（RA001・RD019～024）の上層にはⅡ層に相当する堆積土がみられることから、掘込面はⅢ層上面と考えられる。

古代の遺構については、畝状の溝跡群（RG504）を除いては確認されなかった。遺物についてもⅡ層検出面などで散見された程度である。

中・近世の土坑跡・溝跡（RD1009～1011・RG1009・1010）の埋土上部には、丘陵地斜面や寺沢上流より流入した砂礫が堆積する。Ⅲ層上面で遺構検出をおこなったが、Ⅱ層より上層から掘り込まれたものが大部分と考えられる。

遺物はⅡ・Ⅲ層を中心に出土している。Ⅱ層には縄文時代前期～晩期・弥生時代・古代・中世・近世に至る時代・時期の遺物が磨滅した状態で出土していることから、周囲から流入した遺物と考

えられる。Ⅲ層からは縄文時代後期および弥生時代前期～後期を主体とする遺物が出土する。また、調査区東端に現在でも流れているが、沢に堆積した堆積土より上流から流出してきたものと考えられる縄文・弥生時代の遺物が出土する。

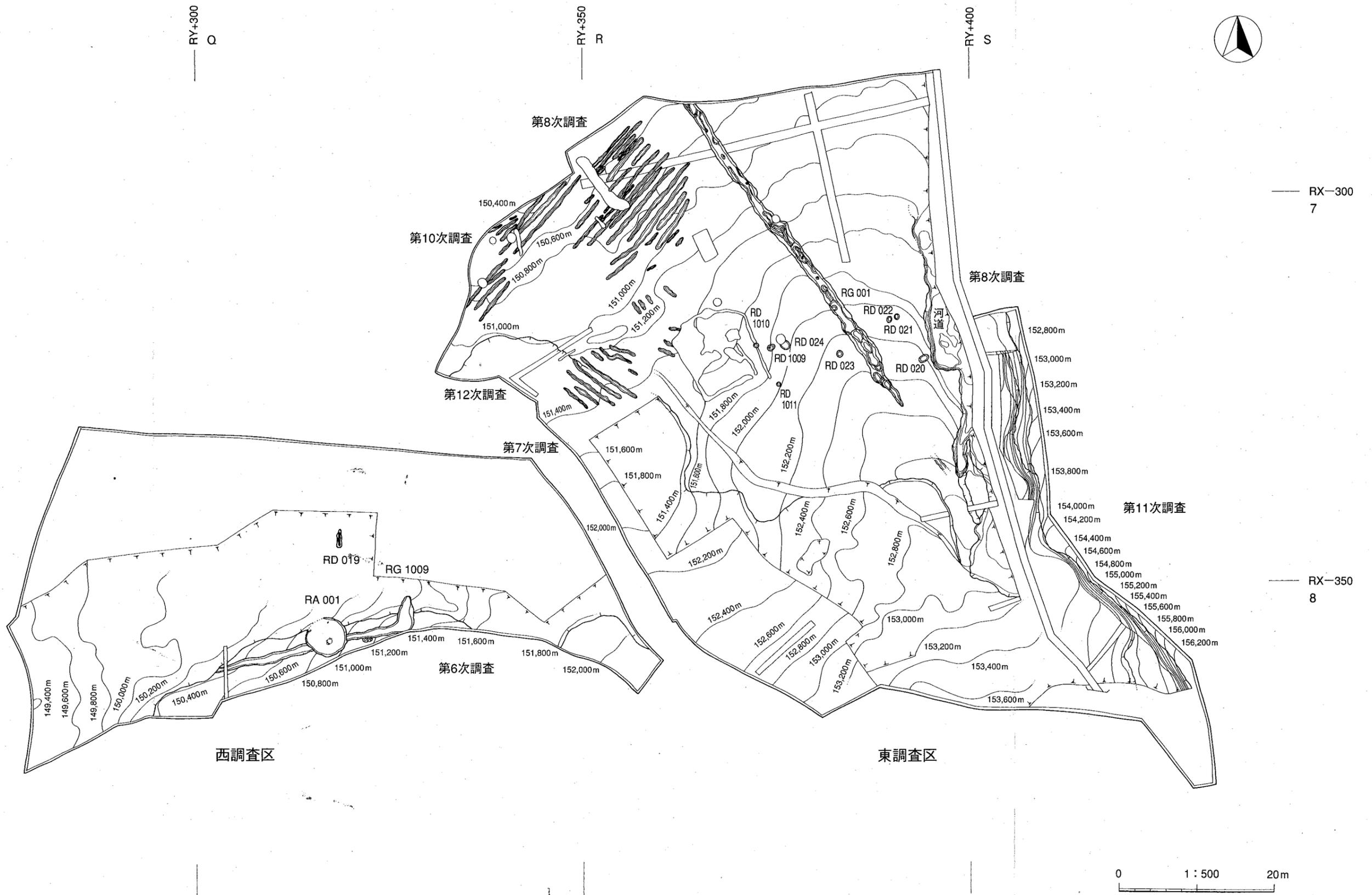
なお、第Ⅰ区の南東には浅岸山の南斜面が広がり、その斜面部には縄文時代早期～晩期、弥生時代、古代に至る時期の遺物が散布しているほか、寺沢上流の沢を望む丘陵斜面部（寺沢遺跡）においても縄文時代後期・晩期の遺物が散布している。これらの遺跡縁辺部は、沢の浸食を現在でも受けており、斜面崩壊土から遺物が採集されることがある。このことから、向田遺跡の包含層より出土した遺物の多くが、上記した遺跡からの二次堆積であることが考えられた。

検出遺構 検出された遺構は、縄文時代の土坑5基（RD020～024）、弥生時代の竪穴住居跡1棟（RA001）、土坑1基（RD019）、平安時代の溝跡群（RG504-A～D群）、中・近世の土坑3基（RD1009～1011）、溝跡2条（RG1009～1010）、ピット1口（P1）である。

縄文時代 縄文時代と思われる遺構は、土坑5基（RD020～024）が検出されており、第11次調査区北部付近に集中する。遺構内からは、後期中葉の十腰内Ⅱ・Ⅲ式期に相当する深鉢形土器などが出土している。また遺構外では、前期初頭の大木1式？土器がⅥ層上面付近より出土したほか、後期前葉の十腰内Ⅰ式、晩期前葉の大洞BC式、晩期中葉の大洞C₂式、晩期後葉の大洞A式の土器がⅡ・Ⅲ層を中心に調査区全域にわたって出土している。一様に摩滅が著しく、出土層位も一定したものではないことから、上流域より流出してきた遺物である可能性が考えられる。

弥生時代 弥生時代の遺構では、竪穴住居跡1棟（RA001）、土坑1基（RD019）が検出されており、上記した遺構内より弥生時代前期に相当する砂沢式の甕形土器・鉢形土器が出土している。また遺構外ではあるが、上記の弥生時代前期の砂沢式のほか、同じく前期の山王Ⅲ層式期古段階、後期の天王山式期新段階・赤穴式期古段階の土器が河道または遺物包含層より出土している。縄文時代と同様に、遺物は調査区全域より出土しており、摩滅は著しく、出土層位も一定したものではない。

続縄文時代 続縄文時代の遺物は極めて僅少ではあるが、後北C₂式土器が第11次調査区の河道より出土している。摩滅が著しく、上流域より流出してきた遺物であることが推測される。



第4図 第I区調査全体図

RA001 竪穴住居跡 (第5図)

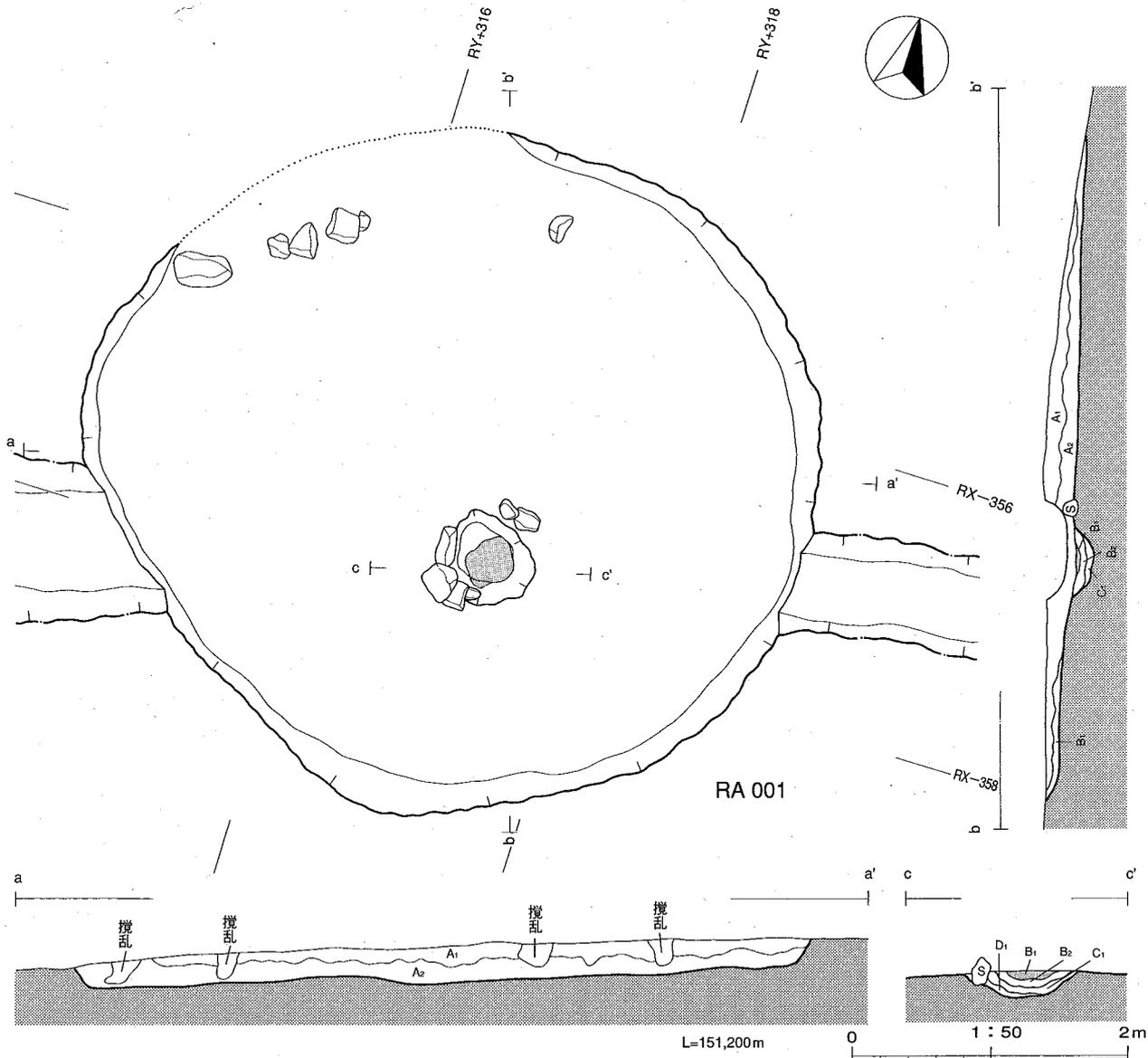
位置 西調査区南辺中央 平面形 不整形円形
 規模 東-西 上端5.34m・下端5.04m、南-北 上端4.86m・下端4.66m
 重複関係 RG1009溝跡に切られる。掘込面 削平 検出面 III層上面
 埋土 自然堆積による。A層は黒褐色土を主体とする層で、A₁・A₂の2層に細別される。

A層-A₁層は、黒褐色土を主体に塊状の暗褐色土を少量含み、A₂層は黒褐色土と漆黒に近い黒色土が混合する層である。各層には少量の炭化物細片が含まれ、全体的にややかたくしめる層である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは、0.10~0.18mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。

床面の状態 はほぼ平坦

石囲炉 中央南寄りの位置から石囲炉が検出されている。炉は床面を約0.18m程皿状に掘りくぼめられ、直径約0.64~0.96mの不整形を呈す。炉内の埋土はB₁~2・C₁・D₁層の4層に細分される。B₁層上

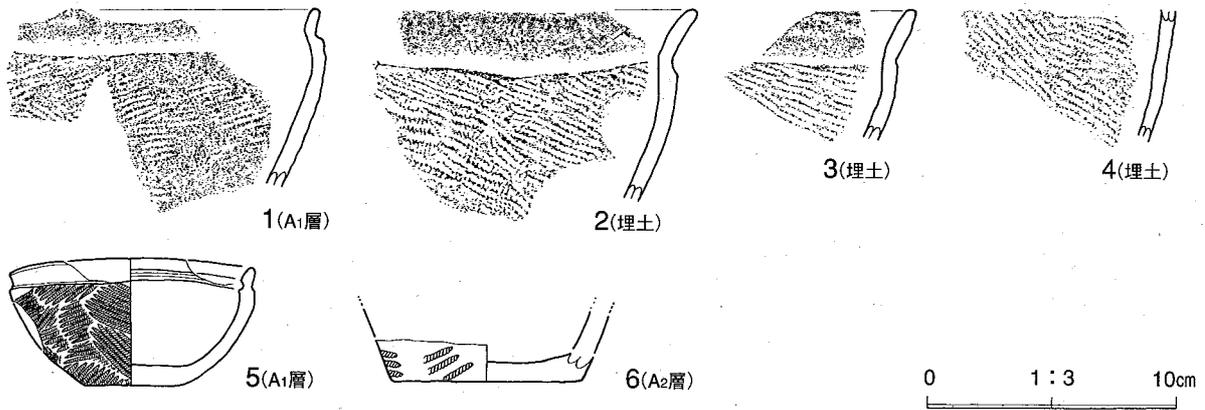


第5図 RA001 竪穴住居跡

面が火床面で、焼土は暗赤褐色を呈する。B₂層は熱浸透層である。C₁層は黒褐色土を主体とし、層上面に熱浸透がみられる。D₁層は黒褐色土を主体に小塊状の暗褐色土を含む。

遺物の出土状況 A₁層を中心に、弥生時代前期の甕・鉢が出土している。

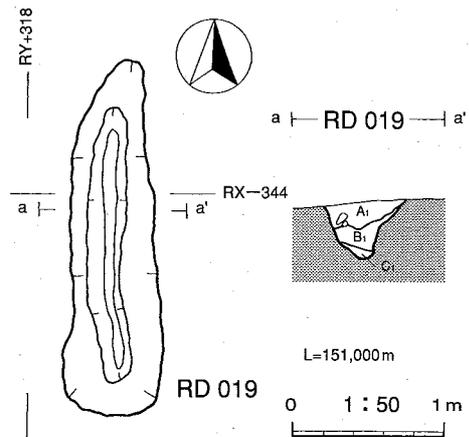
出土遺物 (第6図1~6) 1~4・6は口縁部が外傾し、頸部に段が設けられる器形の甕形土器である。口頸部は無文帯となり、体部には横走縄文が施文される。1は口縁部に小突起を持ち、2・3の口唇部は平坦に調整される。4は体部片で、6は底部である。5は口縁部が外傾し、頸部に段が設けられる器形の鉢形土器である。口唇部は平坦に調整され、口頸部は無文帯となるが、内面の体部との境に1条の平行沈線が入る。体部には横走縄文が施文される。



第6図 RA001 竪穴住居跡出土遺物

RD019土坑 (第7図)

位置 西調査区中央 **平面形** 不整長方形
主軸方向 N 2° E
規模 長軸上端2.36m・下端1.58m、
 短軸上端0.56m・下端0.08m
重複関係 なし **掘込面** 削平
検出面 V層上面
埋土 自然堆積による。A₁~C₁層の3層に大別され、
 A₁・C₁層は黒褐色土を主体に、灰黄褐色を呈した粒~塊状のシルトを少量含む。B₁層は褐色シルトを主体に、粒状の黒褐色土を少量含む。なお、堆積土全体がかたくしまる。



第7図 RD019土坑

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.38~0.40mをはかり、中端付近に段を持ちながら上面が大きく開く。

底面の状態 ゆるやかな起伏がある。

遺物の出土状況 第10図1・3が出土しているが、接合した破片は埋土全体からの出土で、層位的な出土状況を示したものはない。

出土遺物 (第10図1・3) 弥生時代前期の土器が出土している。1は底部欠損の体部中央で屈曲する器形の鉢形土器で、口縁部~体部上半は外傾し、体部下半は内湾する。口唇部は平坦に調整され、口縁部

および体部下半には変形工字文が施される。口縁部では文様単位の節目に2個1対の粘土粒が貼付され、器面・文様にはミガキが施される。胎土は細密で、雲母を含む。3は頸部が屈曲する鉢形土器の体部片である。口頸部は無文帯となり、体部には横走縄文が施される。

RD020土坑(第8図)

位置 東調査区東部中央 平面形 不整楕円形 主軸方向 N45° E
規模 長軸上端1.26m・下端0.98m、短軸上端0.76m・下端0.48m。
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 IV層上面
埋土 自然堆積による。黒褐色土を主体とするA層は2層に細別され、A₁層は炭化物を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.20~0.28mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 ほぼ平坦 遺物の出土状況 A₁層より、縄文時代後期の深鉢が出土している。
出土遺物(第10図2) 2は口縁部まで外反する器形の深鉢形土器で、体部下半~底部を欠く。口唇部は平坦に調整され、体部上半には、平行沈線にS字状沈線を加飾した文様が施される。文様帯の地文には磨消縄文が施される。

RD021土坑(第8図)

位置 東調査区東部中央 平面形 不整楕円形 主軸方向 N5° E
規模 長軸上端0.76m・下端0.58m、短軸上端0.56m・下端0.36m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 IV層上面
埋土 自然堆積による。黒褐色土を主体に粒状の褐色シルトを含む単層(A₁層)である。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.18~0.20mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 ほぼ平坦 出土遺物 なし

RD022土坑(第8図)

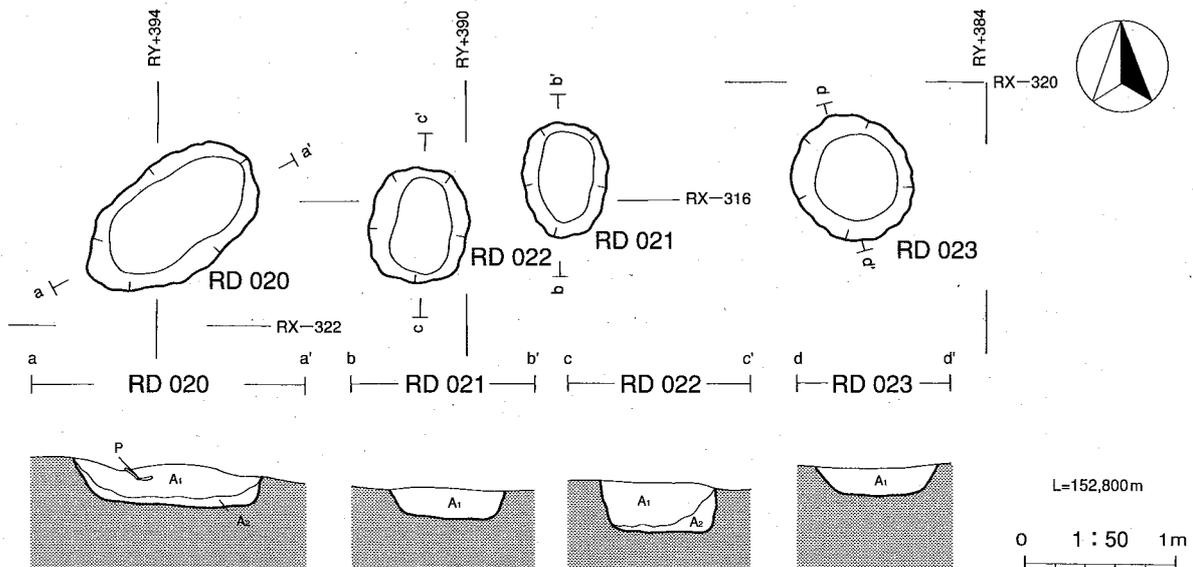
位置 東調査区東部中央 平面形 不整楕円形 主軸方向 N2° E
規模 長軸上端0.76m・下端0.62m、短軸上端0.64m・下端0.38m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 IV層上面
埋土 自然堆積による。A層は2層に細別され、A₁層は黒褐色土を主体に、粒~塊状の暗褐色土を少量含む。A₂層は暗褐色土を主体に粒~塊状の黄褐色土と黒褐色土を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.30~0.34mをはかり、壁はほぼ直壁である。
底面の状態 ほぼ平坦 出土遺物 なし

RD023土坑(第8図)

位置 東調査区東部中央 平面形 ほぼ円形
規模 東-西 上端0.78m・下端0.54m、南-北 上端0.84m・下端0.54m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 IV層上面
埋土 自然堆積による。暗褐色土を主体に粒~塊状の褐色シルトを含む単層(A₁層)で、少量の炭化物を含む。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.18~0.20mをはかり、壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。

底面の状態 ほぼ平坦 出土遺物 なし



第8図 RD 020、021、022、023 土坑

RD 024 土坑 (第9図)

位置 東調査区中央付近 平面形 ほぼ円形

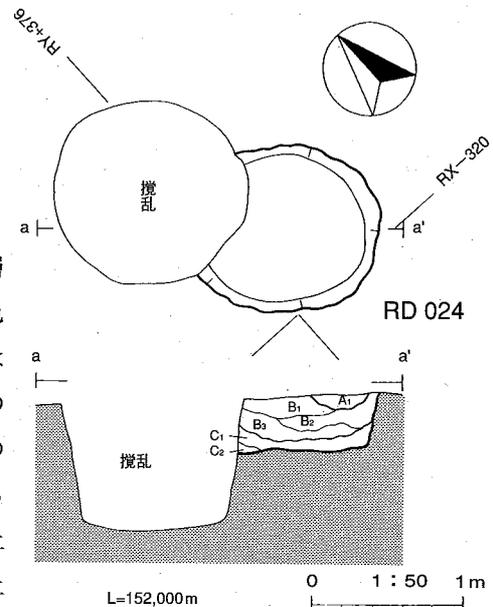
規模 東-西 上端1.10m・下端0.98m

南-北 上端0.92m・下端0.84m

重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 IV層上面

埋土 自然堆積による。A・B・C層に大別され、B層は3層、C層は2層に細別される。A₁層は黒褐色土を主体に、塊状の暗褐色土と角礫を含む。B層は暗褐色土を主体とする層で、B₁層は粒~小塊状の褐色シルト・黒褐色土を含み、B₂層は粒~塊状の黒褐色土を含む。B₃層はB₂層に近似する層であるが、やや明るい黒褐色土粒を含む。C層は黒褐色土を主体とする層で、C₁層は粒~小塊状の暗褐色土と粒状の黄褐色土を含み、C₂層は粒~塊状の暗褐色土を含む層である。



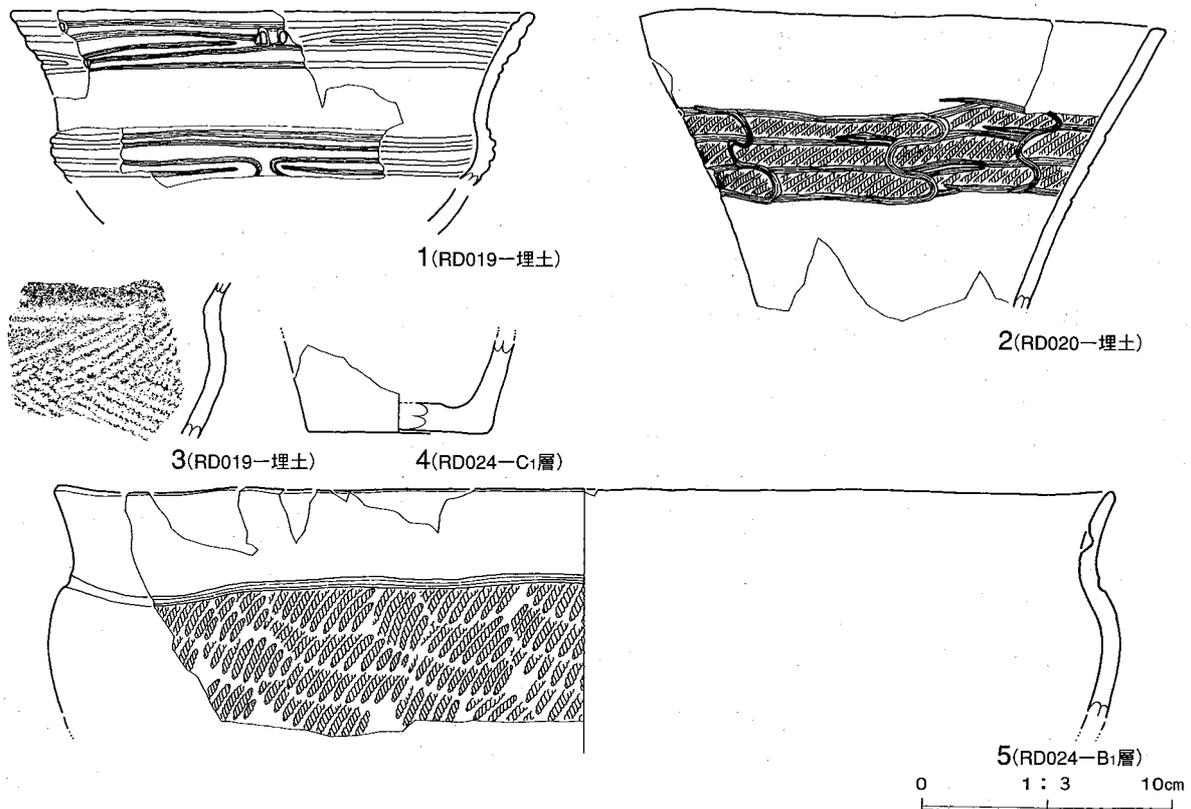
第9図 RD 024 土坑

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.36~0.40mをはかり、壁はほぼ直壁である。

底面の状態 ほぼ平坦

遺物の出土状況 B₁・C₁層より、縄文時代後期の深鉢、弥生時代前期の甕などが出土している。

出土遺物 (第10図 4・5) 4は無文の深鉢形土器の底部である。5は口縁部が外傾し、頸部に段が設けられる甕形土器で、口縁部~体部上半にかけて残存している。口唇部は平坦に調整され、口頸部は無文



第10図 RD 019、020、024 土坑出土遺物

帯となるが、体部との境に1条の平行沈線が入る。体部には横走縄文が施文される。

(2) 古代の遺構と遺物

平安時代 平安時代の遺構として畝状の溝跡群（RG504 A～D群）が東調査区北西部で検出されている。

遺物は、僅少ではあるが土師器片が出土しており、主にA群溝跡群より出土した。また、遺構外ではあるが、東調査区南東の遺物包含層よりあかやき土器が出土している。

周辺遺跡では、北に隣接する堰根遺跡より平安時代（9世紀中葉～10世紀前葉）の集落が確認されている。堰根遺跡は現在調査中であるため、全体の規模は明らかでないが、30棟前後の堅穴住居跡や溝跡が検出されている。西に位置する柿ノ木平遺跡や前野遺跡、中津川を挟み対岸に位置する薬師社脇遺跡でも9世紀中葉～10世紀前葉にかけての集落が確認されていることから、向田遺跡で検出された畝状遺構と関連付けることが可能と考えられる。

RG504 溝跡群（A～D群）（第11～14図）

RG504溝跡群は極めて浅い溝が並列する、所謂「畝状遺構」である。位置・主軸方向・平面形・規模の相違からA～D群に大別される。それぞれ他の遺構との重複は認められなかった。掘込面は削平され、遺構検出は遺物包含層であるⅡ～Ⅲ層上面で行われた。埋土は灰白色火山灰を主体とする単層となり、A群では若干の炭化物が含まれる。壁はゆるやかに上面に立ち上がり、底面はほぼ平坦となるが、掘込みは極めて浅く、1～2cm程度である。

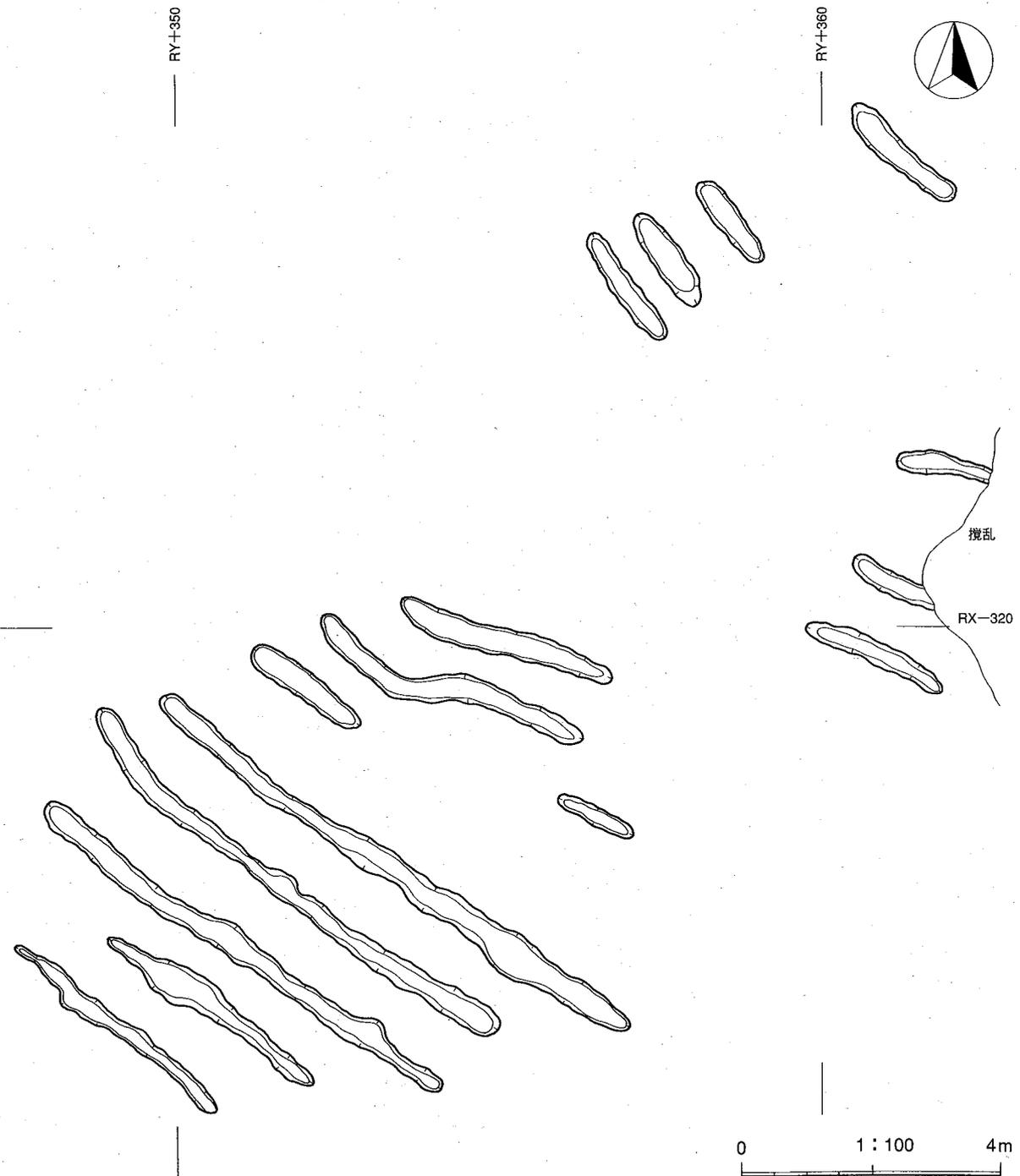
遺物は図示していないが、A・B群に集中して出土している。A群では縄文時代中期～後期・弥生時代前期・平安時代、B群では縄文時代前期～後期・弥生時代前期～後期の土器片がそれぞれ数片出土している。

各群の詳細は次のとおりである。

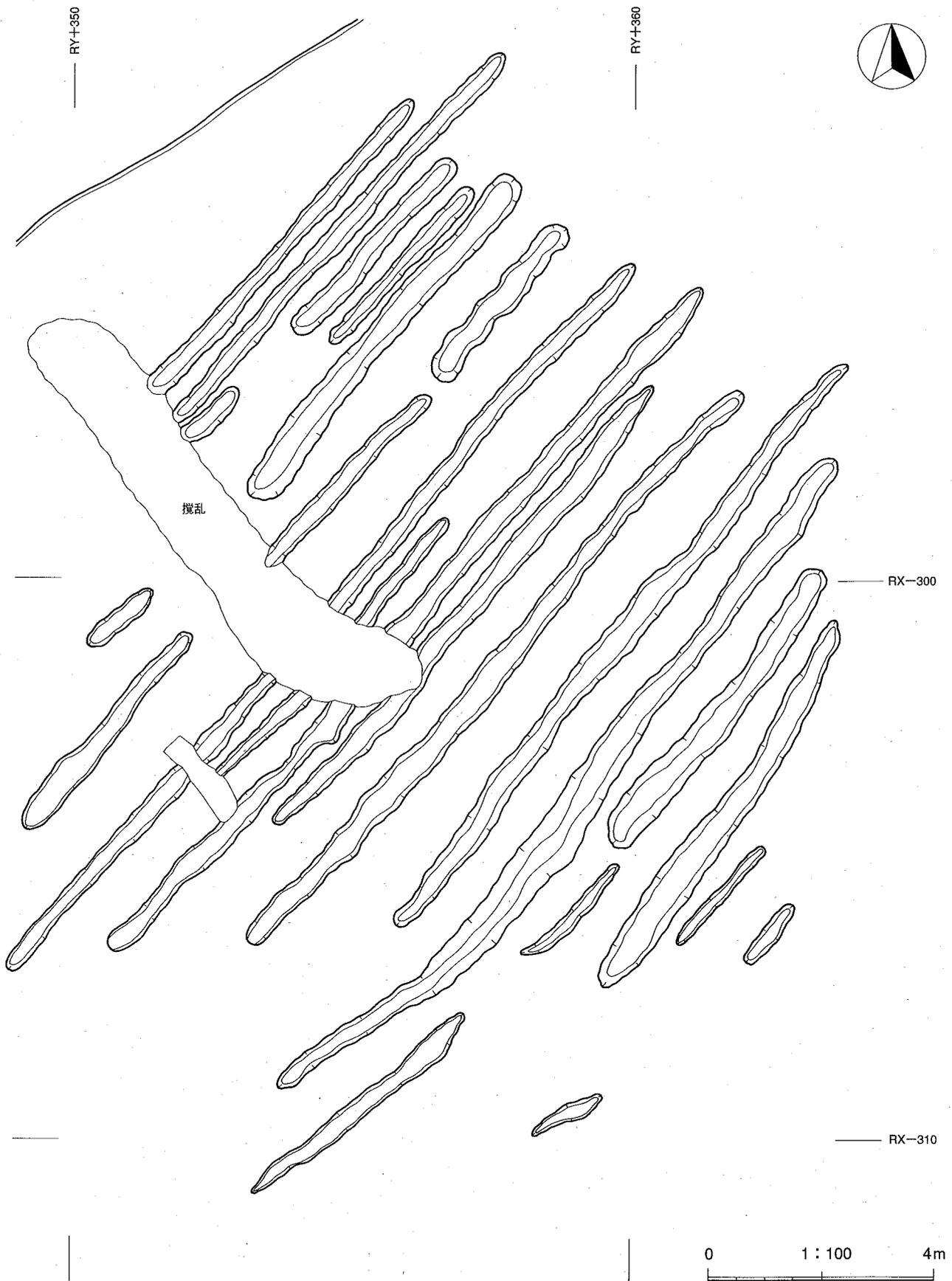
A群 (第11図)

位置 東調査区北西部 平面形 北西から南東に15条並列する。

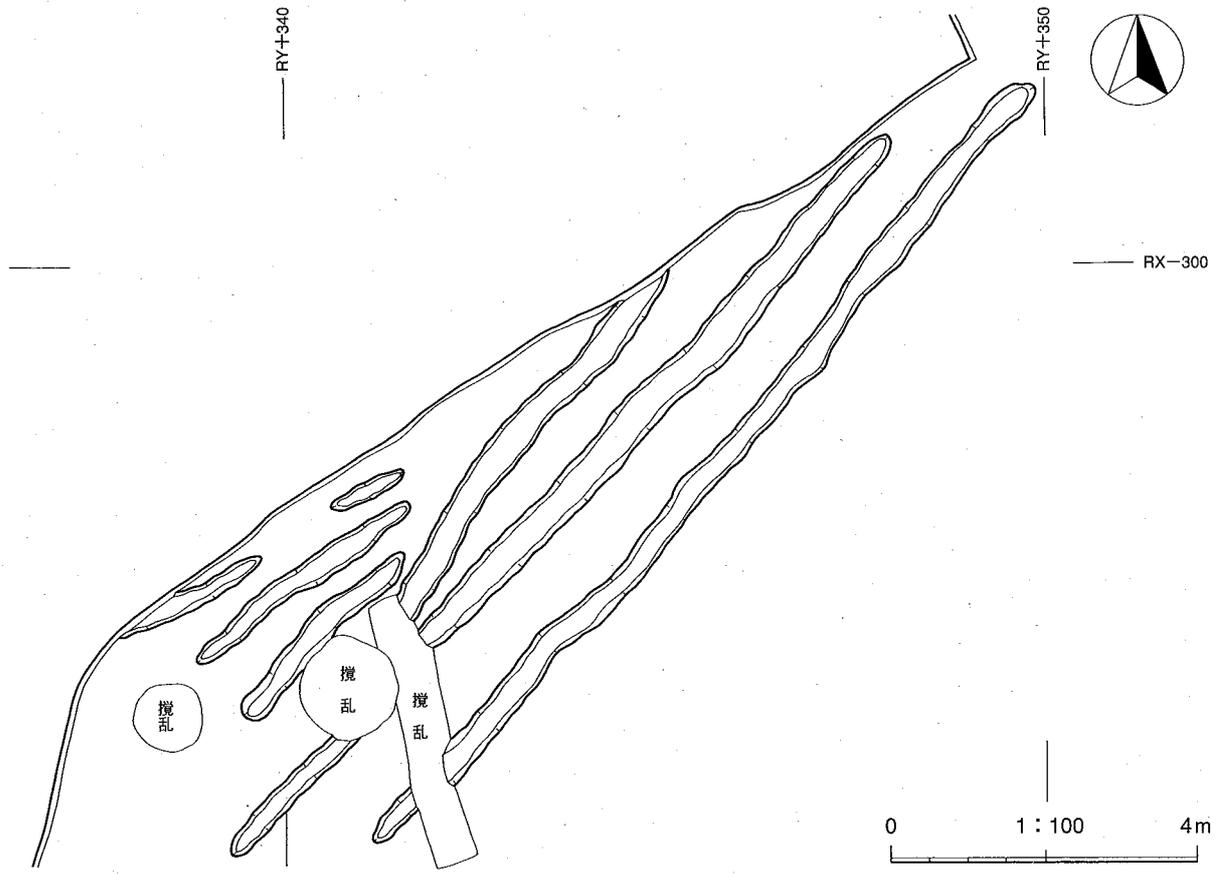
規模 長さは1条あたり1.32～8.88mを、幅は上端0.24～0.60m・下端0.12～0.44mをはかる。



第11図 RG504 溝跡群 (A群)



第12図 RG504 溝跡群 (B群)

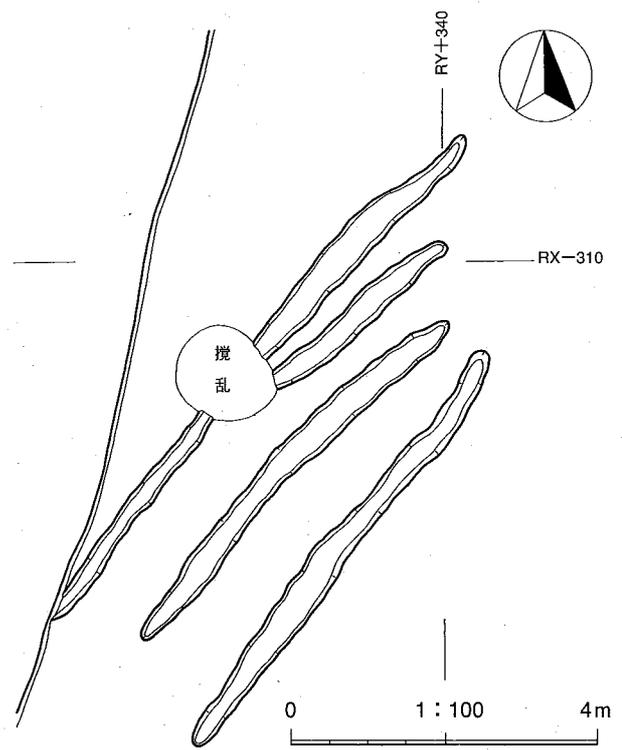


第13図 RG504 溝跡群 (C群)

B群 (第12図)
 位置 東調査区北西部
 平面形 北東から南西に17条並列する。
 規模 長さは1条あたり1.40~2.96mを、幅は上端0.16~0.88m・下端0.06~0.44mをはかる。

C群 (第13図)
 位置 東調査区北西部
 平面形 北東から南西に6条並列する。
 規模 長さは1条あたり1.08~13.2mを、幅は上端0.16~0.56m・下端0.08~0.36mをはかる。

D群 (第14図)
 位置 東調査区北西部
 平面形 北東から南西に4条並列する。



第14図 RG504 溝跡群 (D群)

規 模 長さは1条あたり2.92～8.36mを、幅は上端0.24～0.48m・下端0.12～0.36mをはかる。

(3) 中・近世の遺構と遺物

中世～近世 中世～近世と推定される遺構として、土坑3基(RD1009～1011)、溝跡2条(RG1009・1010)が検出されている。RD1009土坑墓からは、副葬品として「古寛永通寶」・「新寛永通寶」が計6枚出土しており、新旧の流通銭貨が共存することから17世紀末葉以降の土坑墓である可能性が考えられる。また、遺構外ではあるが、東調査区西部の遺物包含層より16世紀後葉の瀬戸・美濃の「灰釉折縁皿」が出土している。

RD1009土坑(第15図)

位 置 東調査区中央部 平面形 不整楕円形 主軸方向 N65° E

規 模 長軸上端1.04m・下端0.80m、短軸上端0.68m・下端0.50m

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 IV層上面

埋 土 人為堆積による。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.12～0.17mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態 ゆるやかな起伏がある。

出土状況 底面付近より、横位に屈葬された人骨と寛永通寶が6枚出土している。

出土遺物(第16図) 1～3は(古)寛永通寶で、4～6は(新)寛永通寶である。

RD1010土坑(第15図)

位 置 東調査区中央部 平面形 不整円形

規 模 東-西 上端0.66m・下端0.44m、南-北 上端0.62m・下端0.34m

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 IV層上面

埋 土 人為堆積による。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.34～0.40mをはかり、壁はほぼ直壁である。

底面の状態 ほぼ平坦 出土状況 底面付近より、人骨頭部の一部が出土している。

出土遺物 なし

RD1011土坑(第15図)

位 置 東調査区中央部 平面形 不整円形

規 模 東-西 上端0.58m・下端0.37m、南-北 上端0.51m・下端0.33m

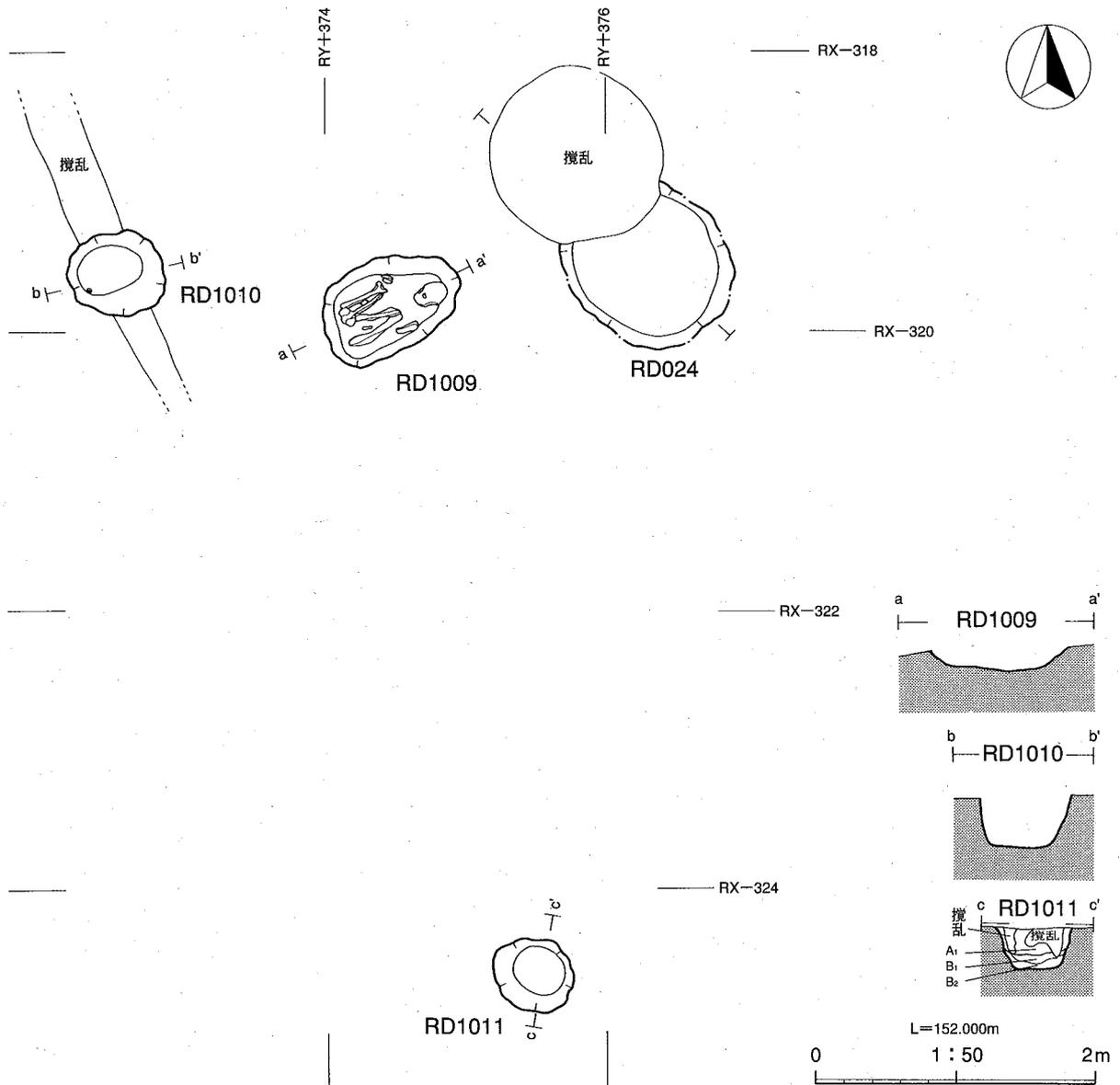
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 IV層上面

埋 土 人為堆積による。A・B層の2層に大別され、B層はさらに2層に細別される。A₁層は焼土を含む黄褐色シルトを主体、B層は黒褐色土を主体とする層で、B₁層に炭化物が含まれる。

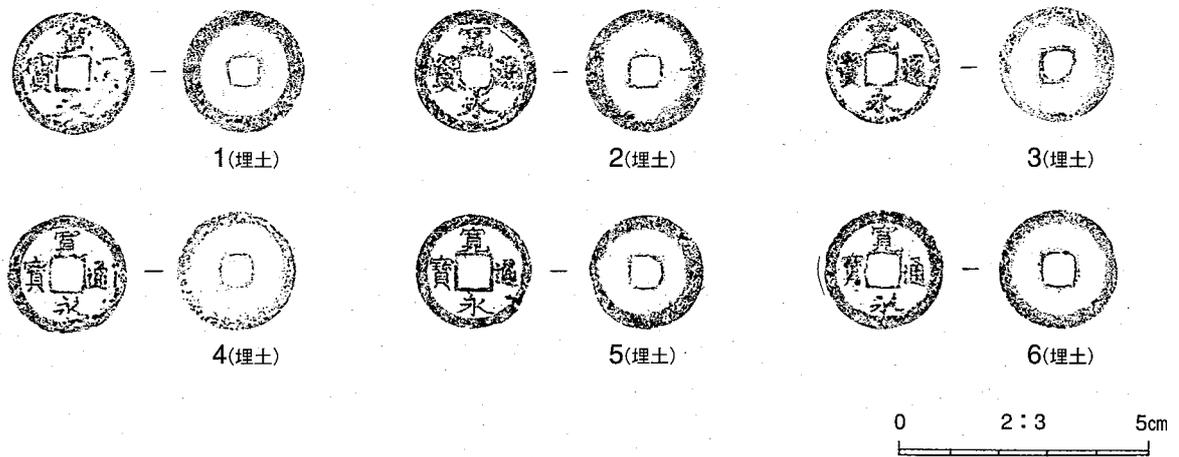
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.30～0.31mをはかり、壁は段を持って直壁気味に立ち上がる。

底面の状態 ほぼ平坦

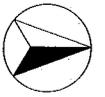
出土遺物 なし



第15图 RD1009. 1010. 1011土坑



第16图 RD1009土坑 出土遗物

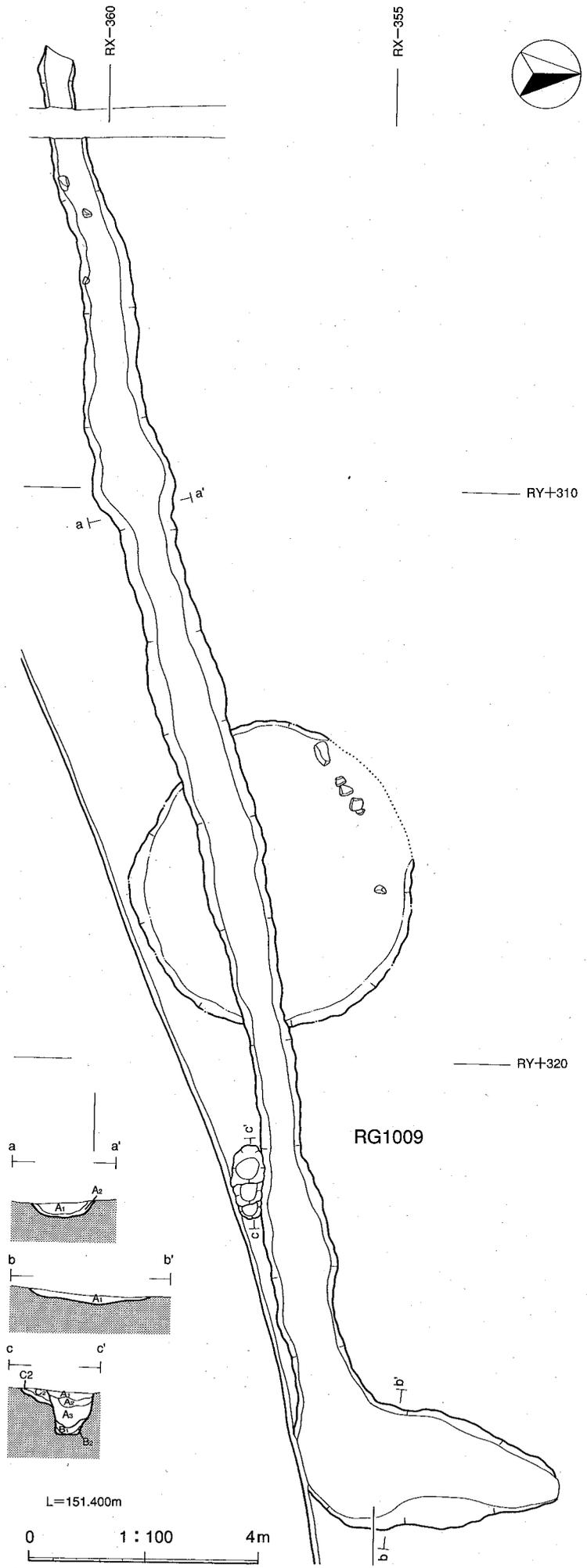


RG1009溝跡 (第17図)

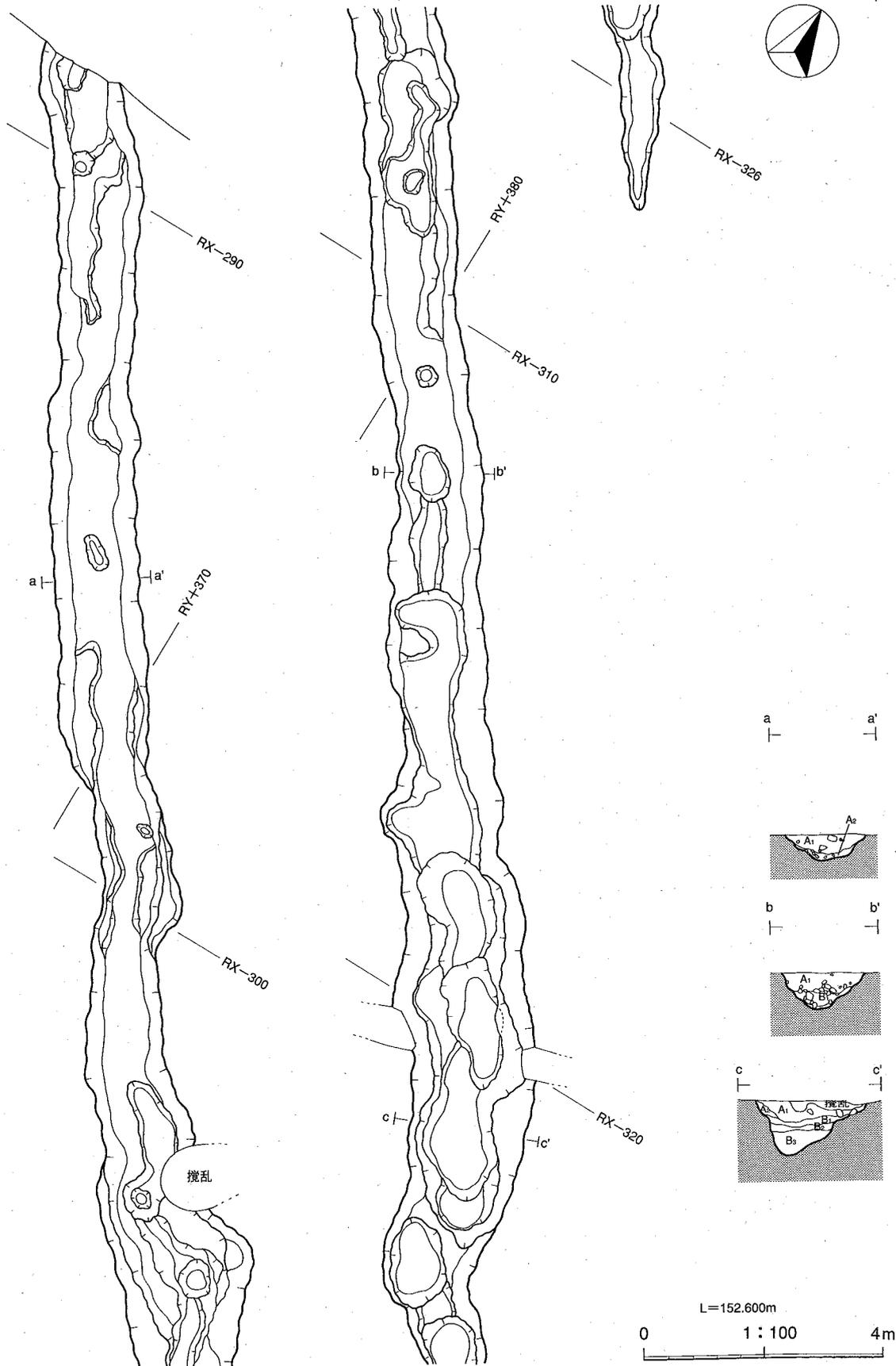
- 位置 西調査区南辺
- 平面形 溝東端で屈曲し、西端付近は攪乱される。
- 規模 長さは総延長29.6mをはかり、幅は上端0.52~2.16m・下端0.40~1.96mをはかる。
- 重複関係 RA001を切る。
- 掘込面 削平
- 検出面 III層上面
- 埋土 自然堆積による。A層は2層に細別され、A₁層は暗褐色土を主体に塊状の褐色シルト、黒褐色土を含む。A₂層はA₁層と近似する層であるがややかたくしまる。
- 壁の状態 検出面から底面までの深さは0.08~0.28mをはかり、壁はゆるやかに上面に立ち上がる。
- 底面の状態 ゆるやかな起伏がある。
- 遺物 なし
- ピット 深さは0.24~0.74mをはかる。

RG1010溝跡 (第18図)

- 位置 東調査区北部
- 平面形 直線状に南北に延びる。
- 規模 長さは総延長48.0mをはかり、幅は上端0.24~1.92m・下端0.08~0.80mをはかる。
- 重複関係 なし 掘込面 削平
- 検出面 III~IV層上面
- 埋土 自然堆積による。A・B層の2層に大別され、A層は2層、B層は3層にそれぞれ細別される。A層は黒褐色土を主体に粒~塊状の褐色シルトを含み、B層は小円礫を含む黒褐色土と黄褐色シルトを主体とする層である。
- 壁の状態 検出面から底面までの深さは



第17図 RG1009溝跡



第18図 RG1010 溝跡

0.32～0.92mをはかり、壁は段を持って外傾して立ち上がる。

底面の状態 ゆるやかな起伏がある。

遺物 図示していないが、縄文時代前期～後期・弥生時代後期・平安時代の土器片がそれぞれ数片出土している。

(4) 遺構外出土遺物

1. 河道 (第4図)

河道は、調査区東端に位置する沢の流路で、内部にはA～C層(黒褐色土と小礫を多量に含む褐色土との互層)が堆積しており、II層上面より形成されたものと考えられる。確認されている総延長は86.4mを、幅は上端1.74～4.34m・下端0.78～2.74mをはかる。検出はIV層上面で行われ、検出面から底面までの深さは0.32～0.72mをはかり、底面はゆるやかな起伏を持つ。遺物は縄文時代前期・後期・弥生時代前期～後期を主体とする土器が出土している。

土器 (第19・20図)

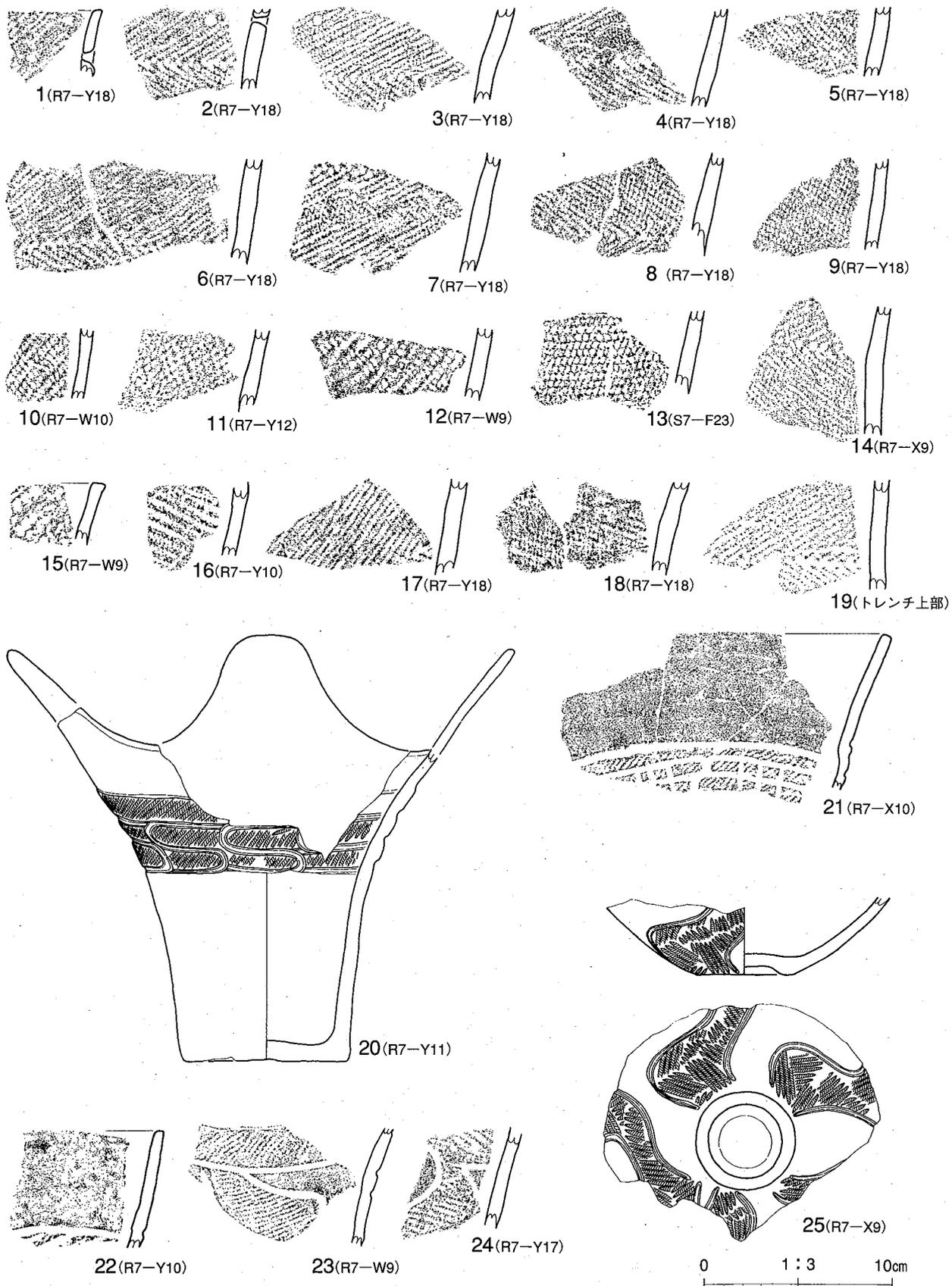
縄文時代前期初頭 (第19図1～19) 1～19は繊維を多量に含む縄文時代前期初頭の土器群である。口唇部は平坦に調整され、1～3の土器片には補修孔を穿つ。器面には結束のある羽状縄文が横位に施文される。

後期中葉 (第19図20～25) 20～25は縄文時代後期中葉の土器群である。20～22は口縁部まで外反気味に開く器形の深鉢形土器である。20は推定4単位の大波状口縁で口縁部が大きく開く。体部上半には、平行沈線にS字状沈線文を加飾した文様が展開する。文様帯の地文には磨消縄文が施される。21は口唇部が平坦に調整され、体部上半には、数条の平行沈線に対して直線状の沈線を縦方向に懸垂した文様が展開する。文様帯の地文には磨消縄文が施される。22は口唇部が平坦に調整され、体部上半には、上下を平行沈線で区画されたなかに斜行沈線が施文される。23～25は曲線的な沈線で区画された磨消縄文帯が展開する土器である。23・24は体部片で、波状文・弧状文の組み合わせによる入組文的なモチーフが施文される。25は体部上半を欠く壺形土器で、沈線による波状文が縦位曲線状に施され、文様内には縄文が充填される。

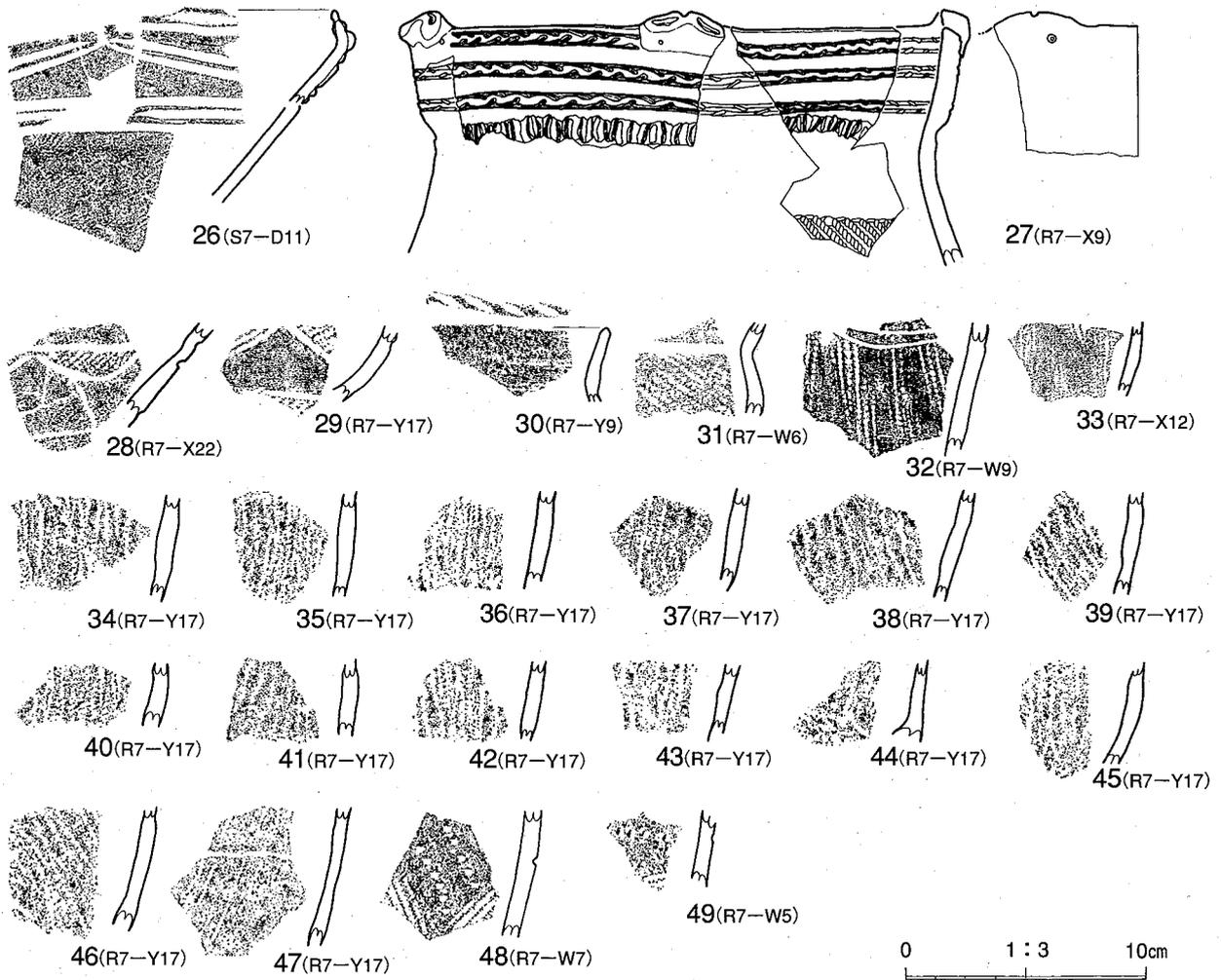
弥生時代前期 (第20図26・28～31) 26・28～31は弥生時代前期の土器群である。26は口縁部が内湾する器形の高坏形土器で、口縁部～体部にかけて残存している。口縁形状は波状を呈し、内面に1条の平行沈線が入る。体部上半には幅広に反転する沈線が流水状に横位に展開し、その中に1条の沈線が下線に沿って入る変形工字文が施文され、体部下半には横走縄文が施文される。胎土は細密で、雲母を含む。28・29は沈線による弧状文が施される土器で、沈線による文様内には縄文がみられる。

30・31は口縁部が外傾し、頸部が屈曲する器形の甕形土器片である。30は口唇部に刻目を持ち、口頸部は無文帯となっている。31は口頸部が無文帯となり、頸部には1条の横位平行沈線が施され、体部には横走縄文が施文される。

後期 (第20図27・32～47) 27・32～47は弥生時代後期の土器群である。27は口縁部に推定4単位の突起を持つ壺形土器で、口縁部～体部上半にかけて残存している。口縁部文様帯は平行沈線間に上下から刺突を加える交互刺突文が3段、その下に爪形状刺突列が横位に施文される。口頸部は無文帯とな



第19図 河道出土遺物(1) 縄文前期・後期



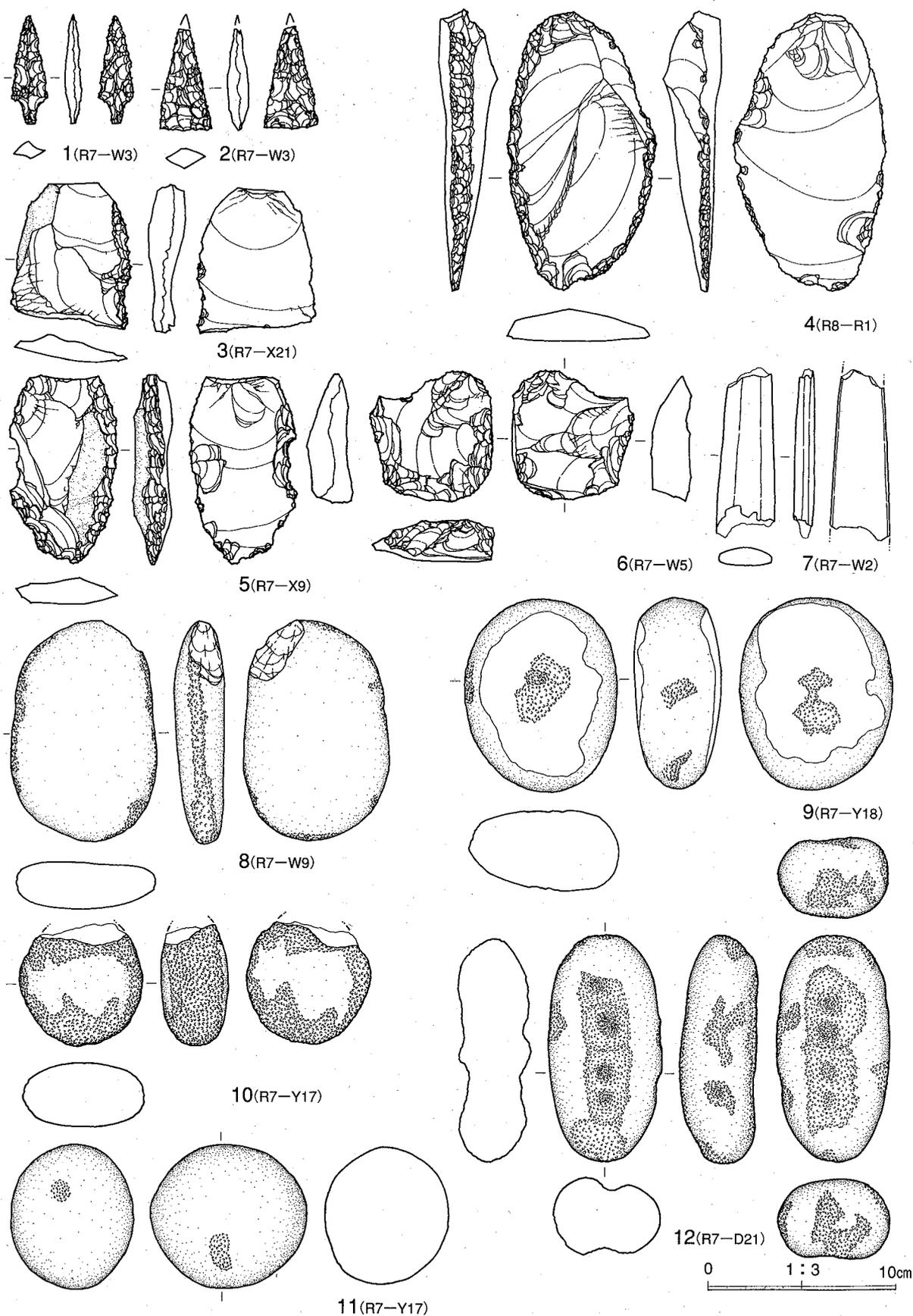
第20図 河道出土遺物(2) 弥生前期・後期・続縄文

り、体部には斜行縄文が施文される。32~47は甕形土器の体部片で、縦走または斜行の縄文が施文される。32には2条の平行沈線による弧状文が施文される。

続縄文時代(第20図48・49) 48・49は続縄文時代の深鉢形土器である。帯縄文が横位または斜位に施され、その間に三角刺突列が施文される。

石器(第21図) 1は凸基の石鎌で、両面に入念な押圧剥離が施される。2は先端部が欠損する平基の石鎌である。4は搔器または削器である。縦長剥片を加工したもので、背面全周縁に刃部調整剥離が施される。5は抉りのある縦長剥片を加工したもので、背面側縁および下端に調整剥離が施される。6は搔器で、背面下半の周縁に調整剥離が施される。

7は基部および刃部欠損の磨製石斧で、表面には2条の稜線が見られる。8・9は敲石である。全周に敲打痕がめぐり、8の上端には衝撃剥離と考えられる剥離が見られる。10は磨石である。11・12は凹石で、両面に敲打による凹部が形成される。特に12は、両端には敲打痕が認められることから敲石としての併用も考えられる。



第21图 河道出土遺物 (3) 石器1

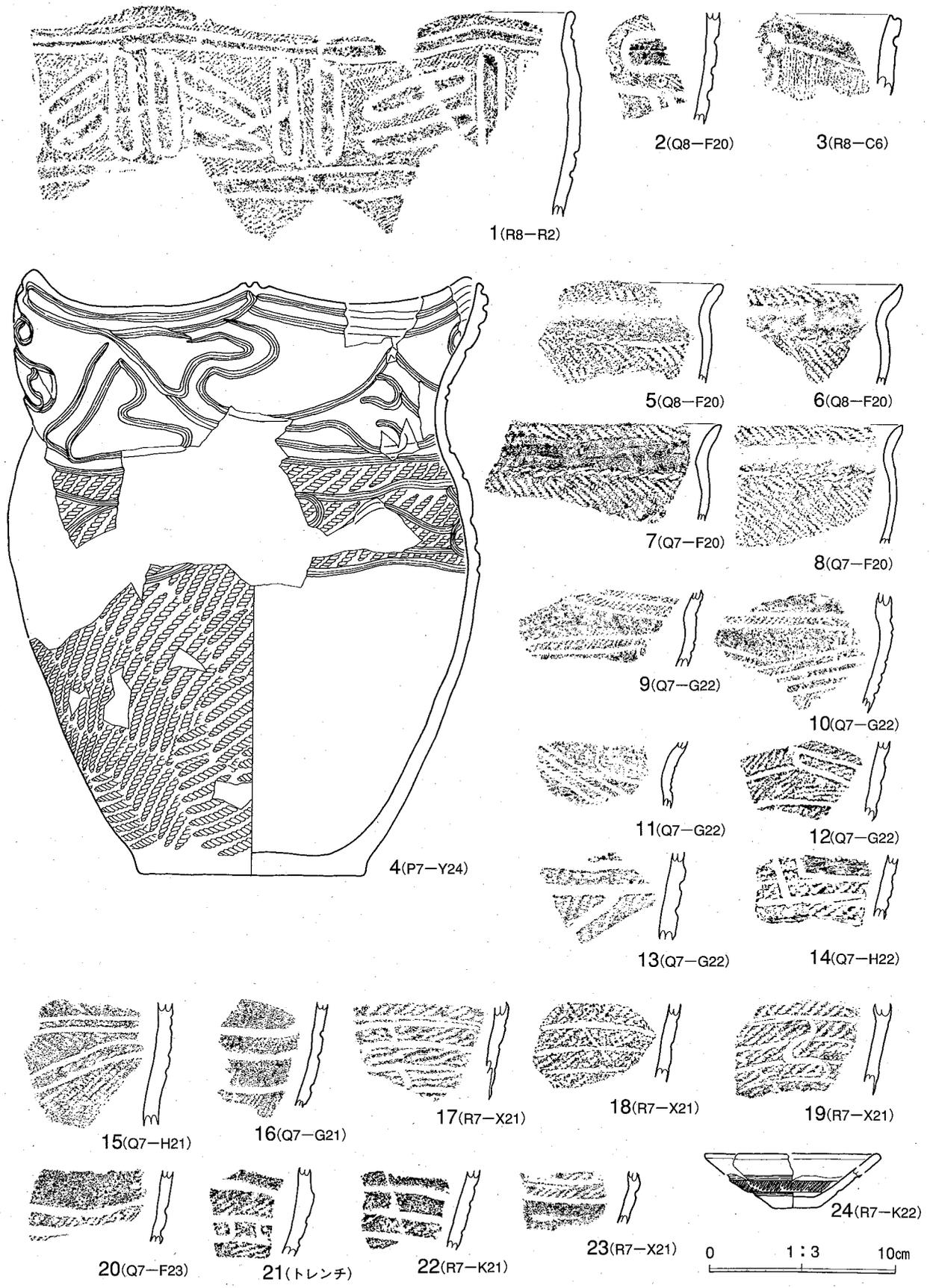
2. 遺物包含層

土 器 (第22~28図)

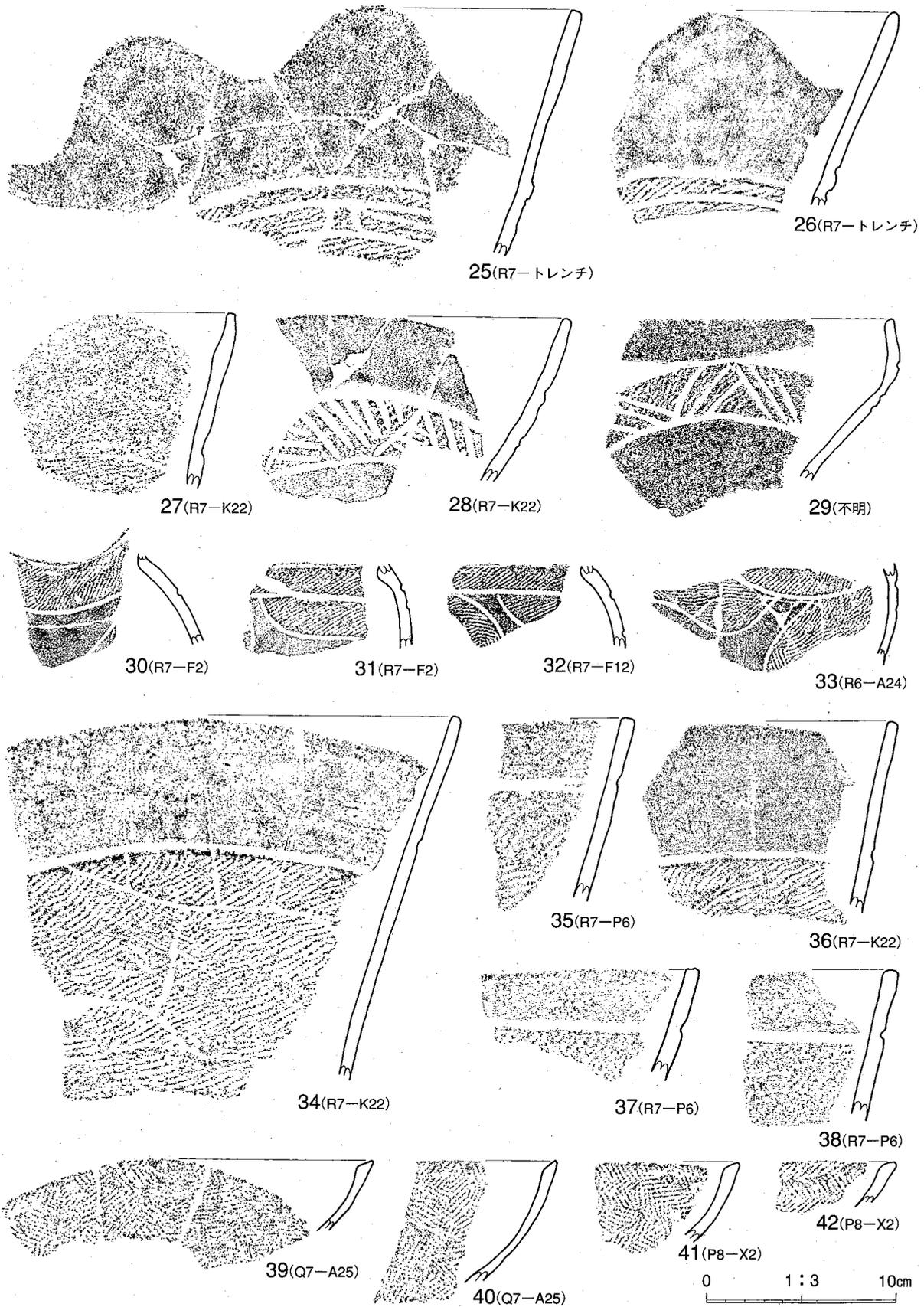
縄文時代後期前葉 (第22図1~4) 1~4は縄文時代後期前葉の土器群である。1は推定4単位の内湾する器形の深鉢形土器であり、体部下半~底部を欠く。口縁部文様帯は、2条1組の平行沈線に区画された2組1単位の長楕円形文が縦位・斜位交互に施文される。地文には横走縄文が施文される。2は深鉢形土器の体部片で、磨消縄文手法による沈線で区画された文様が曲線的に展開し、文様の交点や起点には円形の刺突文が施される。3は口縁部が若干外傾する器形の深鉢形土器の口縁部片である。大波状口縁で、口唇部および口縁部には1条の平行沈線が施される。波状口縁の頂部からは逆S字連続文が懸垂され、文様の要所には円形の刺突文が施される。地文は縦位撚糸文が施文される。4は口縁部が内湾し、頸部が屈曲する器形の球胴甕である。2個1対の刻みが波頂部に入る推定4単位の大波状口縁で、口縁部および胴部文様帯は沈線による入組文的モチーフが展開される。地文は口縁部が無文となり、胴部には単節縄文が縦位・斜位に施文される。

後期中葉 (第22~24図5~56) 5~56は縄文時代後期中葉の土器群である。5~8は口縁部が外傾し、口頸部が屈曲する器形の甕形土器の口縁部片である。口頸部は原体圧痕文による区画で無文帯となり、口縁部および体部には横走縄文が施文される。9~33・56は磨消縄文手法による平行沈線で区画された文様が展開する土器群である。9~10・13・15では平行沈線は横位・斜位に、11・14ではL字形に展開する。12・17~19・21は数条の平行沈線に対して、縦方向に懸垂する沈線が施されるものである。12・19ではS字状沈線文、17・18・21では点線状のものも含む直線状の沈線が懸垂される。24は口縁部まで大きく外傾する器形の浅鉢である。口唇部は平坦に調整され、体部には横位に帯縄文が施文される。25~27は口縁部にかけて直線的に大きく開く器形の深鉢形土器である。推定6単位の大波状口縁で、体部上半には、平行沈線にS字状沈線文を加飾した文様が展開する。28・29は体部上半に上下を平行沈線で区画されたなかに斜行沈線が施される鉢形土器である。28は口縁部にかけて内湾気味に開き、29は内湾する器形を呈す。30~33は曲線的な沈線で区画された磨消縄文帯が展開する壺形土器片である。波状文・弧状文の組み合わせによる入組文的なモチーフが施される。56は口縁部欠損の口縁部が外傾し、頸部が屈曲する器形の筒形の単孔壺形土器である。貫通孔は体部下半に認められ、口頸部は無文帯となるが、体部との境に1条の平行沈線が施される。体部文様帯は3条の平行帯縄文に区画された波状帯縄文が2条施される。34~38・51は口縁部にかけて外反気味に開く器形の深鉢形土器である。34~38では口唇部は平坦に調整され、口縁部は無文帯となり、体部との境に1条の平行沈線が入る。体部には横走縄文が施文される。51においても同様で、口縁部を欠く。39~42は口縁部にかけて内湾気味に開く器形の鉢形土器である。口縁部は平坦に調整され、地文には羽状縄文が横位に施文される。43~55は地文のみが施文される深鉢形土器である。43~45では口唇部は平坦に調整され、43は口縁部は無文帯を持ち、45は撚糸文が縦位に施文される。46・47は口縁部にかけて外反気味に開く器形の深鉢形土器である。48~50は体部片で、無節縄文が縦位に施文される。52~55は体部~底部で、単節縄文が52・54・55では縦位に、53では横位・斜位に施文される。

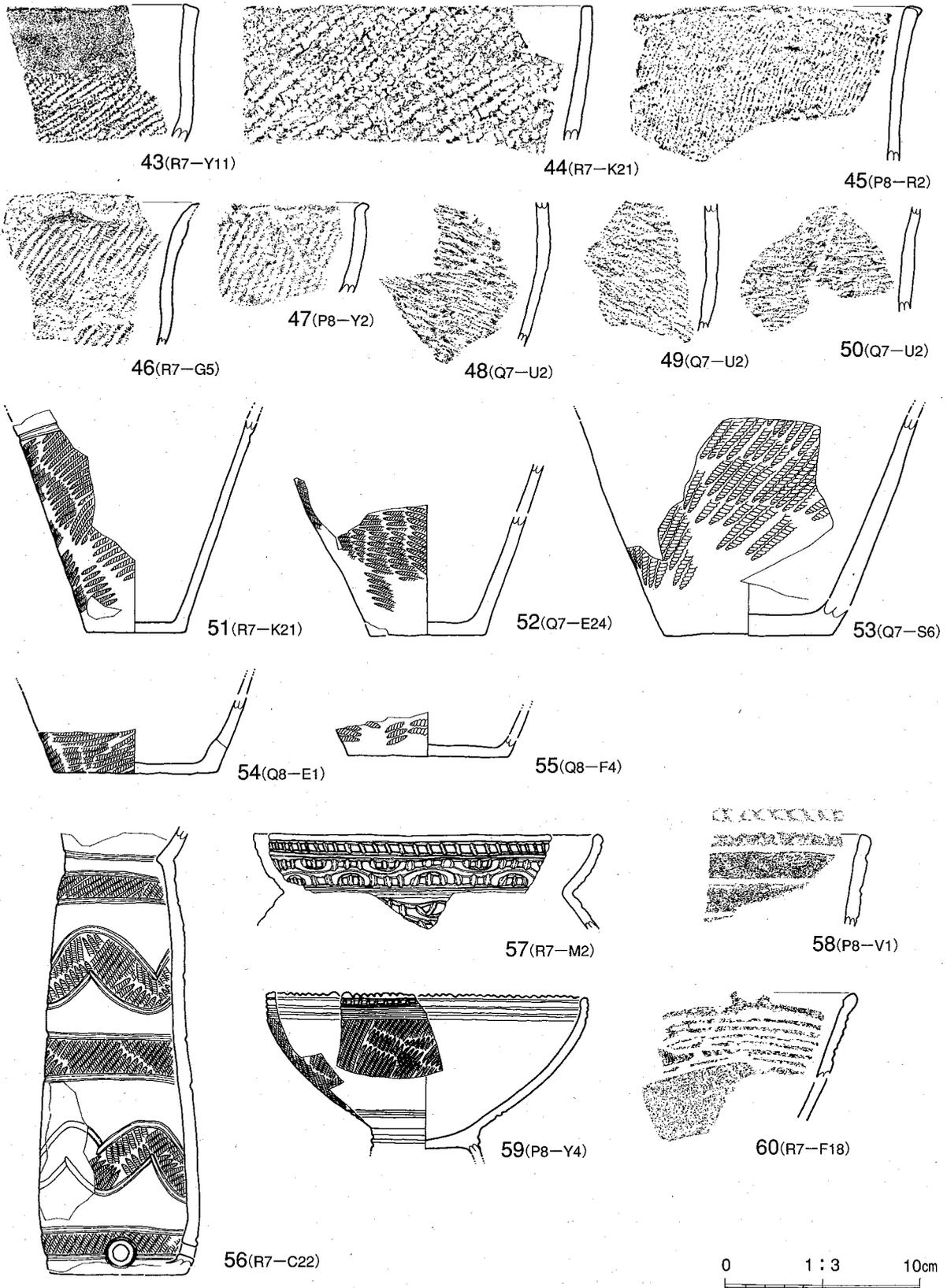
晩期 (第25図57~60) 57~60は縄文時代晩期の土器群である。57は口縁部が内湾気味に外傾し、口頸部が屈曲する器形の注口土器で、体部下半~底部を欠く。口唇部は平坦に調整され、口頸部文様帯には



第22図 遺物包含層出土遺物 (1) 縄文後期1



第23図 遺物包含層出土遺物 (2) 縄文後期2

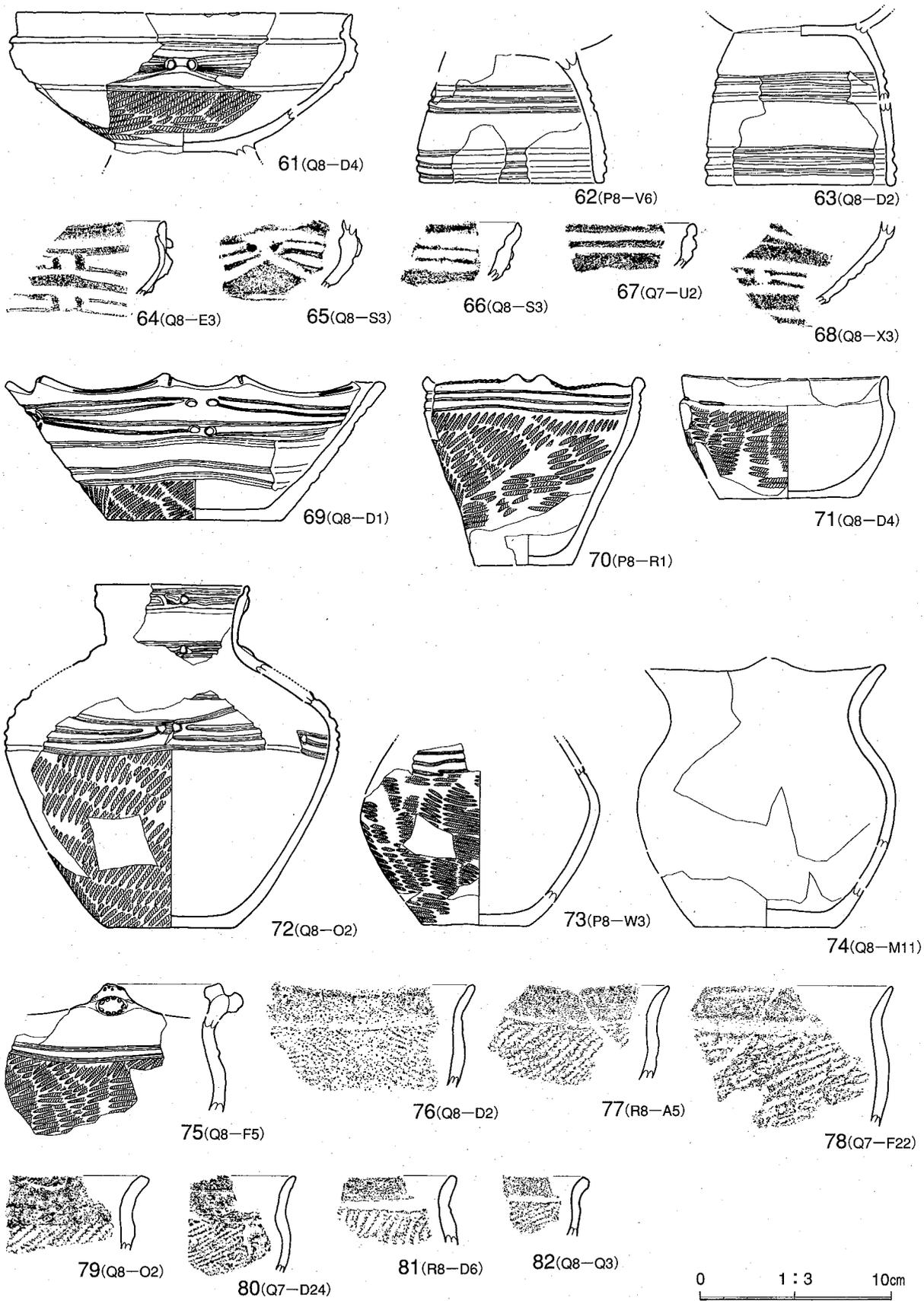


第24図 遺物包含層出土遺物(3) 縄文後期・晩期

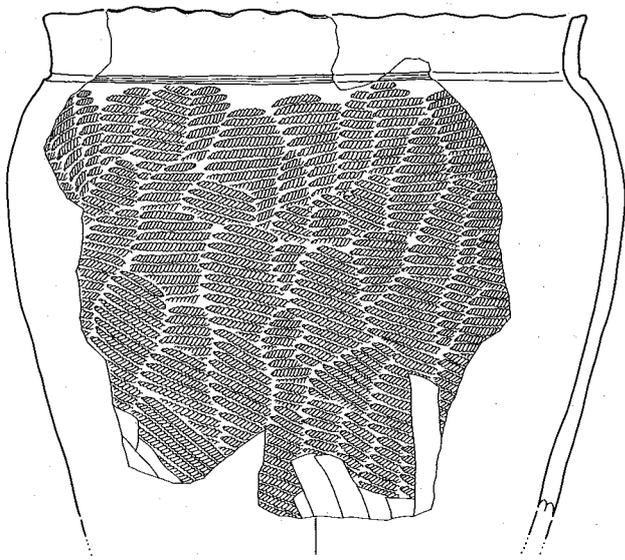
直線状羊歯状文、体部にはK字状文が施される。58は台部欠損の口縁部が内湾気味に開く器形の台付鉢である。口唇部に刻目が、口縁部には歯列状羊歯状文が施される。頸部付近には3条の平行沈線が施される。59・60は口縁部にかけて外反気味に開く器形の鉢形土器の口縁部片である。59は口唇部に刻目が、口縁部には3条の平行沈線が施される。60は口唇部に二山突起を持ち、内面に1条の平行沈線が入る。口縁部には工字文が施される。

弥生時代前期（第25～27図61～101） 61～101は弥生時代前期の土器群である。61～69・72は幅広に反転する沈線が流水状に横位に展開し、その中に1条の沈線が下線に沿って入る変形工字文が施文される土器群である。文様帯の単位の節目には2個1対の粘土粒が貼付される。胎土は細密で、雲母を含む。61～68は高坏形土器である。61・64～68は坏部で、体部上半が屈曲し、口縁部が直立する器形である。口唇部は平坦に調整され、内面に1条の平行沈線が入り、変形工字文は体部上半に施される。体部下半には横走縄文が施文される。62は台形状、63は樽形状の器形の高台部で、3本一組の平行沈線が2段施される。69は口縁部まで直線的に開く器形の鉢形土器である。2個1対の波頂部に刻みの入る山形突起が推定4単位の波状口縁で、口唇部には沈線が施される。体部下半には横走縄文が施文される。72は壺形土器で、変形工字文は口縁部および頸部、体部上半に施される。口唇部は平坦に調整され、体部下半には横走縄文が施文される。70・71・75・94は鉢形土器である。70は推定4単位の二山突起を持ち、口唇部には刻目が施される。口縁部には3条の平行沈線が、体部には横走縄文が施文される。71は頸部に段が設けられ、口縁部が直立気味に立ち上がる器形の鉢形土器である。口頸部は無文帯となり、体部には横走縄文が施文される。75は口縁部が外傾し、頸部が屈曲する器形の鉢形土器である。口唇部には突起が推定4単位、頸部には2条の平行沈線が施される。口頸部は無文帯となり、体部には横走縄文が施文される。94は底部欠損の口縁部まで内湾する器形の鉢形土器である。口縁部は無文帯となり、体部には横走縄文が施文される。73・74は壺形土器で、73は体部上半～底部にかけて残存している。体部上半には3条の平行沈線が、体部下半には横走縄文が施文される。74は口唇部に突起を持つ無文の壺形土器で、底部には木葉痕が見られる。76～89・91～93・101は口縁部が外傾し、頸部が屈曲する器形の甕形土器である。口頸部は無文帯となり、体部には横走縄文が施文される。81・82・101においては体部との境に1条の平行沈線が施される。83～91は口唇部押圧による小波状口縁で、83・85～89・91には体部との境に1条の平行沈線が施される。84の体部には無節縄文が縦位に施文される。86は口縁部まで内湾気味に直立、90は外反気味に開く器形の甕形土器である。92・93は口唇部に刻目が施される。100は口唇部が平坦に調整され、口縁部に2条、体部との境に3条の平行沈線が施される。95～99は高坏形土器である。95～97は坏部で、95・96においては口縁部にかけて直線的に開く器形である。口唇部は平坦に調整され、体部上半には変形工字文が、体部下半には横走縄文が施文される。胎土は細密で、雲母を含む。98・99は樽形状の器形の台部である。98には変形工字文、99には3本1組の平行沈線による波状文が施される。

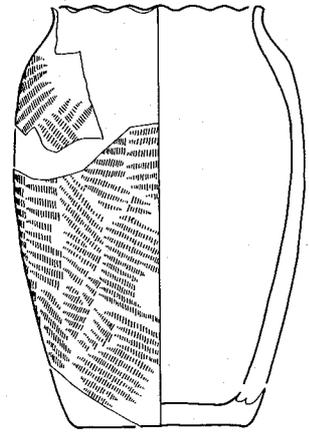
弥生時代後期（第27・28図102～155） 102～155は弥生時代後期の土器群である。102は口縁部まで外反気味に開く器形の甕形土器片である。口唇部は平坦に調整され、口縁部文様帯は平行沈線間に上下から刺突を加える交互刺突文が2段施される。地文には斜行する附加条縄文帯が施文される。103～113は口縁部にかけて直線的に開く器形の鉢形土器である。ゆるやかな波状口縁で、口縁部には附加条縄文帯が施文される。体部には2本以上の平行沈線による弧状沈線文が施される。114～118は甕形



第25図 遺物包含層出土遺物 (4) 弥生前期1



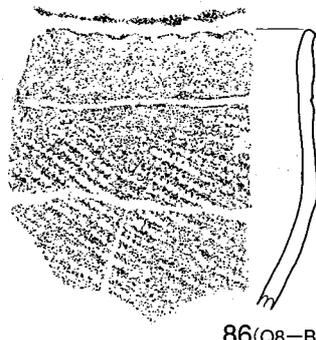
83(Q7-E24)



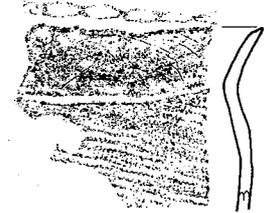
84(R6-D25)



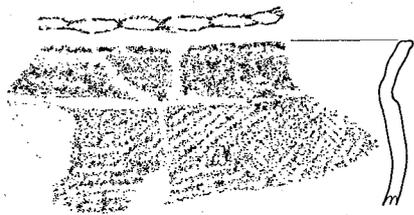
85(Q8-B2)



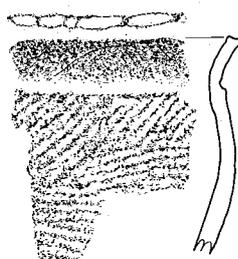
86(Q8-B2)



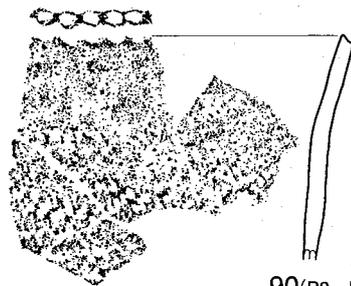
87(Q7-E24)



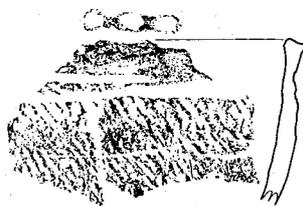
88(P8-W3)



89(P8-W3)



90(P8-R2)



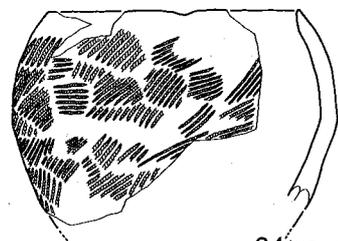
91(Q8-F5)



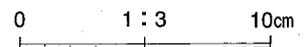
92(Q8-F5)



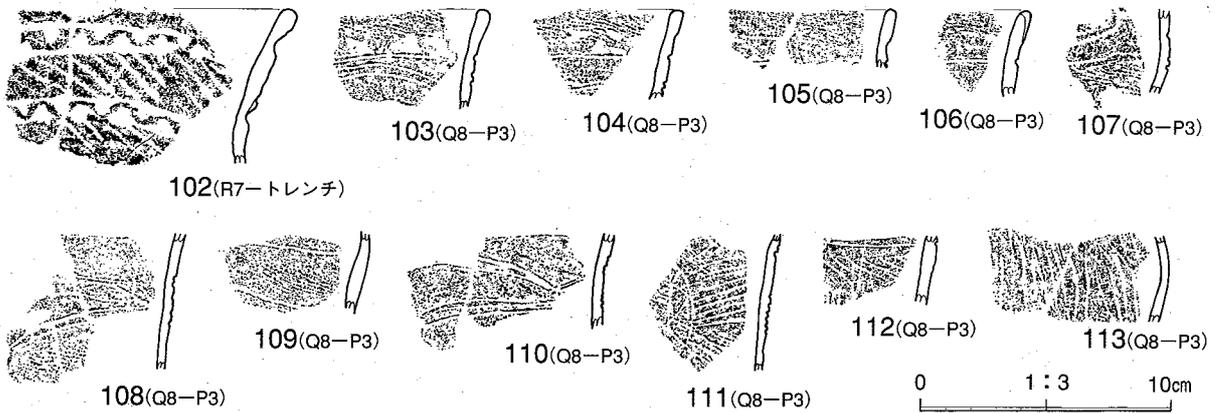
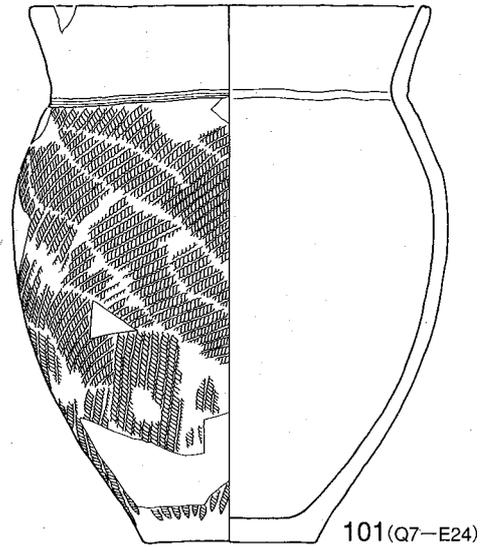
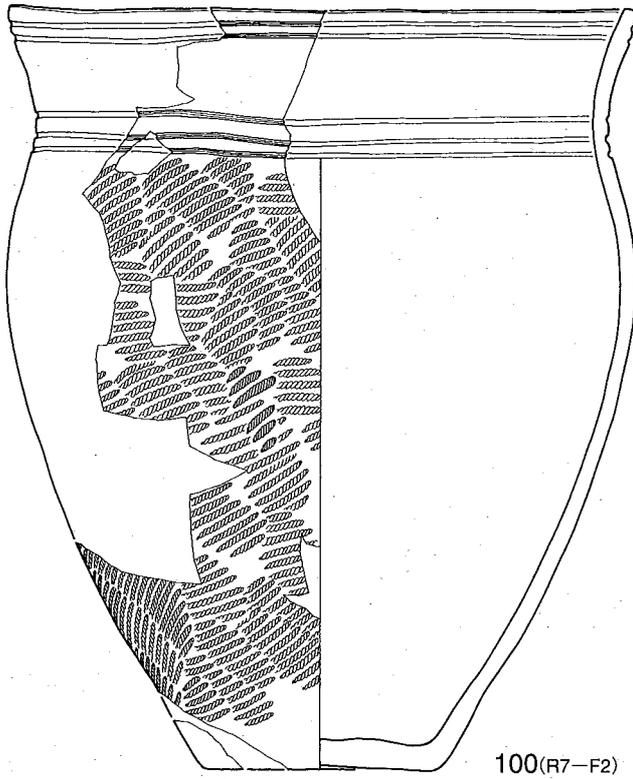
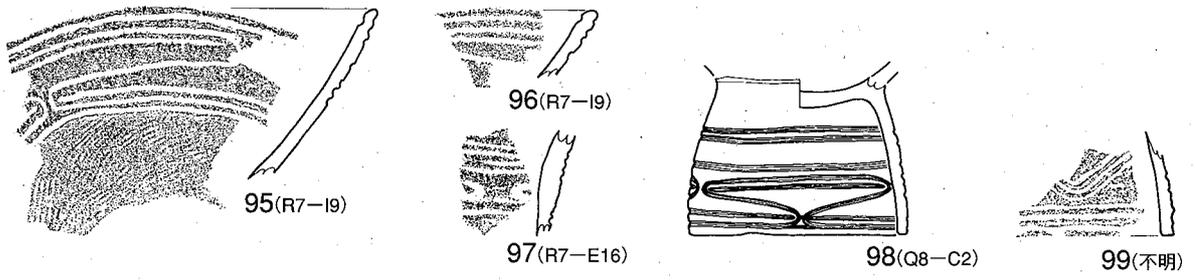
93(Q8-F5)



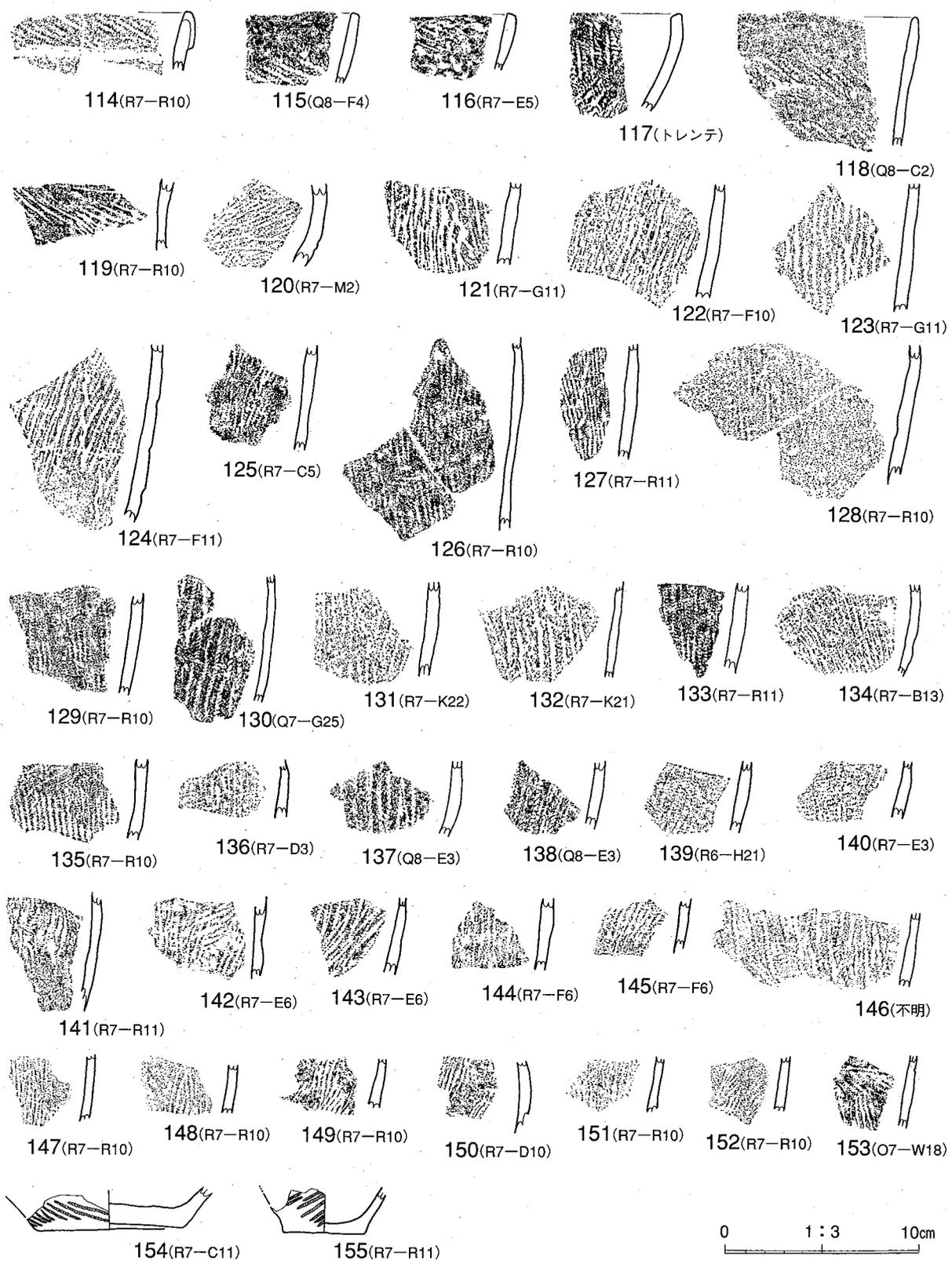
94(Q8-F5)



第26圖 遺物包含層出土遺物 (5) 弥生前期2



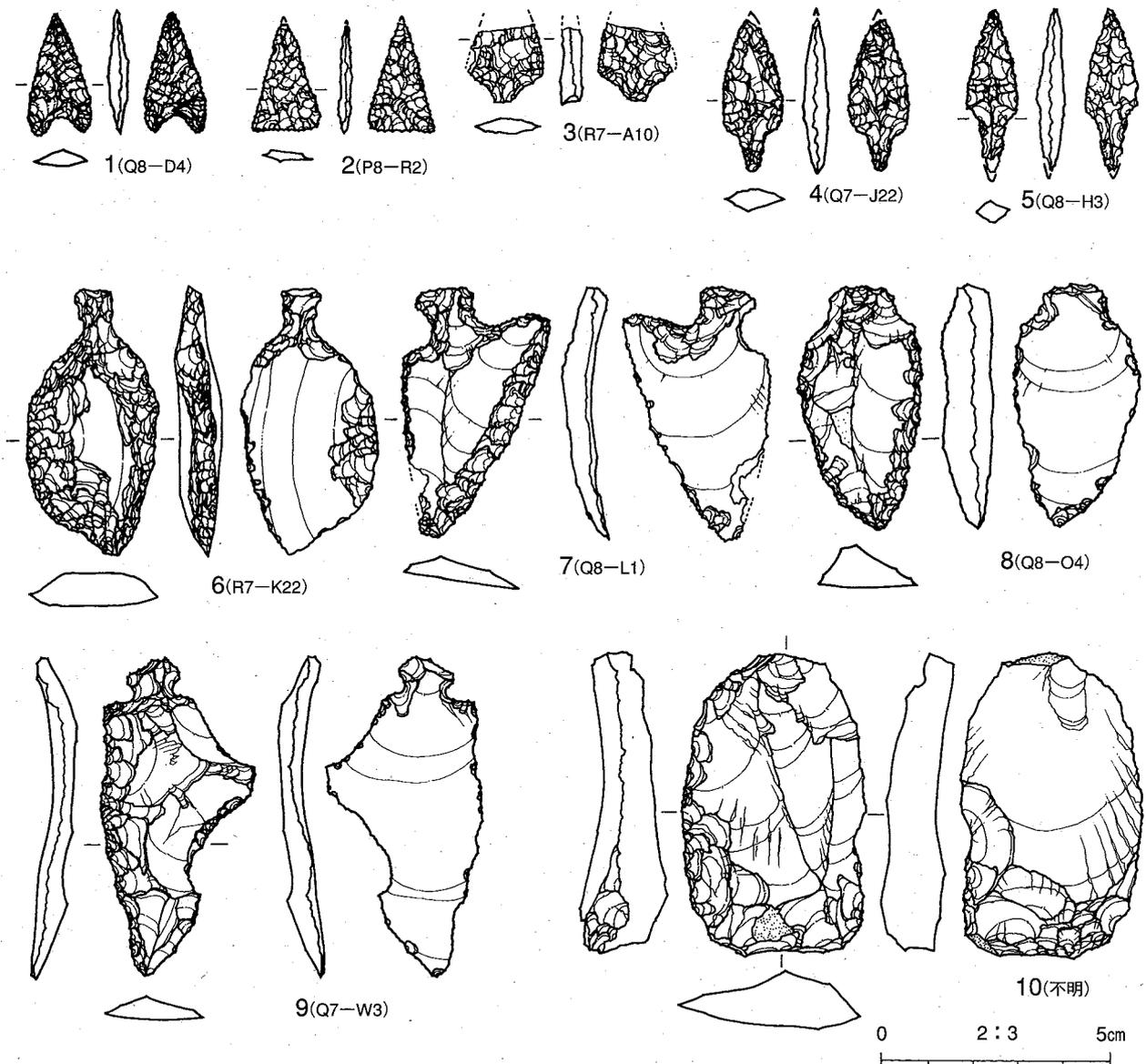
第27図 遺物包含層出土遺物 (6) 弥生前期・後期



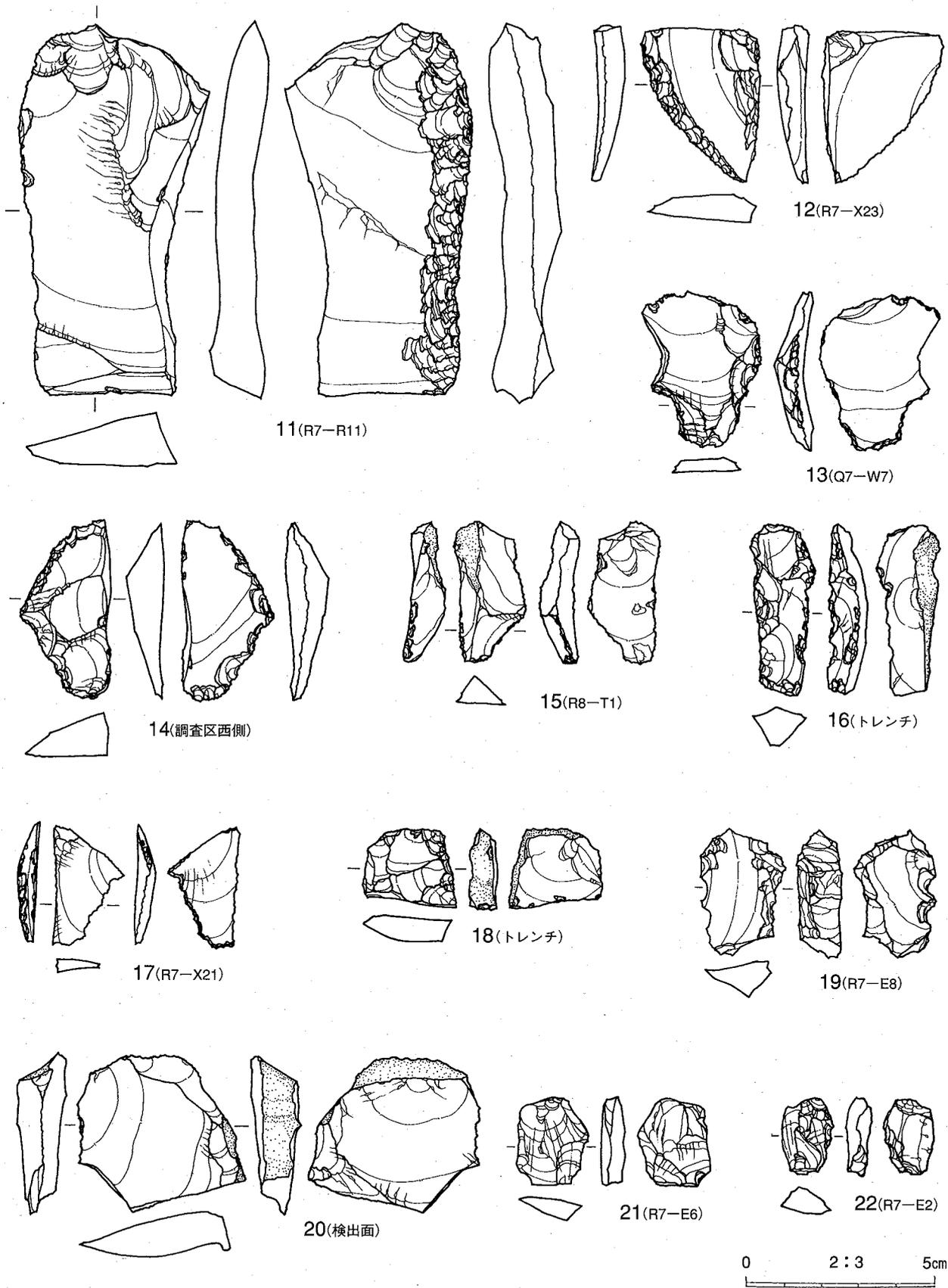
第28図 遺物包含層出土遺物 (7) 弥生後期

土器の口縁部片である。114～116・118は口縁部にかけて直線的に開く器形で、114は複合口縁上に附加条縄文が施文される。115・118はゆるやかな波状口縁で、口縁部は無文帯となり、体部文様帯は無文帯の中に斜行する附加条縄文帯が施文される。116では口唇部が平坦に調整され、口縁部には1条の綾絡文が施される。地文には斜行する附加条縄文が帯状に施文される。117は口縁部まで内湾気味に直立する器形で、地文には縦走または斜行する附加条縄文が施文される。119～153は甕形土器の体部片で、地文には縦走または斜行する附加条縄文が施文される。120には2本の平行沈線による弧状沈線文が施される。154・155は甕形土器の体部下半～底部で、体部下半には斜行する附加条縄文が施文される。

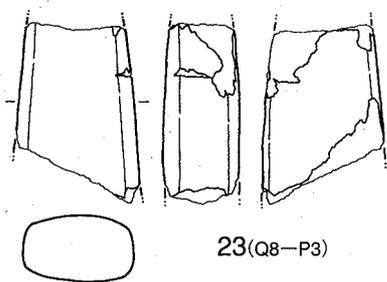
石器 (第29～32図) 1～5は石鏃で、それぞれ両面に入念な押圧剥離が施される。1は凹基の石鏃で、基部の挟りは浅く、脚部は丸状である。2は先端部欠損の平基の石鏃である。3～5は凸基の石鏃で、



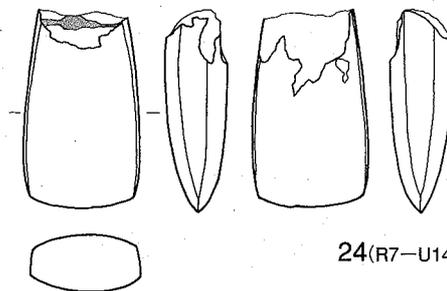
第29図 遺物包含層出土遺物 (8) 石器1



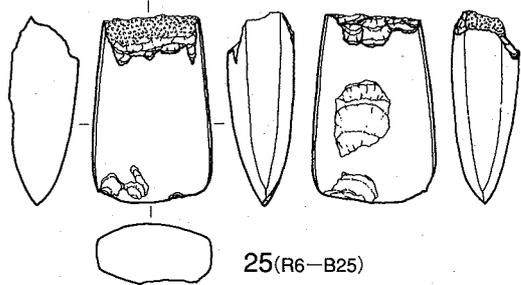
第30図 遺物包含層出土遺物 (9) 石器2



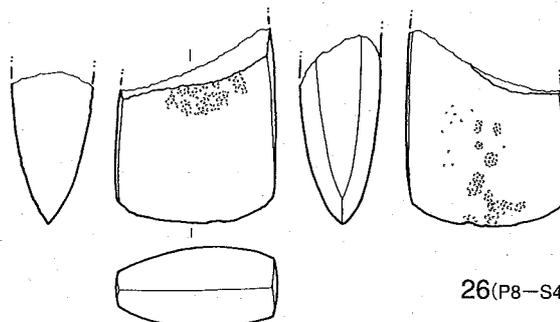
23(Q8-P3)



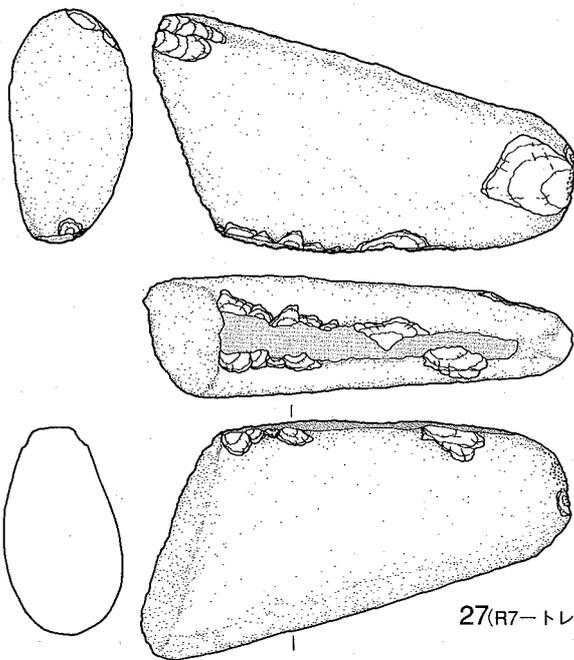
24(R7-U14)



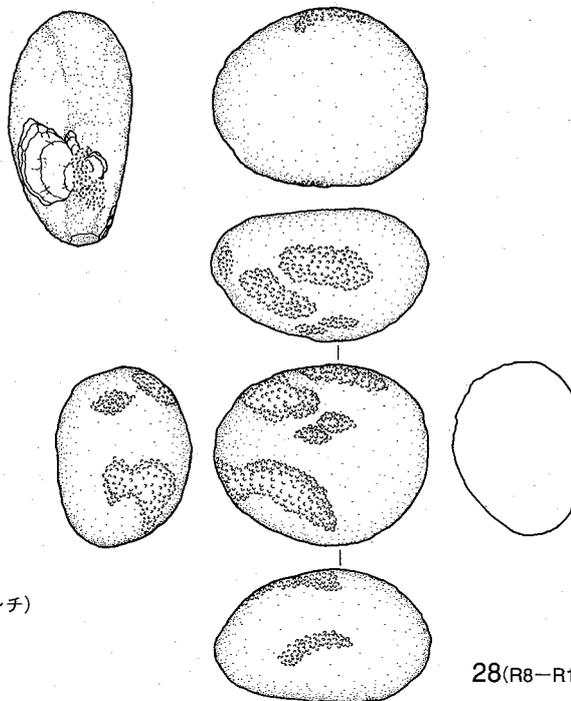
25(R6-B25)



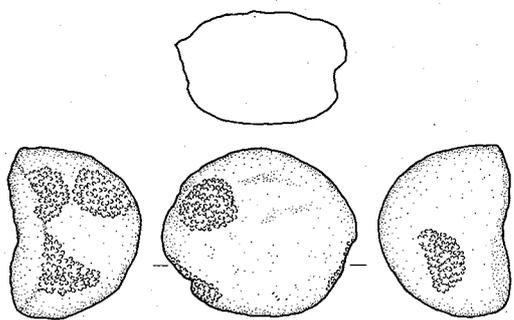
26(P8-S4)



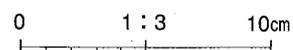
27(R7-トレンチ)



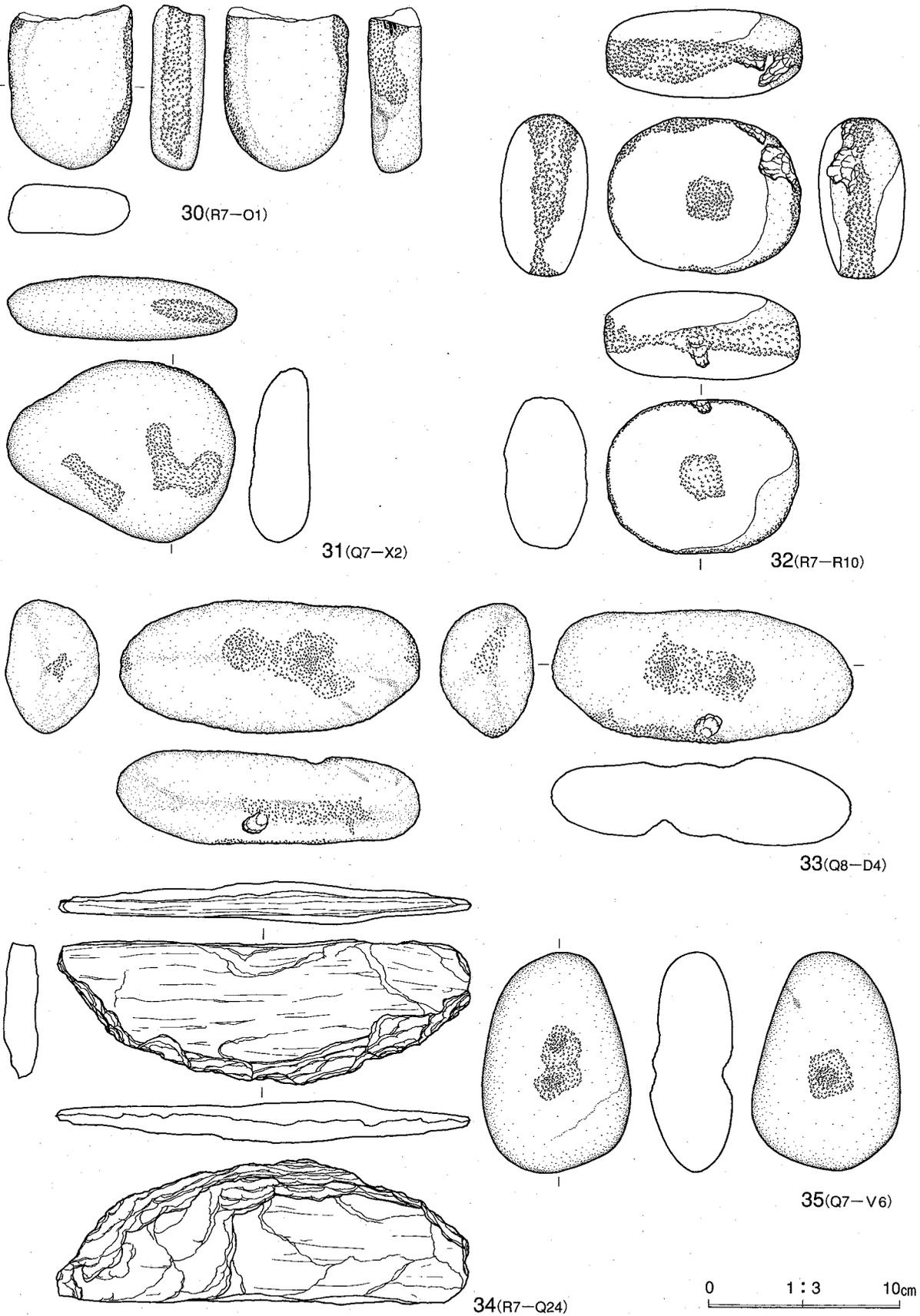
28(R8-R1)



29(R8-R1)



第31図 遺物包含層出土遺物(10) 石器3



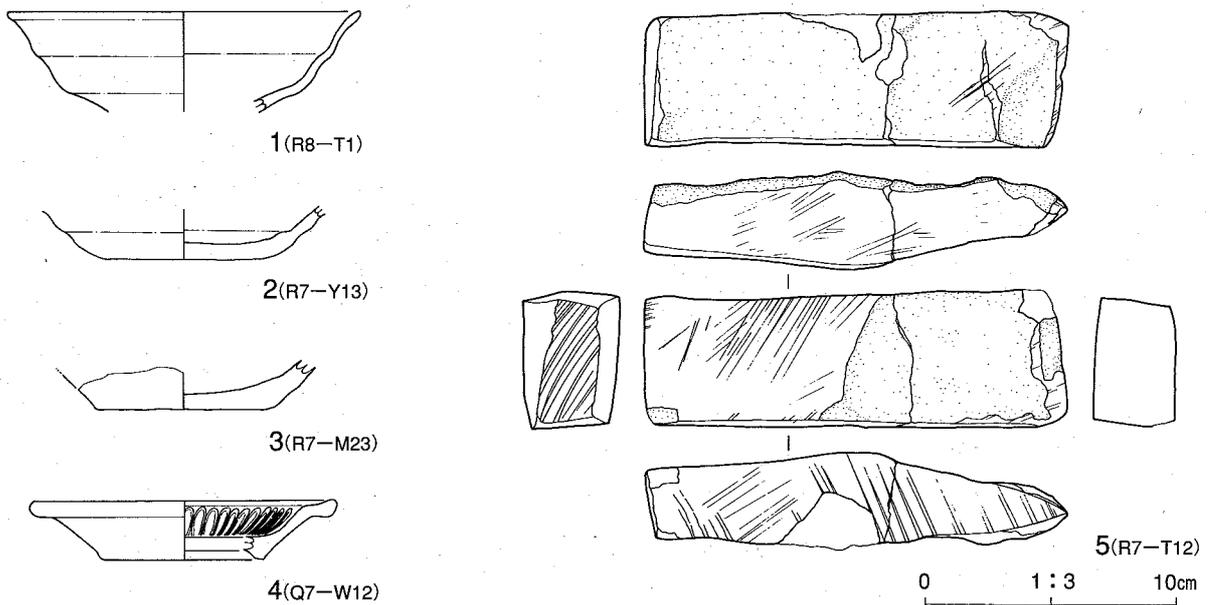
第32図 遺物包含層出土遺物 (11) 石器4

3は上半部、4は先端部、5は凸部を欠損している。6～9は石匙である。6は縦長剥片を加工したもので、つまみ部および背面全周縁に入念な押圧剥離が施され、腹面側縁には刃部調整剥離が施される。7は柄方向と刃部が斜形に加工されたもので、つまみ部および背面全周縁に入念な押圧剥離が施される。8は縦長剥片を加工したもので、つまみ部および背面全周縁に入念な押圧剥離が施されるが、つまみ部の抉れはさほど顕著ではない。9は抉りのある縦長剥片を加工したもので、つまみ部および背面側縁にのみ調整剥離が施される。10～18・20は削器である。10は背面左側縁・下端および腹面左側縁・下端に調整剥離が施される。11は腹面右側縁にのみ、12は背面側縁にのみ調整剥離が施される。13は抉りのある剥片を加工したもので、背面側縁および下端に調整剥離が施される。14は背面左側縁・上端および腹面右側縁・下端に調整剥離が施される。15は背面下端にのみ調整剥離が施される。16は縦長剥片を加工したもので、背面側縁および下端に調整剥離が施される。17は腹面左側縁にのみ、18は背面右側縁にのみ調整剥離が施される。19・21・22は楔形石器である。

23～26は磨製石斧である。23は基部および刃部欠損で、表面には2条のくっきりした稜線が見られる。24・25は基部欠損で、24は基部に敲打磨面が、25は基部に敲打痕が、基部・体部に衝撃剥離と考えられる剥離が見られる。26は刃部～体部で、刃部および体部に敲打痕が見られる。27は敲打磨石である。断面が偏平状の円瓦礫を利用したもので、敲打磨面に沿って小剥離が形成される。端部には衝撃剥離と考えられる剥離が見られ、敲打痕を伴う。28～31は敲石、32は磨石で、ともに敲打痕を伴う。32は全周に敲打痕を持つもので、衝撃剥離と考えられる剥離が見られることより、敲石に転用したものである。33・35は凹石で、両面に敲打による凹部が形成される。33の両端には敲打痕が認められることから敲石としての併用も考えられる。34は礫器である。偏平な円礫の周縁を半月状に加工したものである。

平安時代 (第33図 1～3) 1～3は平安時代のあかやき土器である。ロクロ成形のあかやき土器で、1は底部を欠く。2・3は回転糸切無調整で、3は摩滅が著しい。

石製品 (第33図 5) 5はシルト岩製の砥石である。ほぼ完形で四角柱状を呈しており、5面に磨面・使用痕



第33図 遺物包含層出土遺物 (12) 古代・中世

が認められる。

陶磁器 (第33図4) 4は16世紀後葉の瀬戸・美濃の灰釉陶器である。折縁皿で、内面に丸鑿彫が施される。

(5) ま と め

検出遺構 検出された遺構は、縄文時代の土坑5基(RD020~024)、弥生時代の竪穴住居跡1棟(RA001)、土坑1基(RD019)、平安時代の溝跡群(RG504-A~D群)、中世~近世の土坑及び土坑墓3基(RD1009~1011)、溝跡2条(RG1009~1010)、ピット1口(P1)である。

第I区発掘調査では、各時代における明確な集落は確認されなかったが、出土遺物は一様に摩滅が著しく、出土層位も一定ではないことから、上流域より流出してきた遺物であることが推測される。

遺構・遺物

縄文時代 縄文時代の遺構は、土坑5基(RD020~024)が西調査区東部を中心に検出されており、RD020土坑より後期中葉の十腰内II・III式期に属する土器が出土している。

遺構外では、上記の後期中葉の遺物群のほか、前期初頭の大木1式土器が河道C層(黒褐色土層)を中心に出土している。また、後期前葉の十腰内I式、晩期前葉の大洞BC式、中葉の大洞C2式、後葉の大洞A式土器が遺物包含層より出土しており、調査区全域に散布している。

前期 前期初頭(第19図1~19)の土器は、河道底面付近より出土したもので、扇状地堆積層であるI~V層の下位に堆積する黒褐色土層(VI層)との境付近より出土している。VI層は後述する第II区のIV層に対比され、この第II区においても同層位より早期末~前期初頭の遺物が出土したことから、上記した前期初頭の遺物は、本来VI層に包含されていた遺物と考えられる。

第I区より出土した前期初頭の土器は、口縁部が緩く外反し、外面には結束のある縄文を多段に施す特徴がある。出土量が少ないため明確ではないが、文様構成に原体によるループ文や不整然糸文を含まず、体部上半が長く直線的になることから、千鷲II式から大木1式にかかる土器群と思われる。

なお、VI層に対比される黒褐色土層は、盛岡北半や滝沢村・玉山村の南部で観察される層で、堆積土上部に赤褐色を呈したスコリア粒を含む特徴があり、黒褐色土層上部からは縄文時代前期を中心とした遺物が出土する。平成6年に調査が行われた盛岡市庄ヶ畑A遺跡(未報告)では、黒褐色土層上部より長七谷地III群土器、早稲田VI類土器に類似する土器が多量に出土し、黒褐色土層下位に発達する暗褐色土との漸移層付近より表裏に縄文が施される赤御堂式土器に類似する土器群が出土するなど、黒褐色土層の堆積年代を考える上で重要な成果が得られている。現在でも盛岡市大館町遺跡の調査において層位の細分が進められており、将来的に縄文時代前期~中期にかけての変遷を考えるうえで重要な鍵層となるであろう。

後期 縄文時代後期の遺物は、III層を中心に出土している。第22図3・4図は後期前葉の門前I式?に類似する土器であるが、出土資料が少ないため明らかなものではない。第23図1・2は十腰内I式に類似する土器である。第19図20~25・第22図9~第24図56は十腰内II式またはIII式に類似する土器群である。これらの後期土器群の多くは、包含層を中心に出土したものであるが、向田遺跡の北

西に位置する柿ノ木平遺跡では、後期前葉の門前Ⅰ式を伴う多数の土坑群や竪穴住居跡が検出されている。後出の十腰内Ⅰ～Ⅲ式を伴う集落等は、周辺遺跡でも確認されていないが、向田遺跡より上流に位置する寺沢遺跡などで当該期の遺物が採集されていることから、遺跡の主体地区は別遺跡であることも考えられる。

晩期 第24図57・59は大洞BC式の注口土器及び台付鉢で、58は大洞C₂式の深鉢、60は大洞A式の鉢である。出土量は少ないが、縄文時代晩期のほぼ全般にわたる遺物が出土しており、遺跡周辺部に縄文時代晩期の良好な遺跡が存在している可能性がある。

弥生時代 弥生時代の遺構は、西調査区より弥生時代前期前葉の竪穴住居跡1棟（RA001）、土坑1基（RD019）が検出され、埋土からは砂沢式に類似する土器が出土している。

遺構外では、第Ⅰ区全域より弥生時代前期の砂沢式（第25図61～第26図94）、山王Ⅲ層式（第20図26・28・29、第27図95～101）、後期の天王山式（第20図27、第27図102）・赤穴式（第20図32～47、第27図103～第28図155）に類似する土器が出土している。水流を受け摩滅するものも多いが、前期の土器は西調査区西半部において比較的集中して出土している。

続縄文時代 続縄文時代の遺物は、北海道系の土器である後北C₂式土器が東調査区東辺の河道B層（小礫を多量に含む褐色土層）より2点出土している。（第20図48・49）

向田遺跡周辺では、昭和40・41年に発掘調査された永福寺山遺跡をはじめ、屠牛場遺跡・柿ノ木平遺跡・堰根遺跡・前野遺跡からの出土例がある。永福寺山遺跡からは5基以上の土坑墓が検出され、4世紀の古式土師器である塩釜式と後北C₂式土器が共伴して出土している。向田遺跡においては、遺構・共伴を示す土器等は発見されなかったが、遺跡の分布傾向を考えるうえで重要である。

平安時代 平安時代における明確な遺構は、畝状の溝跡群（RG504）以外には確認されなかった。遺物はA群を主体として、僅少ではあるが土師器が出土している。

また、遺構外ではあるが、東調査区東部の遺物包含層より9世紀に相当するあかやき土器が出土している。いずれも小破片で摩滅が著しく、上流域より流出してきた遺物である可能性が考えられる。

中世～近世 中世～近世の遺構には、土坑3基・溝跡2条が検出されている。RD1009土坑墓からは、副葬品として「古寛永通寶」・「新寛永通寶」が計6枚出土しており、新旧の流通銭貨が共存することから17世紀末葉の土坑墓であることが推定される。

また、遺構外ではあるが、東調査区西部遺物包含層より16世紀後葉の瀬戸・美濃産「灰釉折縁皿」が出土しており、周辺にこの時期の遺構の存在も予想される。

2. 第Ⅱ区の調査（第1～4・9次）

位置 第Ⅱ区の調査は、扇状地形の扇央～扇端部にあたる。総調査面積は9,760㎡で、平成11～13年度の3ヵ年にわたり調査が実施された。調査区内の標高値はおよそ147.6～147.2mをはかる。各調査の期間および調査面積は以下のとおりであるが、第1～4次調査に関連する図面・写真記録の大部分は火災により焼失したため、可能な限りの報告とした。

第1次調査	調査期間	平成11年8月17日～10月22日	調査面積950㎡
第2次調査	調査期間	平成11年11月1日～12月10日	調査面積810㎡
第3次調査	調査期間	平成11年11月1日～12月10日	調査面積1,410㎡
第4次調査	調査期間	平成12年5月1日～11月21日	調査面積3,710㎡
第9次調査	調査期間	平成13年7月18日～8月3日	調査面積2,880㎡

検出状況 第Ⅱ区における基本土層の層序は、小礫を含む黒褐～褐色を呈す耕作土（Ⅰa層）、Ⅰa層下には水田の床土（Ⅰb層）が堆積しているが、これらの層は削平・客土による攪乱を受けている。Ⅰb層下に全域ではないが、黒褐土を主体とするⅡ層が堆積する。このⅡ層はa～cの3層に細分され、第Ⅰ区のⅢ層に対比される。Ⅱ層下には、Ⅲ層とした小角礫を多量に含む褐色シルト層が堆積する。Ⅲ層は第Ⅰ区のⅤ層に対比され、Ⅱ層との層理面付近までは遺物が出土するが、中～下位の堆積土からは遺物は出土しない。Ⅳ層は黒褐色土を主体にスコリア粒を含む層で、第Ⅰ区Ⅵ層に対比される。遺構検出は、Ⅱ層あるいはⅢ層上面で行われた。

なお、弥生時代の土坑（RD015～018）埋土上位には所謂「十和田a火山灰」に近似する薄い青白色を呈した火山灰が混入する。同様の火山灰は堰根遺跡で検出された弥生時代終末期の竪穴住居内でも検出され興味深い。

古代（奈良・平安時代）の竪穴住居跡などの明確な古代遺構は、RG501～503溝跡を除いては確認されなかった。遺物についてもⅡ層検出面などで散見された程度である。

遺物包含層はⅡ・Ⅳ層が主体となり、縄文時代早期末葉～前期初頭にかけての遺物はⅣ層上面より、縄文時代中～晩期・弥生時代前期はⅡ層より出土する。Ⅱa・b層は縄文時代晩期以降、Ⅱc層は縄文時代中期の遺物が集中する傾向がある。

検出遺構 検出された遺構は、縄文時代の土坑12基（RD001～004・006～009・011～014）、埋設土器3基、弥生時代の土坑6基（RD005・010・015～018）、平安時代の溝跡3条（RG501～503）、中世～近世の土坑8基（RD1001～1008）、溝跡8条（RG1001～1008）である。

遺構・遺物

縄文時代 縄文時代の遺構は、土坑12基、埋設土器3基が検出されており、中期中葉の大木8b-3式に属する深鉢形土器などが出土している。また遺構外では、早期末葉の赤御堂式、前期前葉の大木2a式、中期後葉の大木9式、後期前葉の門前Ⅰ式、晩期中葉の大洞C1・C2式、後葉の大洞A・A式土器が第Ⅱ区北部の遺物包含層を中心に出土している。なお、前期前葉の土器はⅣ層上面より多数の出土をみたが、風化が著しく、図示できたのは僅かである。

弥生時代 弥生時代の遺構は、土坑墓と考えられる土坑1基（RD005）、陥穴状の土坑5基（RD010・015）

～018) が検出されており、R D 005土坑の底面からは弥生時代前期の砂沢式に相当する高坏形土器が出土している。遺構外では、砂沢式土器のほか、同じく前期の山王Ⅲ層式古段階、後期の赤穴式古段階の土器が第Ⅱ区北西部の遺物包含層を中心に出土している。

平安時代 平安時代における明確な遺構は、R G 501～503溝跡以外には確認されなかった。遺物は、R G 501溝跡よりあかやき土器片が少量出土している。また遺構外ではあるが、第Ⅱ区南西部の遺物包含層より須恵器、あかやき土器が出土している。多くは摩滅しており、周辺より流入したものと考えられる。

中世～近世 中世～近世の遺構では、土坑8基、溝跡8条が検出されているが、明確な時期を示す遺物は出土していない。遺構の時期判別は、中・近世の埋土には大小の褐色シルト粒や塊が混入することが、隣接する上村屋敷・堰根遺跡の検出例で確認されていることから、上記の検出例を参考にしたものである。遺構外では第Ⅱ区北東部の遺物包含層より12～13世紀の所産と考えられる「かわらけ」が出土している。

(1) 縄文・弥生時代の遺構と遺物

R D 0 0 1 土坑 (第34図 罹災)

位 置	第Ⅱ区南東部	平 面 形	楕円形	主 軸 方 向	E40° S
規 模	長軸上端1.70m・下端1.10m、短軸上端1.40m・下端0.80m				
重 複 関 係	なし	掘 込 面	削平	検 出 面	Ⅲ層上面
埋 土	不明	壁 の 状 態	不明	底 面 の 状 態	不明
				出 土 遺 物	なし

R D 0 0 2 土坑 (第34図 罹災)

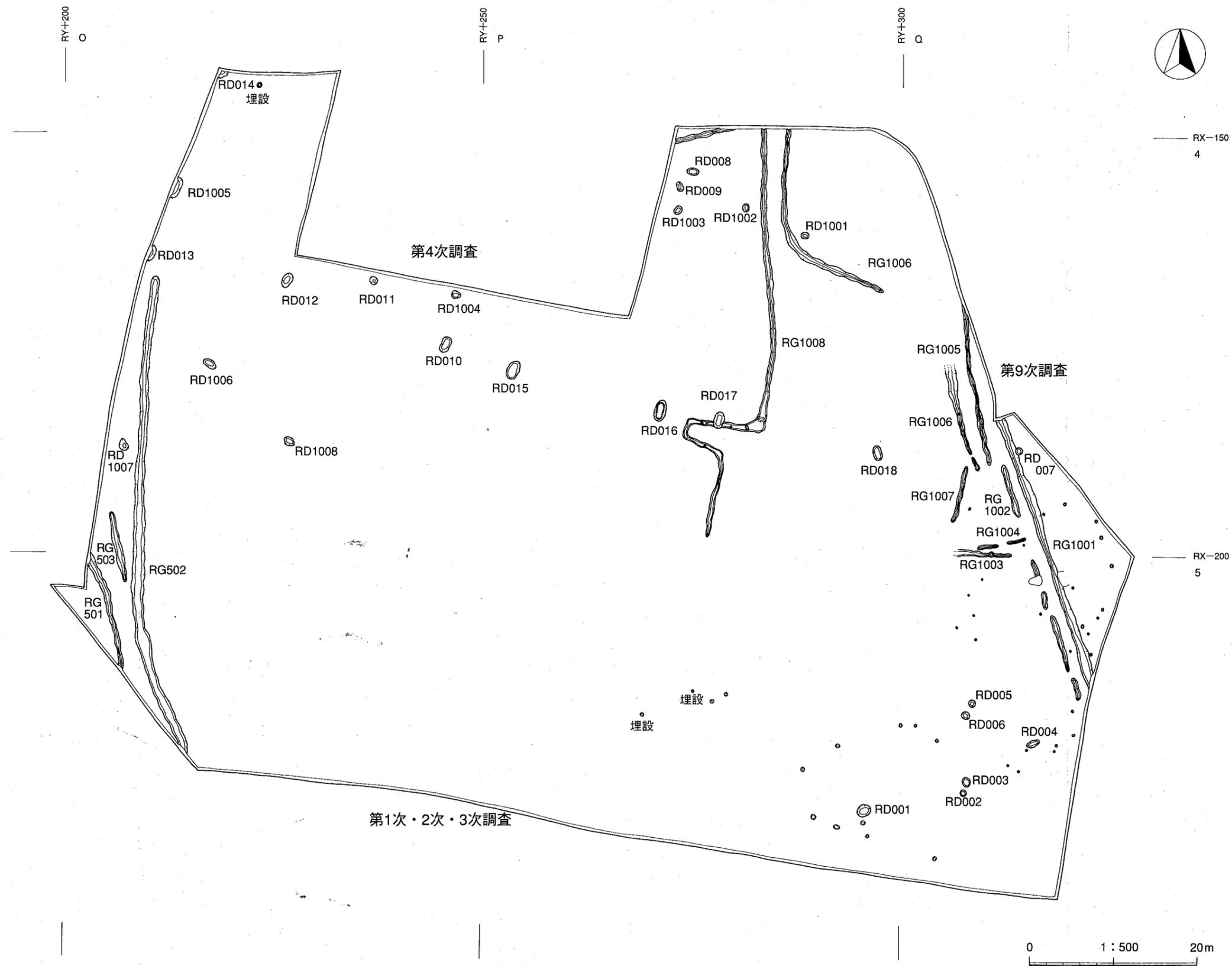
位 置	第Ⅱ区南東部	平 面 形	円形		
規 模	東-西 上端0.68m・下端0.50m、南-北 上端0.72m・下端0.46m				
重 複 関 係	なし	掘 込 面	削平	検 出 面	Ⅲ層上面
埋 土	不明	壁 の 状 態	不明	底 面 の 状 態	不明
				出 土 遺 物	なし

R D 0 0 3 土坑 (第34図 罹災)

位 置	第Ⅱ区南東部	平 面 形	円形		
規 模	東-西 上端1.02m・下端0.88m、南-北 上端1.12m・下端0.94m				
重 複 関 係	なし	掘 込 面	削平	検 出 面	Ⅲ層上面
埋 土	不明	壁 の 状 態	不明	底 面 の 状 態	不明
				出 土 遺 物	なし

R D 0 0 4 土坑 (第34図 罹災)

位 置	第Ⅱ区南東部	平 面 形	不整長方形	主 軸 方 向	E25° S
規 模	長軸上端1.58m・下端1.26m、短軸上端0.68m・下端0.34m				
重 複 関 係	なし	掘 込 面	削平	検 出 面	Ⅲ層上面
埋 土	不明	壁 の 状 態	不明	底 面 の 状 態	不明
				出 土 遺 物	なし



第34図 第Ⅱ図 全体図

RD005土坑 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区南東部 平面形 円形
規模 東-西 上端0.86m・下端0.54m、南-北 上端0.86m・下端0.46m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅲ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明

出土遺物 1は弥生時代前期に相当する高坏形土器である。口縁部が一部欠損しているが、ほぼ完形である。坏部はややふくらみを持ち、口縁部が内湾気味に直立する。口唇部は平坦に調整され、内面に1条の平行沈線が入る。坏部上半には変形工字文が施文され、文様単位の節目には2個1対の粘土粒が施される。下半には横走縄文が施文され、原体はLR縄文である。台部はややふくらみのある台形状を呈し、3本ないし2本1組の平行沈線が横位に3段施文される。胎土は細密で、雲母が含まれる。このほか、図示していないが、縄文時代中期～後期に相当する土器片が数片出土している。

RD006土坑 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区南東部 平面形 不整楕円形 主軸方向 W40° N
規模 長軸上端1.04m・下端0.60m、短軸上端0.82m・下端0.42m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅲ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD007土坑 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区東辺部中央 平面形 円形
規模 東-西 上端0.76m・下端0.54m、南-北 上端0.80m・下端0.58m
重複関係 RG1001に切られる。 掘込面 削平 検出面 Ⅲ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD008土坑 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北東部 平面形 楕円形 主軸方向 W1° S
規模 長軸上端1.50m・下端1.00m、短軸上端0.90m・下端0.50m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明

出土遺物 図示していないが、縄文時代中期に相当する土器片が数片出土している。

RD009土坑 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北東部 平面形 不整楕円形 主軸方向 N15° W
規模 長軸上端1.20m・下端0.70m、短軸上端0.80m・下端0.30m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明

出土遺物 図示していないが、縄文時代中期に相当する土器片が出土している。

RD010土坑(第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北辺部中央 平面形 不整楕円形 主軸方向 N30° E
規模 長軸上端2.00m・下端1.40m、短軸上端1.10m・下端0.70m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD011土坑(第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北西部 平面形 円形
規模 東-西 上端1.00m・下端0.40m、南-北 上端0.80m・下端0.30m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD012土坑(第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北西部 平面形 不整楕円形 主軸方向 N28° E
規模 長軸上端1.80m・下端0.80m、短軸上端1.40m・下端0.60m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD013土坑(第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区西辺部北 平面形 不整楕円形 主軸方向 N20° E
規模 長軸上端2.00m・下端1.00m、短軸上端1.20m・下端0.40m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明

出土遺物(第36図2) 縄文時代中期に相当する土器片・石器が出土している。2は凸基の石鏃で、基部への移行はなめらかであり、両面に入念な押圧剥離が施される。整形に関わる押圧剥離は古い順に、a. 背面左側縁(上端→下端)、b. 背面右側縁(上端→下端)、c. 腹面左側縁(上端→下端)、d. 腹面右側縁(上端→下端)、e. 背面基部右側縁(下端→肩部)、f. 腹面基部左側縁(肩部→下端)、g. 背面基部左側縁(下端→肩部)、h. 腹面基部右側縁(肩部)、i. 端部微調整の剥離工程が見られる。

RD014土坑(第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北西隅 平面形 不整円形
規模 東-西 上端1.40m・下端0.50m 南-北 上端1.40m・下端0.80m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD015土坑(第35図)

位置 第Ⅱ区北部中央付近 平面形 楕円～長方形 主軸方向 N15° E

規 模 長軸上端2.28m・下端1.16m、短軸上端1.40m・下端0.80m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II層上面 埋 土 不明
壁の状態 検出面から底面までの深さは1.08～1.10mをはかり、壁は段を持って外傾して立ち上がる。
底面の状態 平坦 出土遺物 図示していないが、縄文時代中期に相当する土器片が数片出土している。

R D 0 1 6 土坑 (第35図)

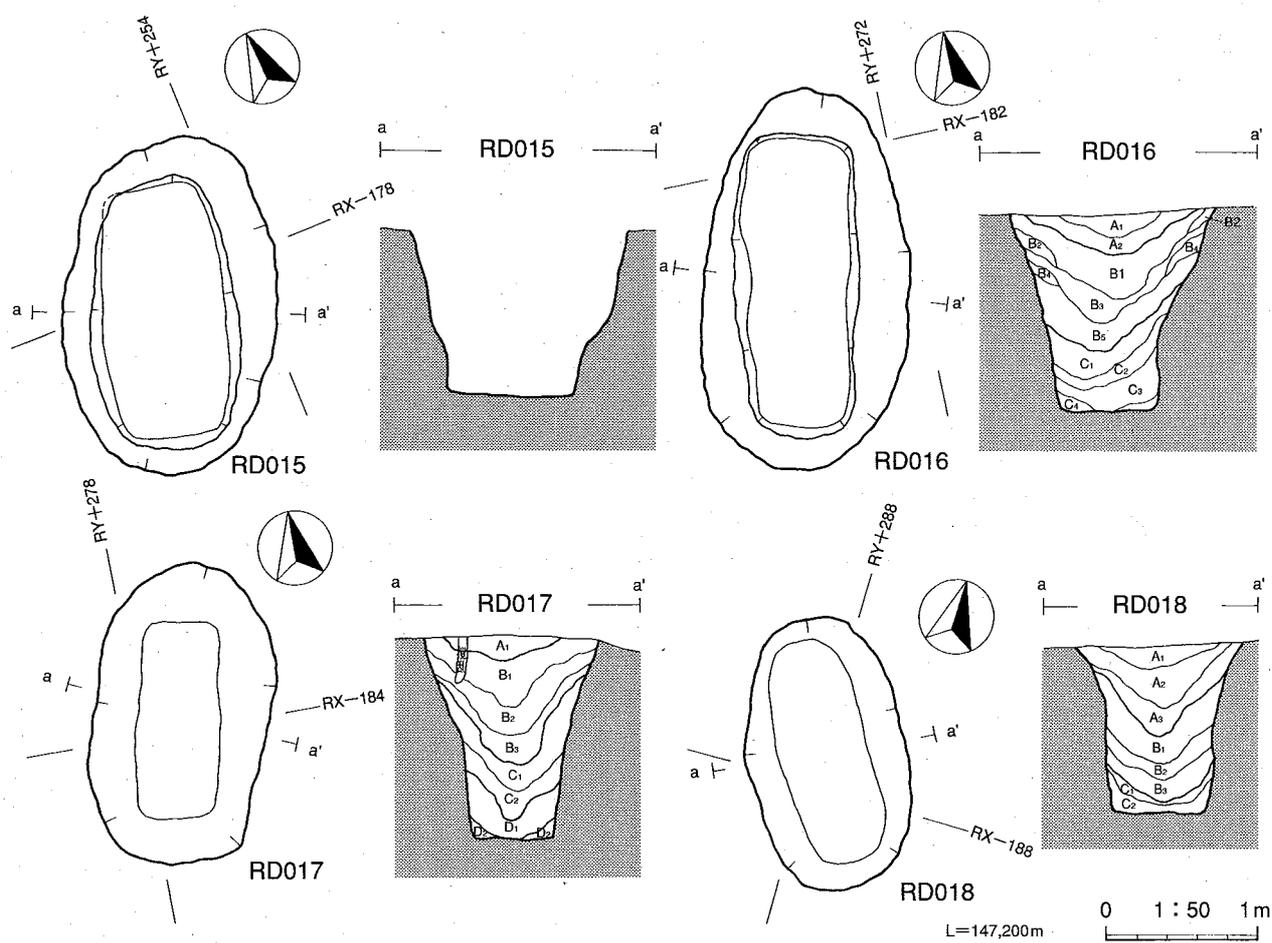
位 置 第II区中央部北東付近 平面形 楕円～長方形 主軸方向 N15° E
規 模 長軸上端2.52m・下端1.88m、短軸上端1.34m・下端0.62m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 III層上面
埋 土 自然堆積による。A～C層に大別され、A層は2層、B層は5層、C層は4層に細別される。A層は青白色火山灰を含む暗褐色土、B層は黒褐色土を主体に粒～塊状の黄褐色～褐色シルトを含み、C層は塊状の黄褐色～褐色シルトが混入する黒褐色土である。A・B₁・B₂層は炭化物を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは1.32～1.36mをはかる。壁は上半部が外傾し、下半部はほぼ直壁となる。
底面の状態 ほぼ平坦 出土遺物 図示していないが、縄文時代中期に相当する土器片が数片出土している。

R D 0 1 7 土坑 (第35図)

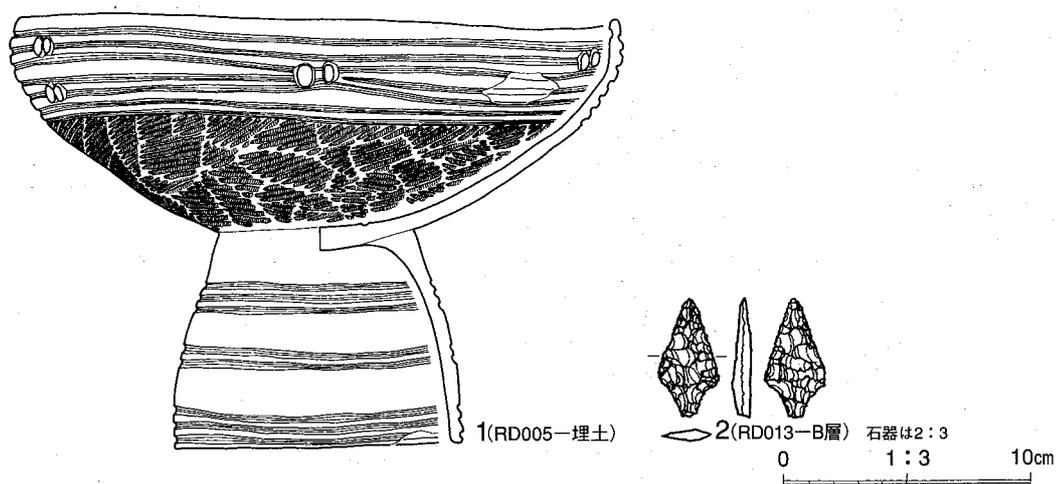
位 置 第II区中央部北東付近 平面形 楕円～長方形 主軸方向 N15° E
規 模 長軸上端1.96m・下端1.28m、短軸上端1.14m・下端0.54m
重複関係 R G 1 0 0 8 に切られる。 掘込面 削平 検出面 III層上面
埋 土 自然堆積による。A～D層の4層に大別され、B層は3層、C・D層は2層に細別される。A層は青白色火山灰を含む暗褐色土、B層は黒褐色土を主体に粒～塊状の褐色シルトを含み、C層は塊状の黒褐色土が混入する褐色シルト、D層は粒～塊状の褐色シルトが混入する暗褐色土である。B₁・B₂層は炭化物を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは1.30～1.34mをはかる。壁は上半部が外傾し、下半部はほぼ直壁となる。
底面の状態 ほぼ平坦 出土遺物 なし

R D 0 1 8 土坑 (第35図)

位 置 第II区東部中央付近 平面形 楕円～長方形 主軸方向 N28° W
規 模 長軸上端1.80m・下端1.48m、短軸上端1.06m・下端0.58m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 III層上面
埋 土 自然堆積による。A～C層の3層に大別され、A・B層は3層、C層は2層に細別される。A層は黒褐色土～暗褐色土、B層は暗褐色土と黄褐色シルトの混合土、C層は塊状の褐色シルトの混入する黒褐色土～暗褐色土である。A₁・A₂は若干の炭化物を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは1.10～1.14mをはかる。壁は上半部が外傾し、下半部はほぼ直壁となる。
底面の状態 ほぼ平坦 出土遺物 なし



第35图 RD015・016・017・018土坑



第36图 RD005・013土坑出土遺物

埋設土器 1 (第34図 罹災)

規 模 掘方は円形を呈し、掘方上端直径0.29m・下端0.12m、検出面からの深さ0.43mをはかる。

埋 土 不明 検 出 面 Ⅲ層上面

出 土 状 況 深鉢は正立の状態で見られ、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。

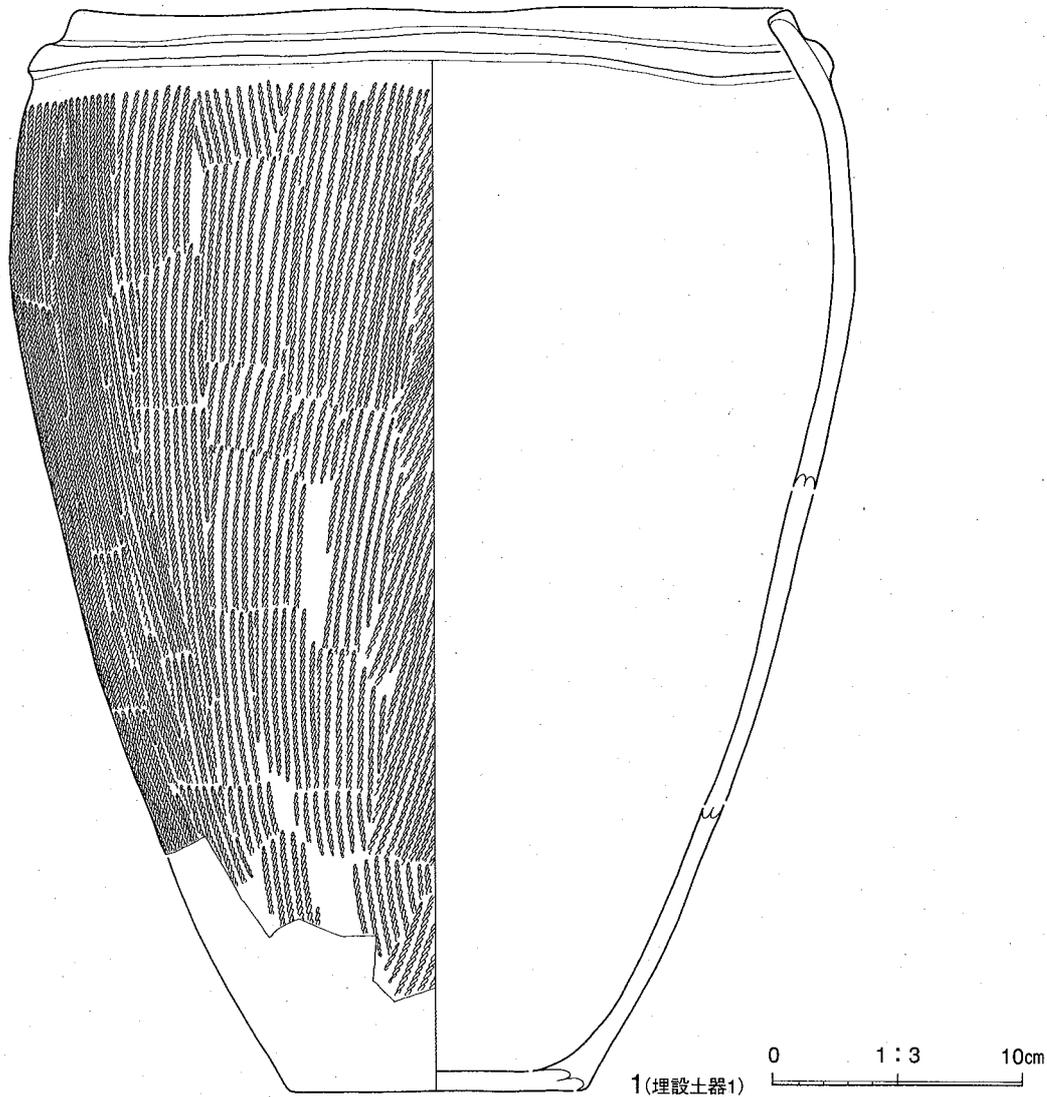
土 器 (第37図) 1は口縁部が内湾し、口縁部下に1条の隆帯を巡らす粗製の深鉢形土器である。器高は0.43m・口径0.29mをはかり、体部には縦位撚糸文が施文される。

埋設土器 2 (第34図 罹災)

規 模 掘方は円形を呈し、掘方上端0.26m・下端0.07m、検出面からの深さ0.18mをはかる。

埋 土 不明 検 出 面 Ⅲ層上面

出 土 状 況 深鉢は正立の状態で見られ、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。



第37図 埋設土器1

土器(第38図2) 2は体部上半を欠く粗製の深鉢形土器で、体部上半には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文が連結して施され、下半は上部文様帯から垂下する懸垂文が施文される。地文には複節縄文が縦位に施文される。

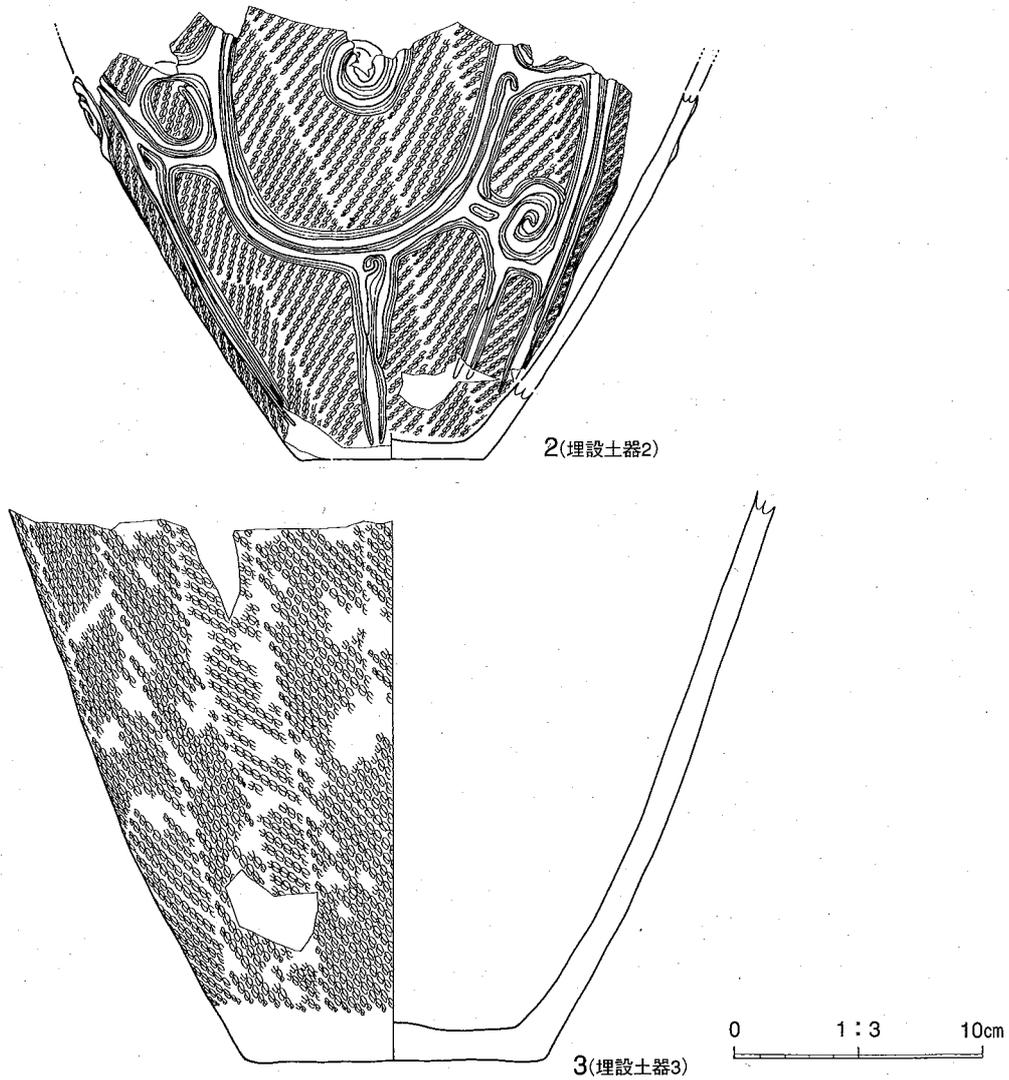
埋設土器3(第34図 罹災)

規模 掘方は円形を呈し、堀方上端0.31m・下端0.31m、検出面からの深さ0.22mをはかる。

埋土 不明 検出面 II層上面

出土状況 深鉢は倒立の状態では埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。

土器(第38図3) 3は体部上半を欠く粗製の深鉢形土器で、地文には複節縄文が縦位に施文される。



第38図 埋設土器2・3

(2) 古代の遺構と遺物

RG501 溝跡 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区南西部 平面形 直線状に南北に延びる。
規模 長さは総延長14.40mをはかり、幅は上端0.40～1.00m・下端0.10～0.30mをはかる。
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 灰白色火山灰を含む。 壁の状態 不明 底面の状態 不明
出土遺物 図示していないが、縄文時代中期～後期・平安時代に相当する土器片が数片出土している。

RG502 溝跡 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区西辺部 平面形 直線状に南北に延びる。
規模 長さは総延長58.00mをはかり、幅は上端0.80～1.80m・下端0.30～1.30mをはかる。
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 灰白色火山灰を含む。 壁の状態 不明 底面の状態 不明
出土遺物 図示していないが、縄文時代中期～晩期・弥生時代前期に相当する土器片が数片出土している。

RG503 溝跡 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区南西部 平面形 直線状に南北に延びる。
規模 長さは総延長8.60mをはかり、幅は上端0.40～1.00m・下端0.20～0.50mをはかる。
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 灰白色火山灰を含む。 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

(3) 中世・近世の遺構と遺物

RD1001 土坑 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北東部 平面形 楕円形 主軸方向 W3° E
規模 長軸上端1.00m・下端0.60m、短軸上端0.80m・下端0.30m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD1002 土坑 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北東部 平面形 楕円形 主軸方向 N1° E
規模 長軸上端1.00m・下端0.60m、短軸上端0.80m・下端0.40m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 Ⅱ層上面
埋土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD1003 土坑 (第34図 罹災)

位置 第Ⅱ区北東部 平面形 不整楕円形 主軸方向 N45° E

規 模 長軸上端1.10m・下端0.70m、短軸上端0.80m・下端0.40m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II層上面
埋 土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD1004土坑(第34図 罹災)

位 置 第II区中央部北 平面形 不整楕円形 主軸方向 W6° S
規 模 長軸上端1.20m・下端0.70m、短軸上端0.90m・下端0.50m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II層上面
埋 土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD1005土坑(第34図 罹災)

位 置 第II区西辺部北 平面形 不整長方形 主軸方向 N20° E
規 模 長軸上端2.70m・下端1.70m、短軸上端1.40m・下端0.80m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II層上面
埋 土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明
出土遺物 図示していないが、縄文時代中期に相当する土器片が出土している。

RD1006土坑(第34図 罹災)

位 置 第II区西部 平面形 不整楕円形 主軸方向 W35° N
規 模 長軸上端1.70m・下端1.00m、短軸上端0.90m・下端0.50m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II層上面
埋 土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD1007土坑(第34図 罹災)

位 置 第II区西辺部中央 平面形 不整楕円形 主軸方向 N15° W
規 模 長軸上端1.50m・下端0.70m、短軸上端1.10m・下端0.40m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II層上面
埋 土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明 出土遺物 なし

RD1008土坑(第34図 罹災)

位 置 第II区西部 平面形 不整楕円形 主軸方向 W40° N
規 模 長軸上端1.40m・下端0.90m、短軸上端1.00m・下端0.50m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II層上面
埋 土 不明 壁の状態 不明 底面の状態 不明
出土遺物 図示していないが、縄文時代中期に相当する土器片が出土している。

RG1001溝(第34図 罹災)

位 置 第II区東辺部 平面形 直線状に南北に延びる。

規 模 長さは総延長34.08mをはかり、幅は上端0.68～1.40m・下端0.04～1.16mをはかる。
重 複 関 係 なし 掘 込 面 削 平 検 出 面 Ⅲ層上面
埋 土 不明 壁 の 状 態 不明 底 面 の 状 態 不明
出 土 遺 物 図示していないが、縄文時代中期～後期・平安時代に相当する土器片が数片出土している。

RG1002 溝跡 (第34図 罹災)

位 置 第Ⅱ区東辺部 平 面 形 直線状に南北に延び、中央部は攪乱のため不明。
規 模 長さは総延長23.88mをはかり、幅は上端0.44～0.70m・下端0.32～0.56mをはかる。
重 複 関 係 なし 掘 込 面 削 平 検 出 面 Ⅲ層上面
埋 土 不明 壁 の 状 態 不明 底 面 の 状 態 不明
出 土 遺 物 図示していないが、平安時代に相当する須恵器甕の体部片が出土している。

RG1003 溝跡 (第34図 罹災)

位 置 第Ⅱ区東辺部中央 平 面 形 直線状に東西に延び、西端付近は攪乱される。
規 模 長さは総延長6.42mをはかり、幅は上端0.28～0.78m・下端0.20～0.58mをはかる。
重 複 関 係 なし 掘 込 面 削 平 検 出 面 Ⅲ層上面
埋 土 不明 壁 の 状 態 不明 底 面 の 状 態 不明 出 土 遺 物 なし

RG1004 溝跡 (第34図 罹災)

位 置 第Ⅱ区東辺部中央 平 面 形 直線状に東西に延び、中央部は攪乱のため不明。
規 模 長さは総延長4.84mをはかり、幅は上端0.24～0.40m・下端0.16～0.32mをはかる。
重 複 関 係 なし 掘 込 面 削 平 検 出 面 Ⅲ層上面
埋 土 不明 壁 の 状 態 不明 底 面 の 状 態 不明 出 土 遺 物 なし

RG1005 溝跡 (第39図)

位 置 第Ⅱ区東辺部中央 平 面 形 直線状に南北に延びる。
規 模 長さは総延長19.5mをはかり、幅は上端0.32～0.70m・下端0.02～0.38mをはかる。
重 複 関 係 なし 掘 込 面 削 平 検 出 面 Ⅲ層上面
埋 土 自然堆積による。黒褐色土～暗褐色土を主体に塊状の褐色シルトを含む単層である。
壁 の 状 態 検出面から底面までの深さは0.12～0.24mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。
底 面 の 状 態 底面はほぼ平坦であるが、部分によっては狭くなる箇所がある。
出 土 遺 物 図示していないが、縄文時代早期～晩期・弥生時代前期に相当する土器片が数片出土している。

RG1006 溝跡 (第39図)

位 置 第Ⅱ区東辺部中央 平 面 形 直線状に南北に延び、中央部、北端は攪乱のため不明。
規 模 長さは総延長12.32mをはかり、幅は上端0.28～1.32m・下端0.16～0.52mをはかる。
重 複 関 係 なし 掘 込 面 削 平 検 出 面 Ⅱ～Ⅲ層上面
埋 土 自然堆積による。黒褐色土を主体に粒～塊状の褐色シルトを含む単層である。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.16mをはかり、壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。

底面の状態 底面はほぼ平坦であるが、部分によっては狭くなる箇所がある。

出土遺物 なし

RG1007溝跡 (第39図)

位置 第Ⅱ区東辺部中央

平面形 直線状に南北に延びる。

規模 長さは総延長7.0mをはかり、幅は上端0.36~0.56m・下端0.12~0.32mをはかる。

重複関係 なし

掘込面 削平

検出面 Ⅲ層上面

埋土 不明

壁の状態 不明

底面の状態 不明

出土遺物 なし

RG1008溝跡 (第40図)

位置 第Ⅱ区北東部

平面形 中央部付近に屈曲をもつ。

規模 長さは総延長37.6mをはかり、幅は上端0.32~1.64m・下端0.20~1.44mをはかる。

重複関係 RD017を切る。

掘込面 削平

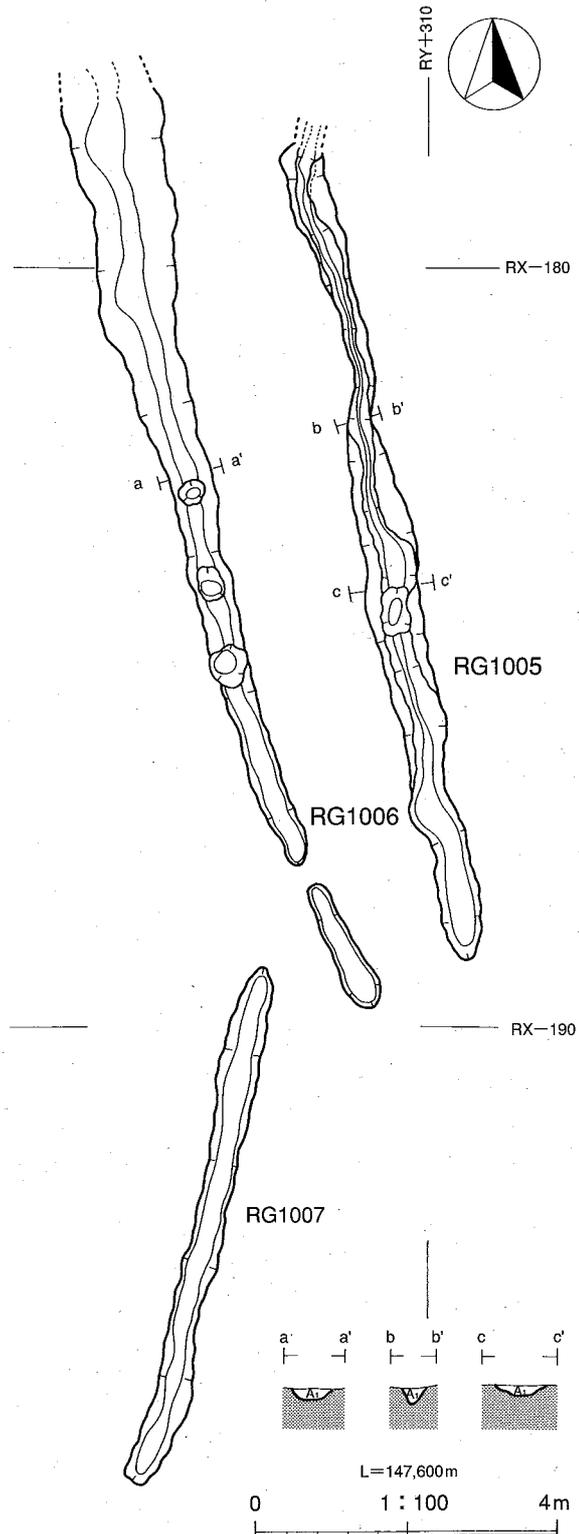
検出面 Ⅱ~Ⅲ層上面

埋土 自然堆積による。黒褐色土~暗褐色土を主体に、粒~塊状の褐色シルトを含む単層である。

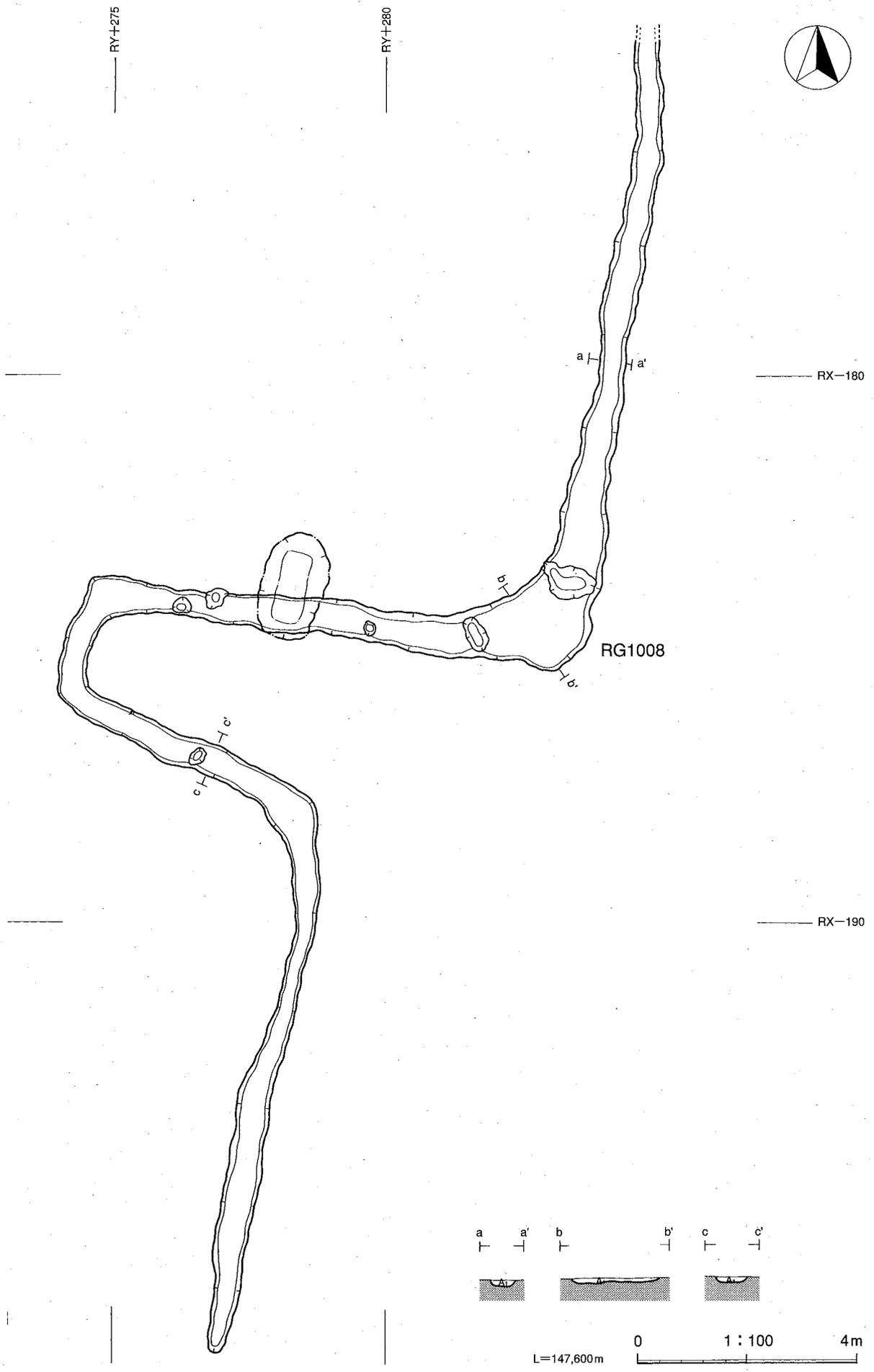
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.08~0.12mをはかり、壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。

底面の状態 ゆるやかな起伏がある。

出土遺物 図示していないが、縄文時代中期~後期・平安時代の土器片が数片出土している。



第39図 RG1005・1006・1007溝跡



第40図 RG1008溝跡

(4) 遺構外出土遺物

土器 (第41~49図)

縄文時代早期末葉 (第41図1) 1は縄文時代早期末葉の土器である。体部片で、表裏に縄文が施文される。胎土には雲母および繊維が含まれる。

前期前葉 (第41図2・3) 2・3は縄文時代前期前葉の土器群である。同一個体で、口縁部にかけて直線的に開く器形の深鉢形土器である。口唇部は平坦に調整され、口縁部には2条の結節RL縄文が横位に施される。地文には、RL縄文が横位に施文される。胎土には繊維を多量に含む。

中期 (第41~46図4~69) 4~69は縄文時代中期の土器群である。4は口縁部が内湾する器形の深鉢形土器である。口唇部は平坦に調整され、口縁部は無文帯となる。体部上半には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文が連結して施され、下半は上部文様帯から垂下する懸垂文が施文される。地文には複節縄文が縦位に施文される。5は口縁部にかけて外傾し、頸部に屈曲を持つ器形の深鉢形土器で、口縁部および体部下半を欠く。口頸部は無文帯となり、体部上半には隆沈線による渦巻文が施される。地文には単節縄文が横位に施文される。6~12・14は推定2~8単位の大波状口縁を呈し、口縁部にかけて大きく外傾する器形の小形深鉢である。6は推定2単位の大波状口縁で、外反部は無文帯となり、体部上半には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文が連結して施され、下半は上部文様帯から垂下する懸垂文が施文される。地文には単節縄文が縦位に施文される。7は推定2単位の大波状口縁で、外反部は無文帯となり、有棘渦巻文から隆沈線を垂下する懸垂文が施される。地文には単節縄文が縦位に施文される。8・9は口縁部欠損で、体部に最大径を持つ器形の小形深鉢である。体部上半には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文・円文が連結して施され、下半は上部文様帯から垂下する懸垂文が施文される。地文には複節縄文が縦位に施文される。10は推定8単位の大波状口縁で、波頂下には沈線による渦巻文と懸垂文が施される。外反部は無文帯となり、有棘渦巻文から隆沈線を垂下する懸垂文が施される。地文には複節縄文が縦位に施文される。11は推定4単位の大波状口縁で、口縁部は無文帯となり、地文には単節縄文が縦位に施文される。12・14は底部欠損の推定4単位の大波状口縁で、体部文様帯には3条の横位平行沈線から垂下する懸垂文・波状文が施される。地文には単節縄文が縦位に施文される。15は体部片で、小渦巻文から垂下する懸垂文が施される。13・43は口縁部に橋状の把手を持つ器形のキャリパー形深鉢である。把手部下には沈線による渦巻文と懸垂文が施され、43の把手間には刺突列を充填させる楕円文が配される。地文は13には複節縄文が横位に施文され、43は無文となる。42は有孔の弁状突起を持つ無文の深鉢片である。16~41・44~54・57は口縁部が内湾する器形の深鉢形土器である。16~41は体部上半には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文が連結して施され、下半は上部文様帯から垂下する懸垂文が施文される粗製深鉢である。19は口縁部が無文帯となり、地文には16・39には縦位撚糸文が、それ以外には複節縄文が縦位に施文される。44・52・53は体部下半欠損の粗製深鉢である。口唇部は平坦に調整され、口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文・円文・楕円文が施される。地文には複節縄文が横位に施文される。45~47・49・54は体部下半欠損の粗製深鉢である。口唇部は平坦に調整され、口縁部下には1条の隆帯が施される。地文には45・46は複節縄文、54は単節縄文がそれぞれ縦位に施文される。48は複合口縁で、口縁部は無文帯となり、地文には複節縄文が縦位に施文される。57は口唇部が平坦に調整され、口縁部は無文帯となり、地文には複節縄文が縦位に施文

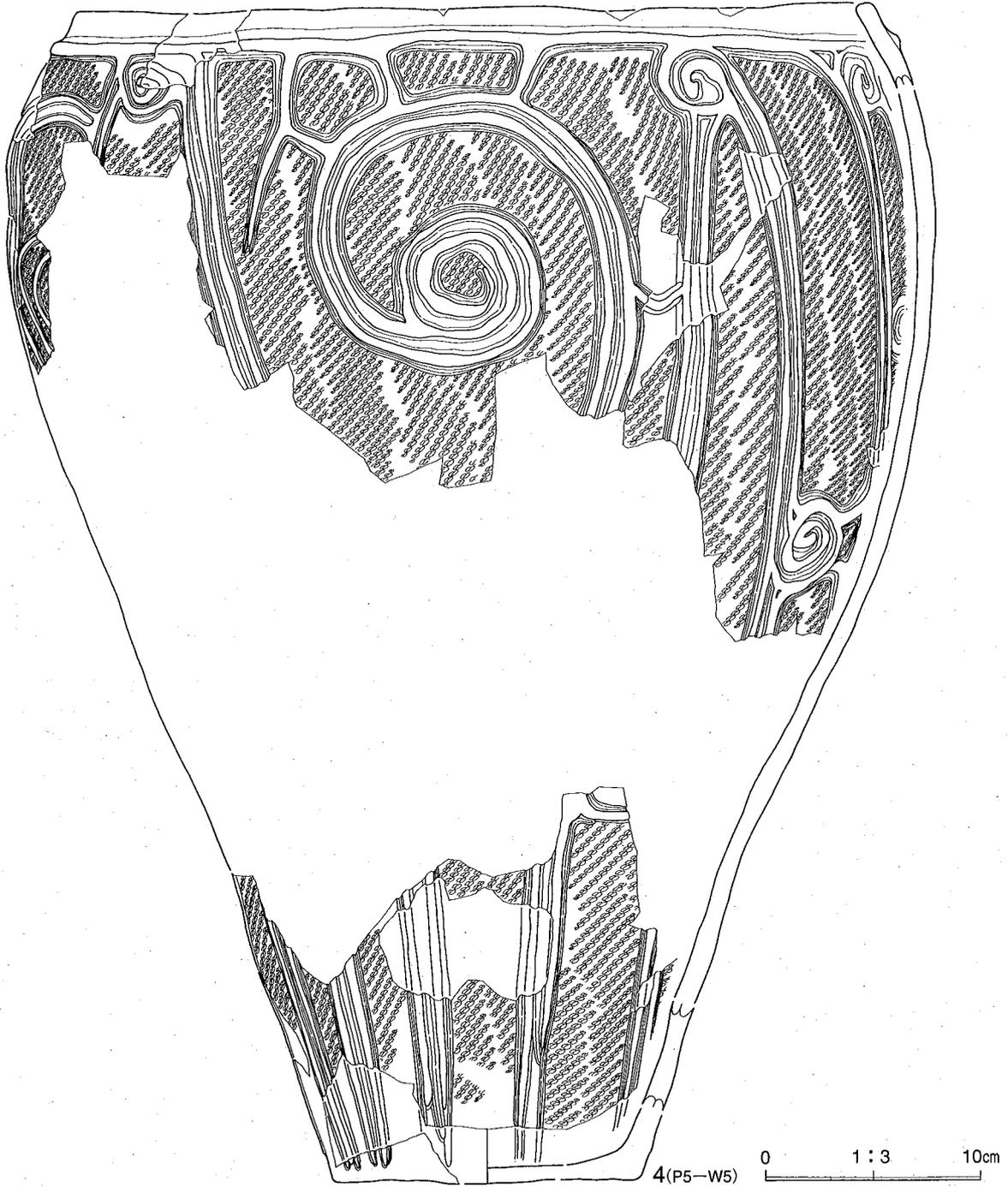
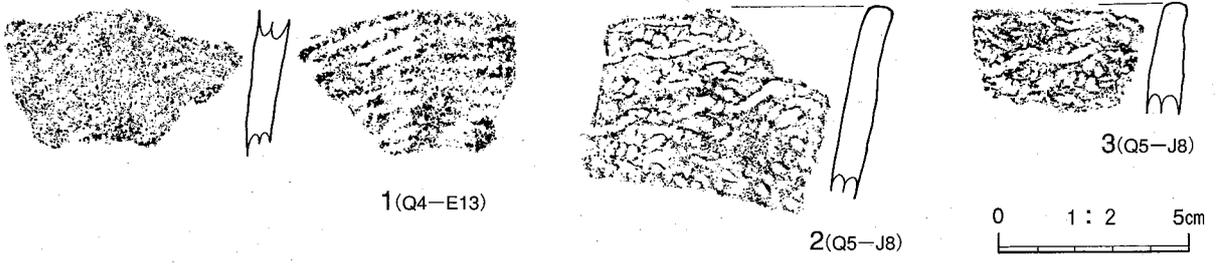
される。55は体部下半の土器片で、地文には複節縄文が縦位に施文され、原体はL R L縄文である。56は口縁部にかけて直線的に開く器形の深鉢形土器である。口唇部は平坦に調整され、地文には単節縄文が縦位に施文される。58・59は口縁部にかけて直線的に開く器形の深鉢形土器である。口唇部は平坦に調整され、地文には58では単節縄文、59では結節のある縄文がそれぞれ縦位に施文される。60～64はゆるやかな波状口縁で、口縁部まで内湾する器形の深鉢形土器である。沈線により渦巻文・逆U字文が全面に描かれ、それ以外の地文は磨り消され無文化する。65～69は深鉢形土器の底部である。65～67は無文、68は地文に単節縄文、69は複節縄文がそれぞれ縦位に施文される。

後期前葉 (第47図70) 70は縄文時代後期前葉の深鉢形土器の体部片である。器面には花弁状刺突が施され、地文には単節縄文が縦位に施文される。

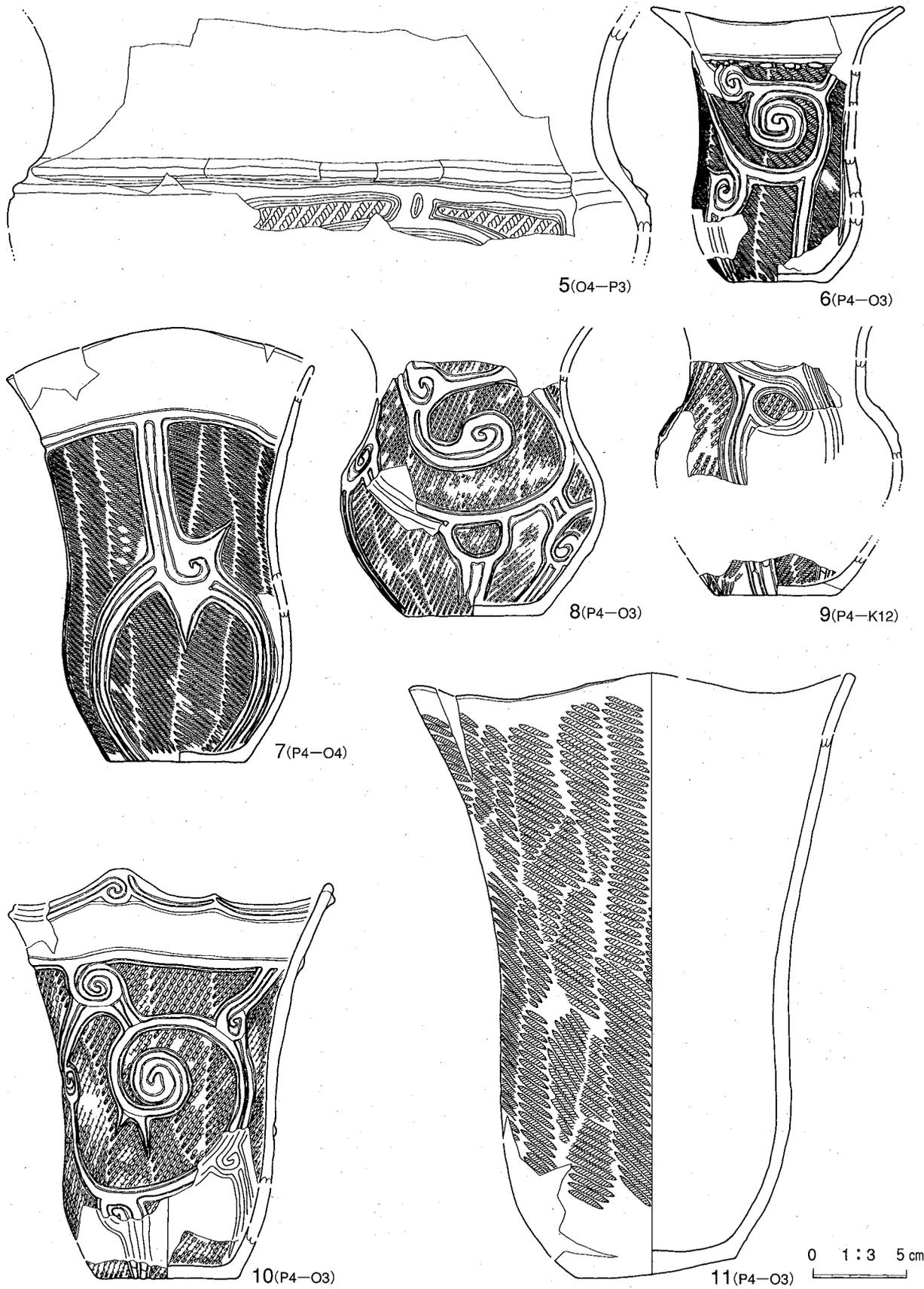
後期中葉 (第47図71～82) 71～82は縄文時代後期中葉の土器群である。71は深鉢形土器の体部片で、無文に逆S字状の懸垂文が施される。72～79・82は磨消縄文手法による沈線で区画された文様が展開する土器群である。72は深鉢形土器の体部片で、L字形文が施される。73・74は壺形土器の体部片で、波状文・弧状文の組み合わせによる入組文的なモチーフが展開する。75・76は口縁部にかけて直線的に開く器形の土器の口縁部片で、同一個体である。口唇部は平坦に調整され、口縁部には1条の帯縄文が横位に施される。77・78は口縁部に小突起を持つ器形の土器の口縁部片で、同一個体である。平行沈線・L字形文の組み合わせによる入組文的モチーフが展開し、磨消縄文帯上にはコブが貼付される。79は口縁部が内湾気味に外傾する器形の土器の口縁部片である。口唇部は平坦に調整され、平行沈線は横位に展開する。82は口縁部まで外反気味に開く器形の深鉢形土器で、口縁部から体部上半にかけて残存している。推定8単位の大波状口縁で、波頂部には挟りが入る。口縁部には2段の楕円文が、沈線上には刺突が施される。80は口縁部が若干外反し、頸部が屈曲する器形の壺形土器である。口唇部は平坦に調整され、横位の原体圧痕によって区画された口頸部は無文帯となり、体部には単節縄文が縦位に施文される。81は口縁部まで内湾気味に外傾する器形の深鉢形土器で、体部下半～底部を欠く。口唇部は平坦に調整され、体部には単節縄文が縦位に施文される。

晩期 (第47図83～89) 83～89は縄文時代晩期の土器群である。83は口縁部にかけて内湾気味に外傾する器形の鉢形土器の体部片である。体部上半には三叉文が施される。84は口縁部が内湾する器形の鉢形土器の口縁部片である。口唇部は平坦に調整され、口縁部には歯列状羊歯状文、体部には直線状雲形文が施される。85・86は口縁部に小突起を持つ器形の鉢形土器片で、同一個体である。口縁部下に多条の横位平行沈線が施される。87は口縁部が内湾気味に外傾し、口頸部が屈曲する器形の壺形土器で、口縁部～体部上半にかけて残存している。口唇部は平坦に調整され、口縁部には1条の帯状文が横位に施されており、口頸部は無文帯となる。88・89は口縁部にかけて内湾気味に外傾する器形の鉢形土器の口縁部片である。88は口唇部が平坦に調整され、89は口唇部に刻目が、口縁部下にはそれぞれ工字文が施される。

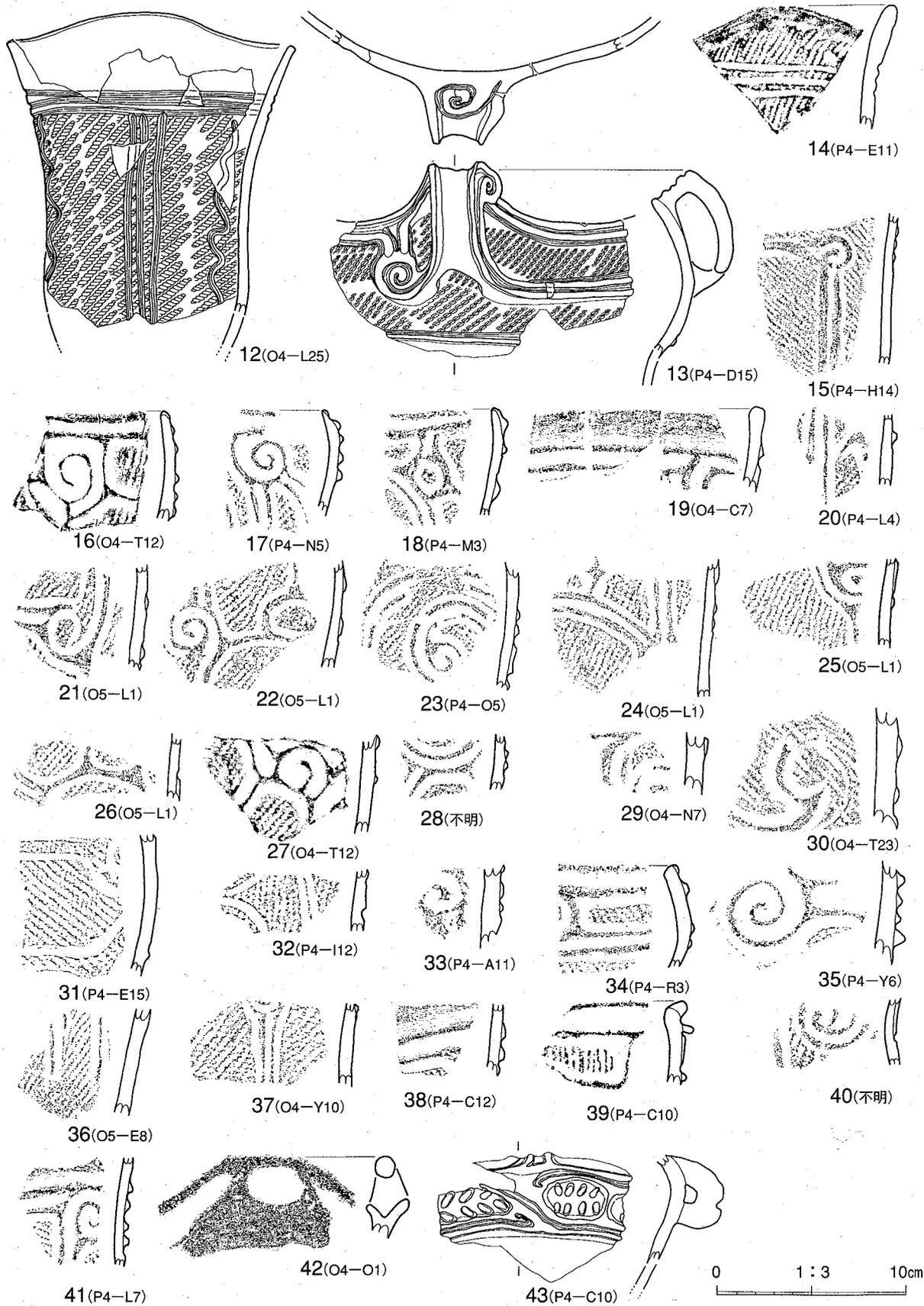
弥生時代前期 (第48・49図) 90～116は弥生時代前期の土器群である。90は口縁部まで内湾気味に外傾する器形の鉢形土器である。推定4単位の大波状口縁で、口縁部には3条の平行沈線が横位に施される。地文には単節縄文が縦位に施文される。91～103は磨消縄文手法による沈線で区画された文様帯が展開する土器群である。91～101は口縁部まで直線的に開く器形の高環形土器の坏部である。大波状口縁で、口縁部下には平行沈線・鋸歯文・弧状文の組み合わせによる幾何学的モチーフが展開する。94は口唇部に刻目が入り、91・92・94・95・97の磨消縄文帯上には列点文が施される。102・



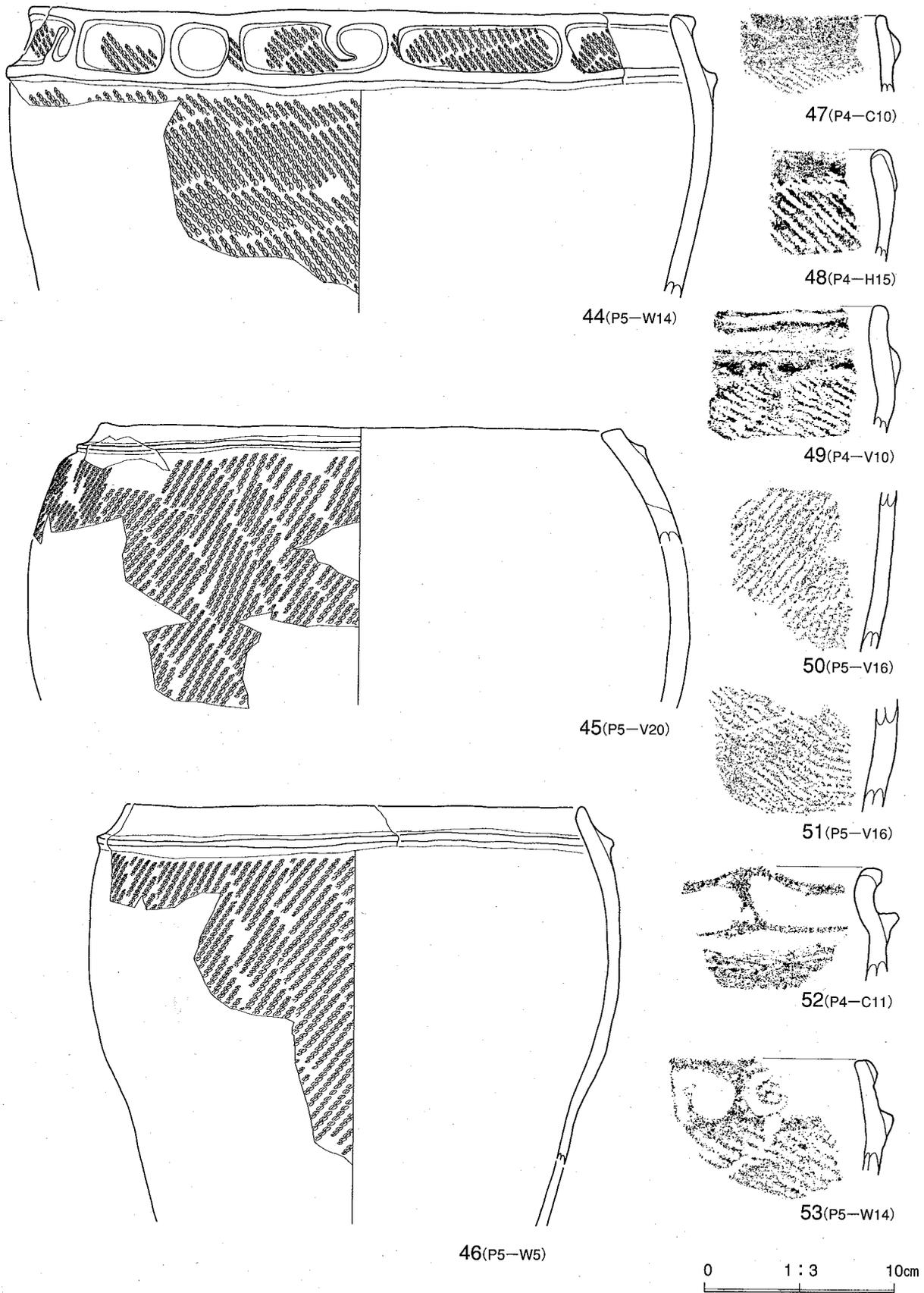
第41图 遺物包含層出土遺物 (1) 縄文早期・前期・中期



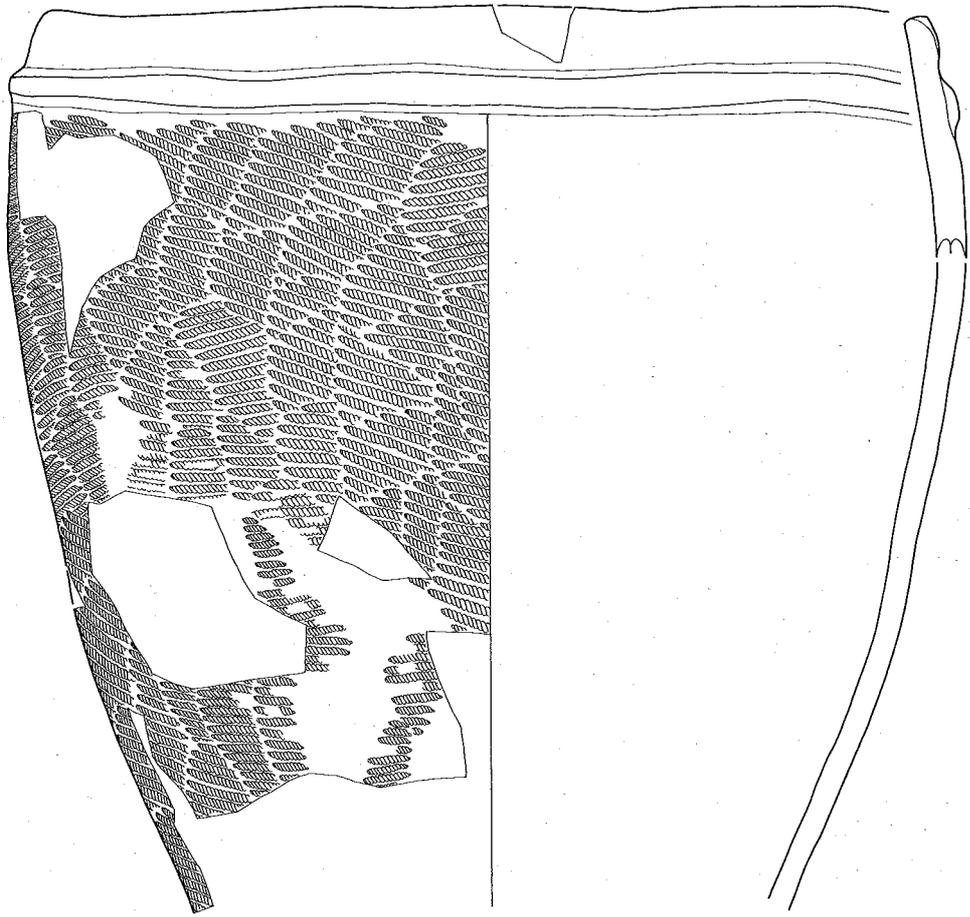
第42図 遺物包含層出土遺物 (2) 縄文中期1



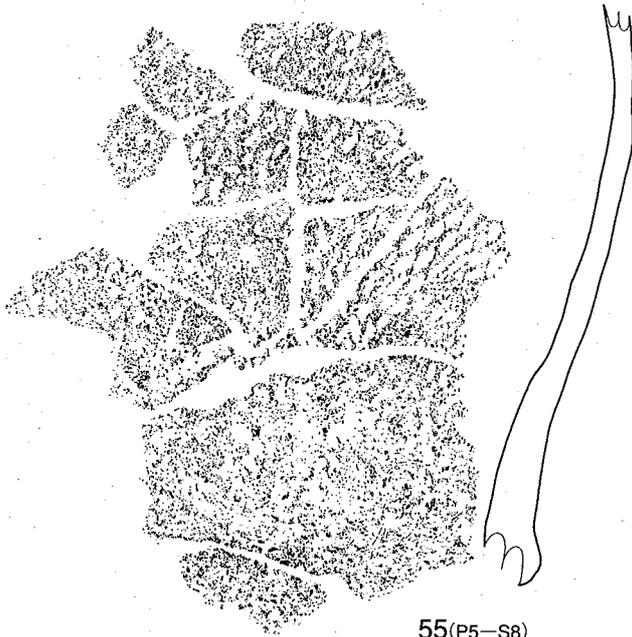
第43圖 遺物包含層出土遺物 (3) 繩文中期2



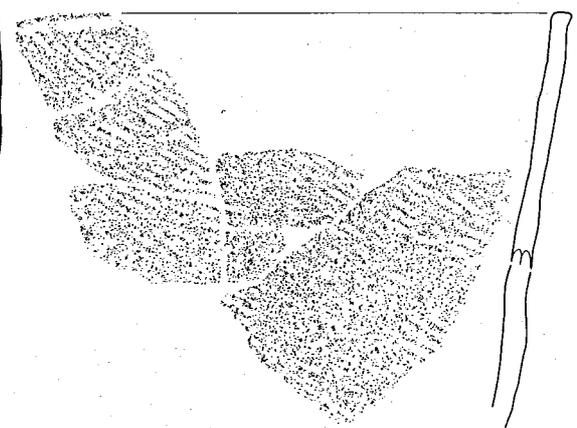
第44図 遺物包含層出土遺物 (4) 縄文中期 3



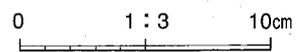
54(P5-V16)



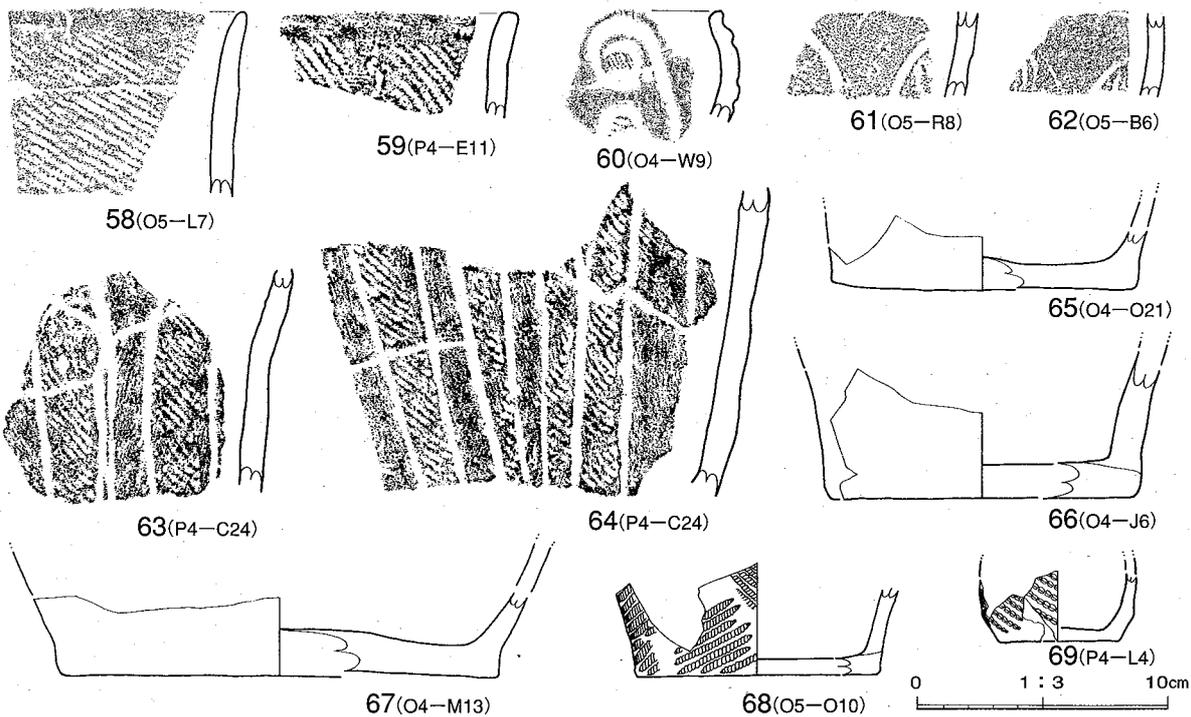
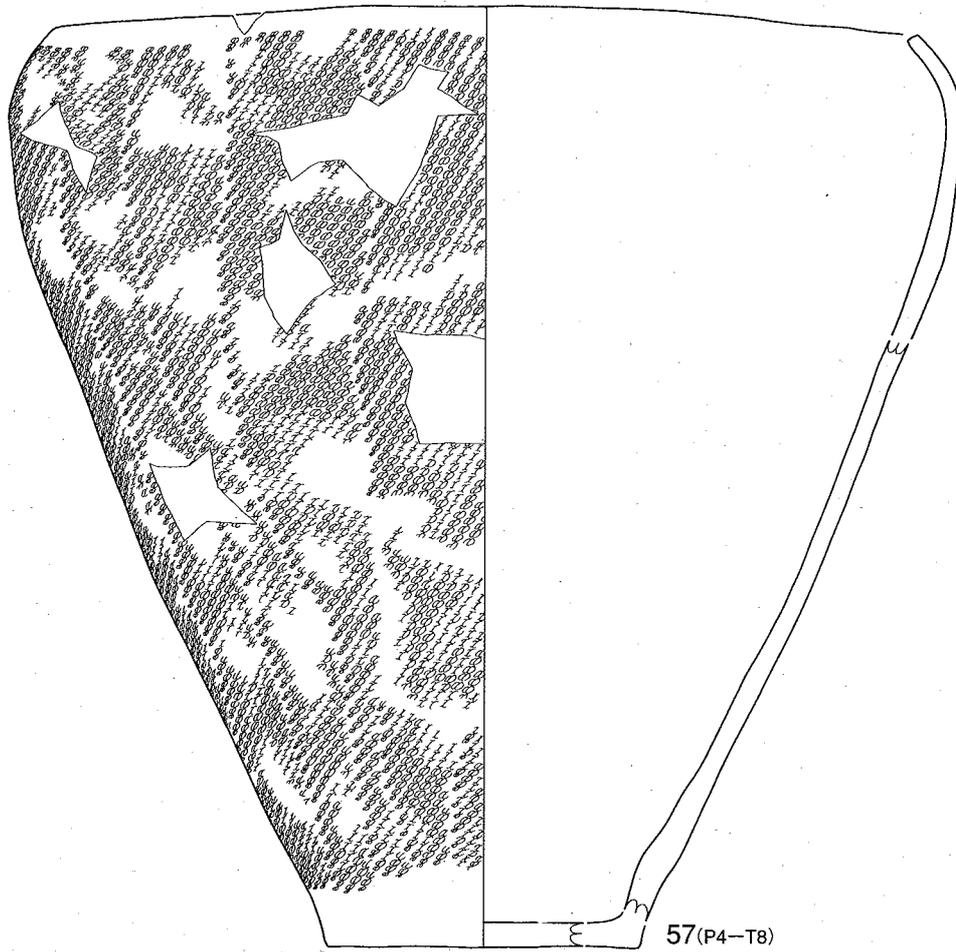
55(P5-S8)



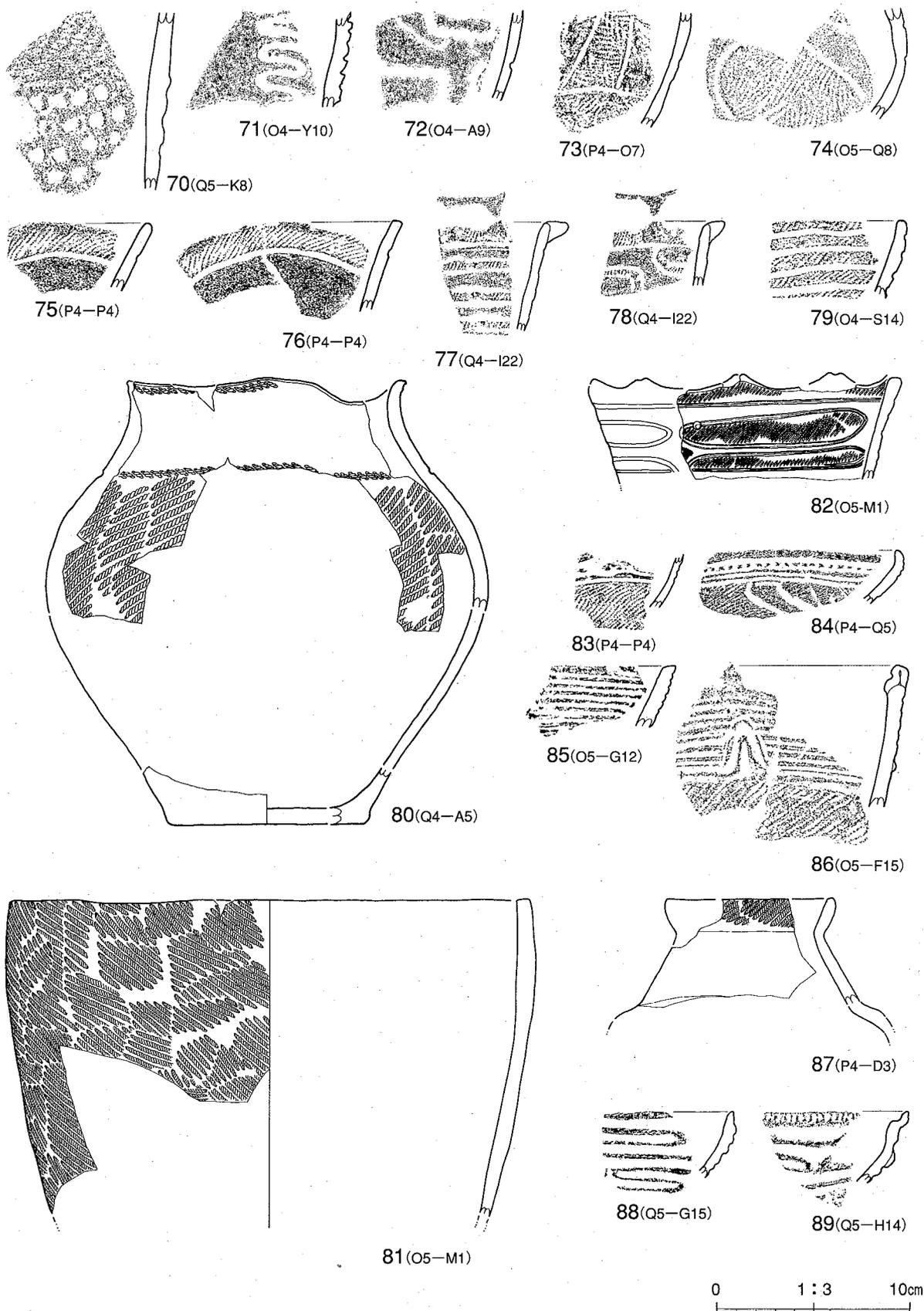
56(P5-X15)



第45図 遺物包含層出土遺物 (5) 縄文中期 4

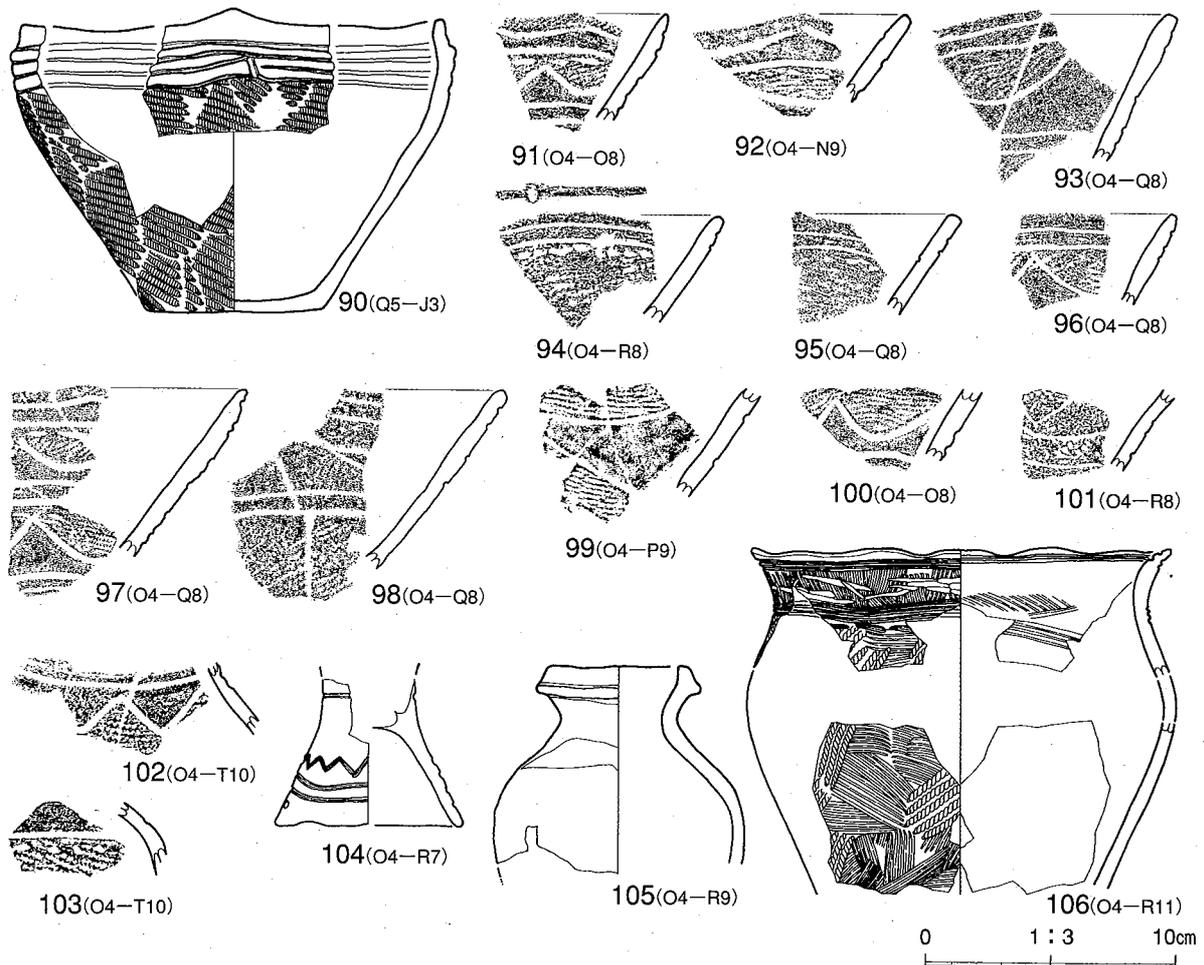


第46圖 遺物包含層出土遺物 (6) 繩文中期5

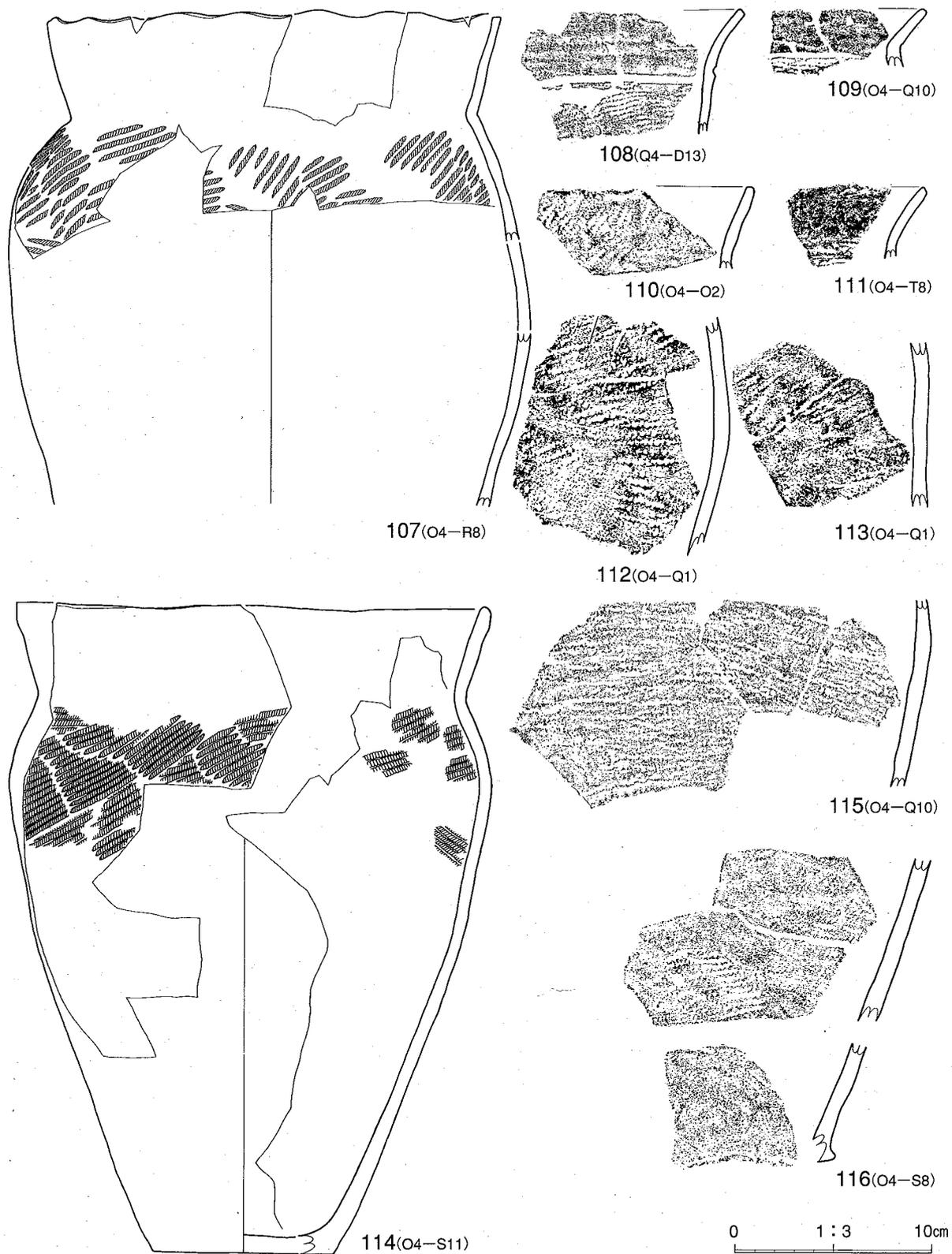


第47図 遺物包含層出土遺物 (7) 縄文後期・晩期

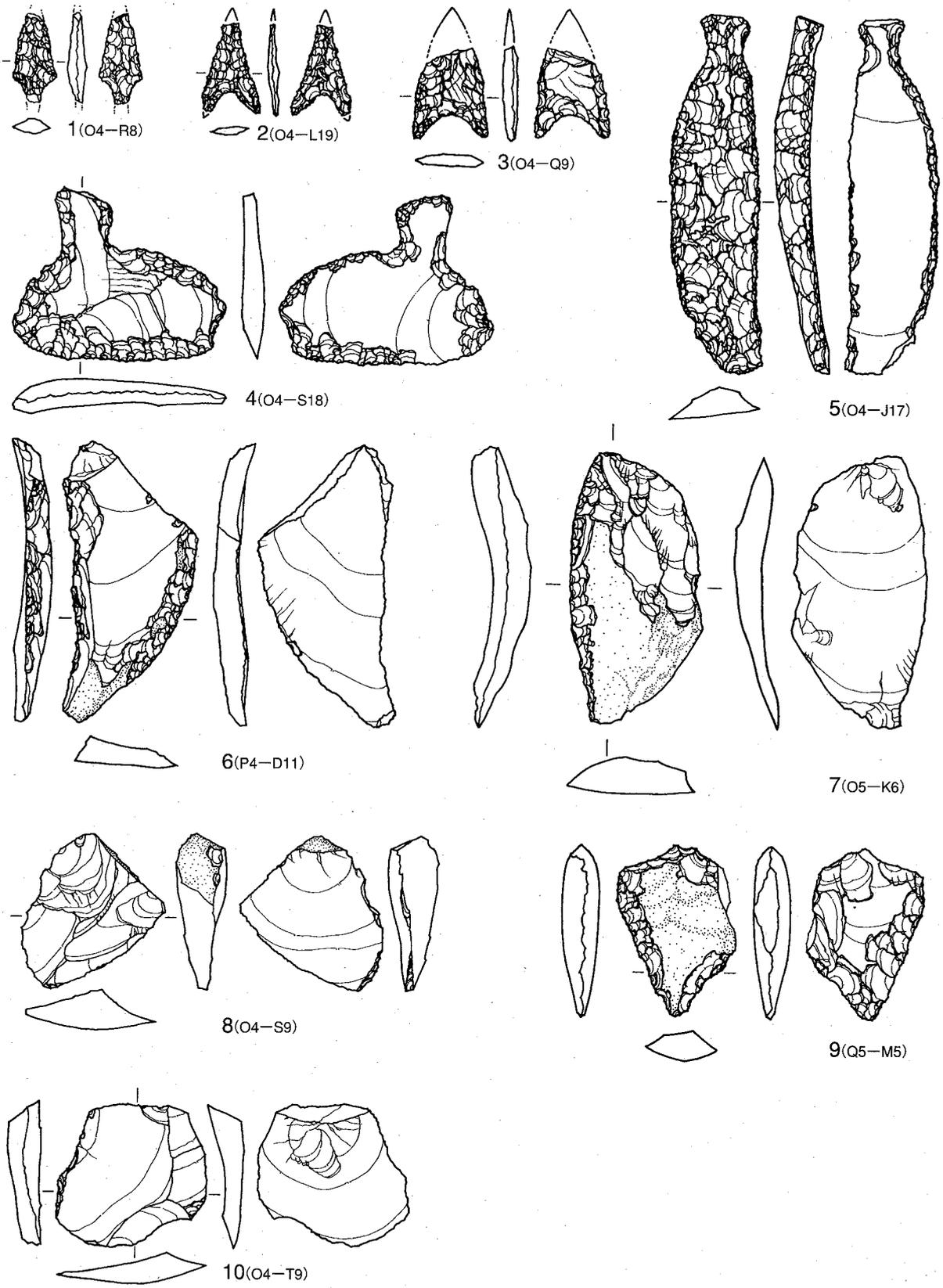
103は壺形土器の体部片で、同一個体である。体部には平行沈線・鋸歯文の組み合わせによる幾何学的モチーフが展開し、103の磨消縄文帯上には列点文が施される。104は高環形土器の台部である。台形状の器形で、無文に平行沈線・鋸歯文が施される。105は底部欠損の無文の壺形土器である。口唇部は平坦に調整され、口縁部下には1条の隆帯が施される。106は底部欠損の口縁部が外反し、頸部が屈曲する器形の甕形土器である。ゆるやかな小波状口縁で、口頸部は2本1組の横位平行沈線によって体部と区画される。口頸部の横位平行沈線下には横位の短沈線が列点状に施される。器面の内外にはハケメによる器面調整が施され、ハケメ調整後、斜位・縦位に縄文が施される。胎土には微量の雲母・石英粒と多量の海綿骨針が含まれる。107~116は口縁部が外傾し、頸部が屈曲する器形の甕形土器である。107は口唇部押圧による小波状口縁で、体部下半~底部を欠く。口頸部は無文帯となり、体部には横走縄文が施文される。108~111は口縁部片で、108・110は口唇部押圧による小波状口縁、109・111は口唇部が平坦に調整される。108・109・111の口頸部は無文帯となり、108・109においては体部との境に1条の平行沈線が施される。体部および110の口頸部には横走縄文が施文される。112・113・115・116は体部片で、117は底部片である。地文には横走縄文が施文される。114は口唇部が平坦に調整され、口頸部は無文帯となり、体部には横走縄文が施文さ



第48図 遺物包含層出土遺物 (8) 弥生前期1



第49図 遺物包含層出土遺物 (9) 弥生前期 2

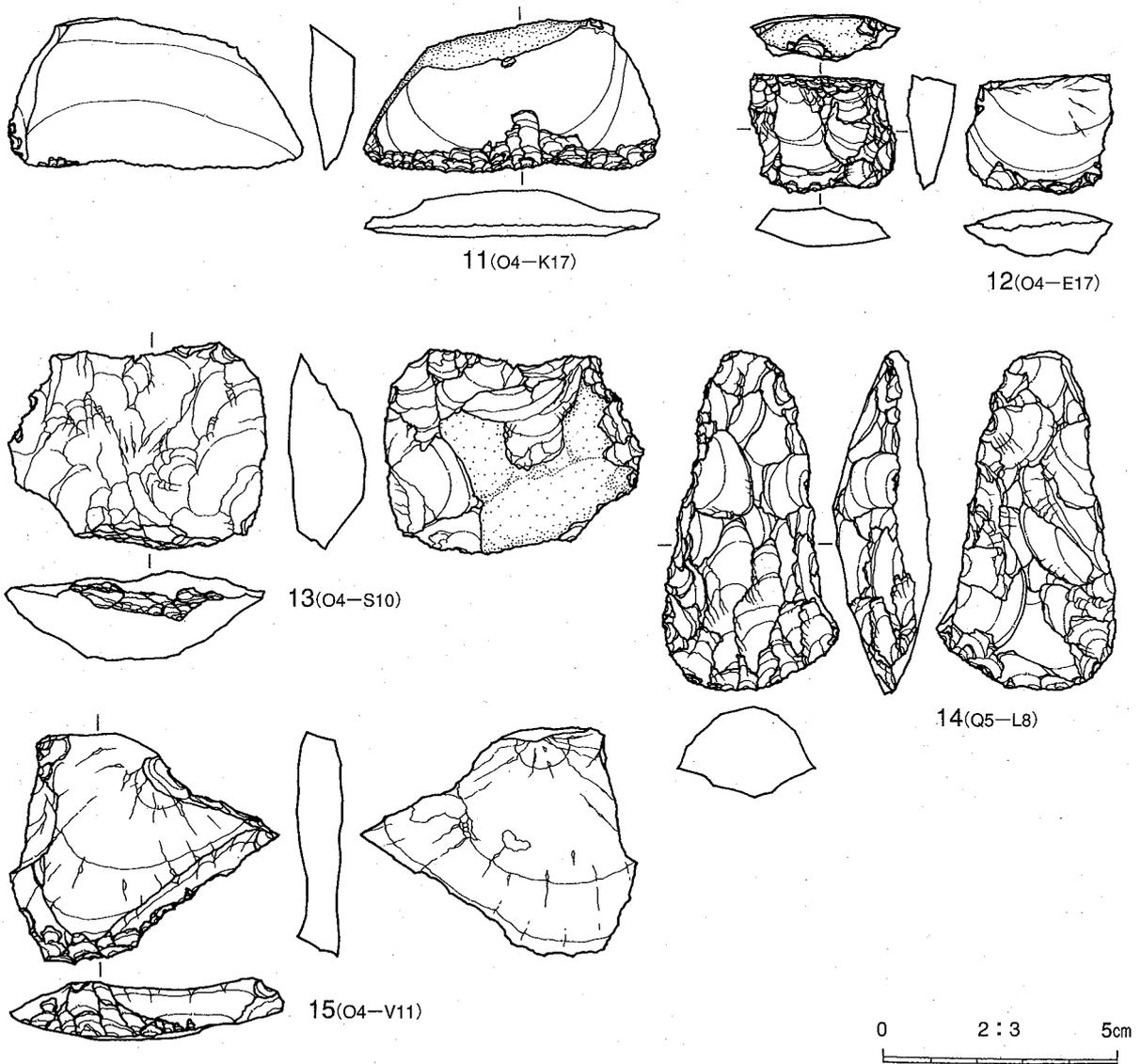


0 2:3 5 cm

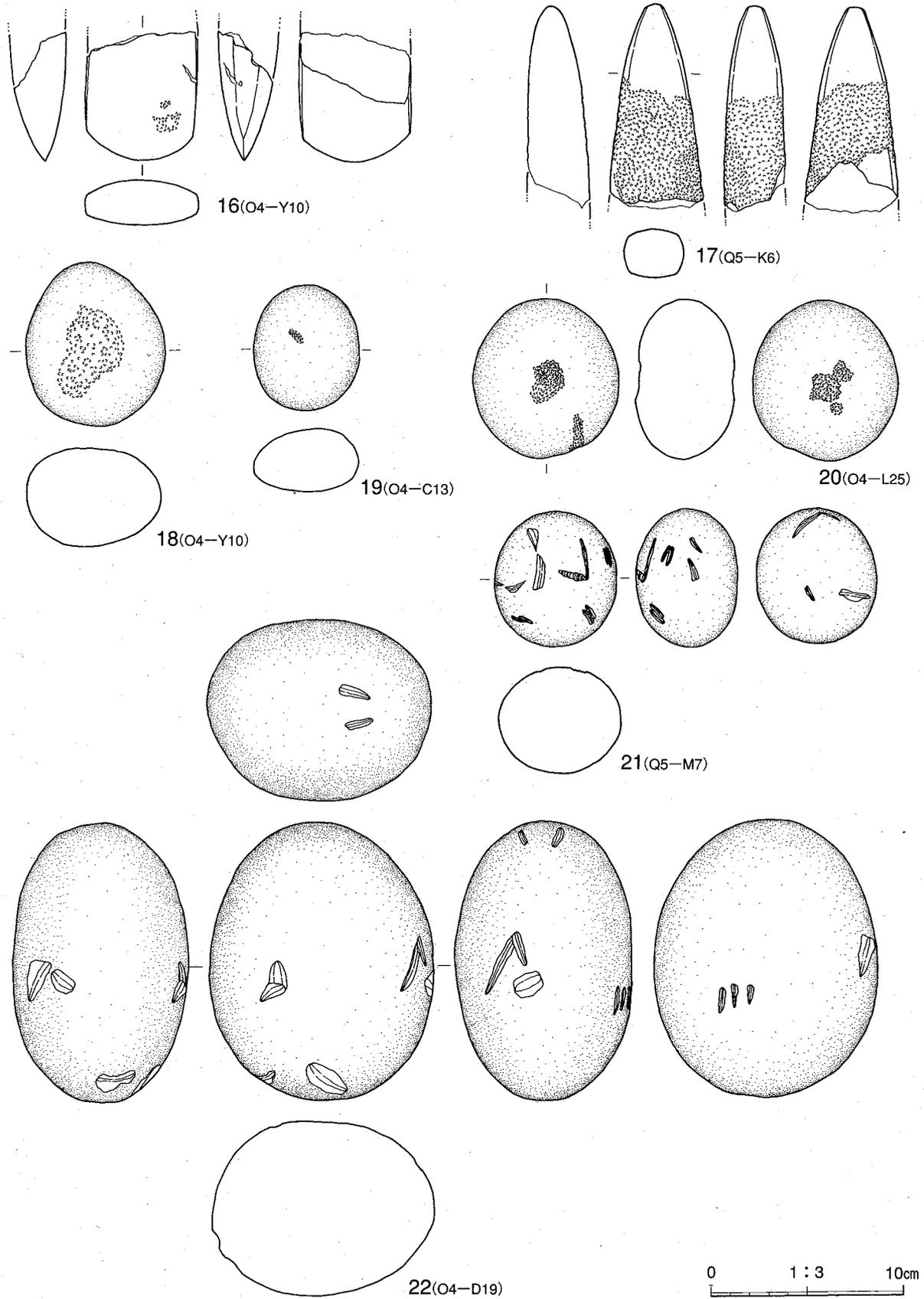
第50圖 遺物包含層出土遺物 (10) 石器 1

れる。

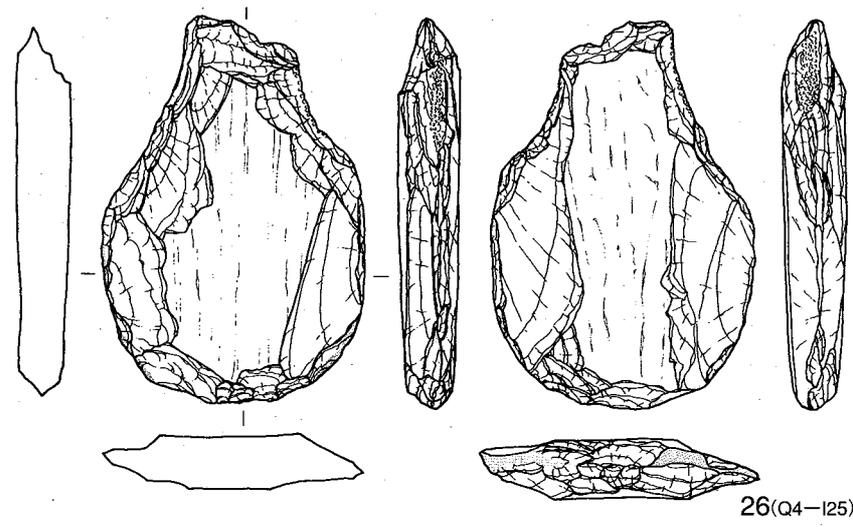
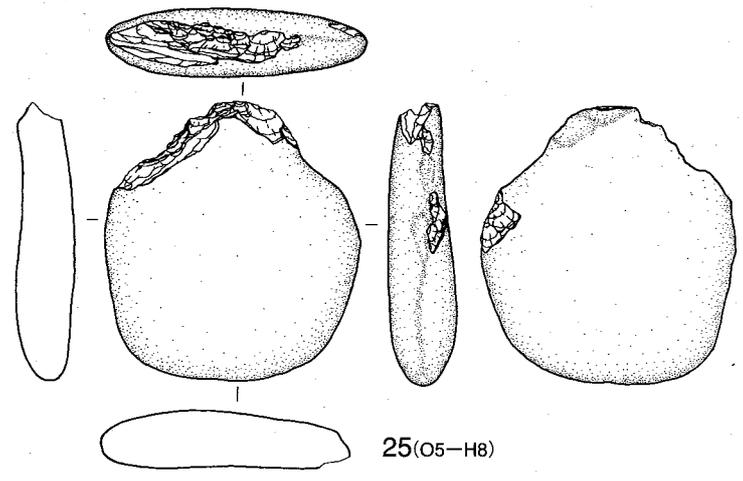
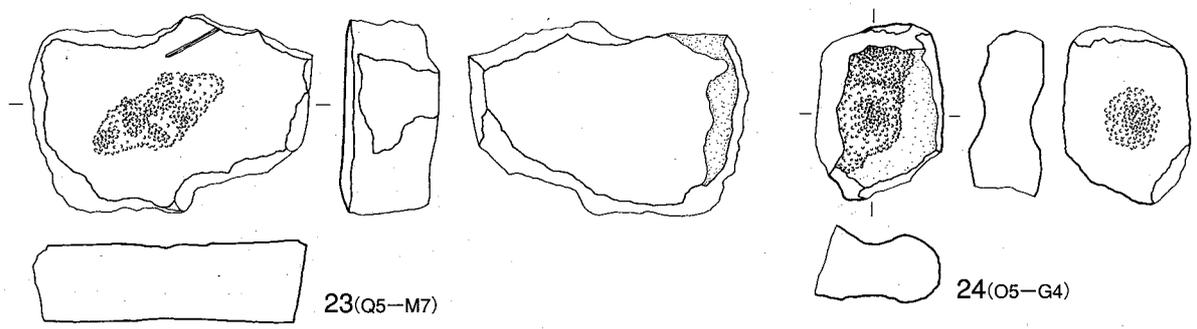
石器 (第50~53図) 1は凸基の石鏃で、先端部および凸部が欠損している。2・3は凹基の石鏃で、先端部および2の脚部が欠損している。基部の抉りは2では深く、左右非対称である。3は浅く、脚部は丸状である。4・5は石匙である。4は横長の石匙で、横長剥片を加工したものである。両面全周縁に調整剥離が施される。5は縦長の石匙で、縦長剥片を加工したものである。背面に入念な押圧剥離が施され、腹面側縁に刃部調整剥離が施される。6~8・10~12・14は削器である。調整剥離は、6は背面側縁、7は背面左側縁および上端、8は腹面右側縁、10は背面左側縁、11は腹面下端、12は背面全周および腹面下端、13・15は背面下端に施される。9は石錐である。不定形剥片を端部調整したもので、錐部は短い。13は筥状石器である。平面形は刃部幅広形を呈し、断面は凸レンズ形をした肉厚のものである。調整は腹面左側縁から右側縁を剥離調整したのち、背面右側縁か



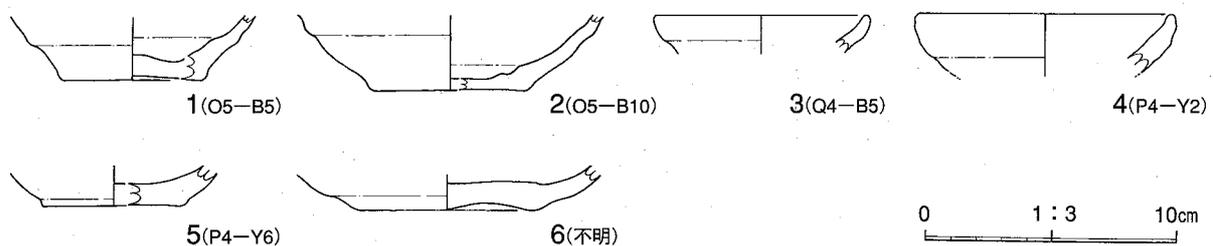
第51図 遺物包含層出土遺物 (11) 石器2



第52図 遺物包含層出土遺物 (12) 石器3



第53図 遺物包含層出土遺物 (13) 石器4



第54図 遺物包含層出土遺物 (14) 古代・中世

ら左側縁を剥離調整する。最終的な整形剥離は背面全周縁のみに限られる。

16・17は基部欠損の磨製石斧で、17は体部全面にわたって敲打痕を伴う。18・19・25は敲石で、18・19はともに敲打痕を伴い、25には敲打した際に生じた剥離痕が表面上端および裏面左側縁に見られる。20・24は凹石で、両面に敲打による凹部が形成される。20が下端に敲打痕が認められることから敲石としての併用も考えられる。21・22は擦痕を持つ礫である。23は石皿で、全体のうち中央部付近が残存したものである。表裏面ともに使用されており、表面には条痕や敲打痕も見られる。26は粘板岩製の石鍬である。偏平な剥片の周縁を剥離整形したものである。

平安時代 (第54図1・2) 1・2は平安時代のあかやき土器坏である。ロクロ成形のあかやき土器坏で、体部上半～底部にかけて残存している。回転糸切無調整で、摩滅が著しい。

中世 (第54図3～6) 3～6は12～13世紀のかわらけである。ロクロ成形のかわらけで、3・4は口縁部片である。5・6は底部片で、底部の切り離しは回転糸切無調整である。

(5) ま と め

検出遺構 検出された遺構は、縄文時代の土坑12基 (R D001～004・006～009・011～014)、埋設土器3基、弥生時代の土坑6基 (R D005・010・015～018)、平安時代の溝跡3条 (R G501～503)、中・近世の土坑8基 (R D1001～1008)、溝跡8条 (R G1001～1008) である。

扇状地形上の扇尖～扇端部に立地する第Ⅱ区は、今回の発掘調査によって、各時代における明確な集落は確認されなかったが、出土遺物は一様に磨滅が著しく、出土層位も一定したものではないことから、扇頂部にあたる上流域より流出してきた遺物である可能性が考えられる。また第Ⅱ区では、北東部に縄文中期、北西部に弥生時代前期の遺物が集中して出土する遺物包含層が形成されている。遺物は第Ⅱ層を主体として出土しており、周辺において入念な遺構検出作業をおこなったものの明確な遺構の発見には至らなかった。しかし、過去において河川の氾濫・増水などの自然災害により、本来は存在していた竪穴住居などの遺構が破壊され、床面のみが残存していた可能性はある。第Ⅱ区には北部に多くの未調査部分が残されており、集落および遺物包含層の変遷や具体的な構成については、今後の調査研究によって明らかにされるものである。

遺構・遺物

縄文時代 縄文時代の遺構は、土坑12基 (R D001～004・006～009・011～014)、埋設土器3基 (埋設土器1～3) が検出されており、中期中葉の大木8b式期に属する深鉢形土器などが出土している。また遺構外ではあるが、上記の中期中葉のほか、早期末葉の赤御堂式、前期前葉の大木2a式、中期後葉の大木9式、後期前葉の門前I式、晚期中葉の大洞C₁・C₂式、後葉のA・A'大洞式土器が第Ⅱ区北部の遺物包含層を中心に出土している。埋設土器は、いずれも深鉢形土器を正立の状態で見出されたもので、検出状況や埋土に焼土などの混入も確認されないことから、住居跡に伴うものではなく単独で存在する遺構として考えられる。これまで埋設土器の性格には、乳幼児埋葬または胎盤埋納の可能性が考えられているが、証拠となる明確な物証が確認されなかったため推論の域を出ることはなかった。向田遺跡周辺では、隣接する柿ノ木平遺跡に出土例があり、縄文時代中期を主体とする大規模な集落の形成が明らかになりつつある。今後は調査例の蓄積を待ち、改めて比較検

討することが必要とされる。

弥生時代 弥生時代の土坑6基（R D005・010・015～018）が検出されている。R D005土坑からは弥生時代前期の砂沢式に相当する高坏形土器が出土している。また、遺構外ではあるが、上記の弥生時代前期のほか、同じく前期の山王Ⅲ層式古段階、後期の赤穴式古段階の土器が第Ⅱ区北西部の遺物包含層を中心に出土している。砂沢式に相当する土器は、向田遺跡に隣接する柿ノ木平遺跡、寺沢遺跡、前野遺跡から出土例している。赤穴式は山岸・浅岸地区において、出土遺物量は少ないものの出土遺跡数が増加する時期の土器型式である。向田遺跡周辺では、柿ノ木平遺跡、堰根遺跡、寺沢遺跡、前野遺跡、大塚遺跡、永福寺山遺跡からの出土例があり、特に堰根遺跡では多量の赤穴式土器を伴う竪穴住居跡が1棟発見されており興味深い。部分的な調査であるため他の遺構との関連は不明であるが、遺構の検出例の少ない時期でもあり今後の周辺調査に期待したい。

平安時代 平安時代の明確な遺構は、R G501～503溝跡以外には確認されなかった。遺物には、R G501溝跡より僅少ではあるがあかやき土器が出土している。また、遺構外ではあるが、第Ⅱ区南西部の遺物包含層より9世紀に相当する須恵器、あかやき土器が出土している。ロクロ成形によるあかやき土器で、坏は底部切り離しが回転糸切り、切り離し後の再調整はない。いずれも小破片で摩滅が著しく、周辺遺跡より流出してきた遺物である可能性が考えられる。

中世～近世 中世～近世と思われる遺構は、土坑8基（R D1001～1008）、溝跡8条（R G1001～1008）が検出されており、遺物には、遺構外ではあるが第Ⅱ区北東部の遺物包含層より12～13世紀と推定される「かわらけ」が出土している。ロクロ成形によるかわらけで、底部切り離しは回転糸切り、切り離し後の再調整はない。向田遺跡周辺では、隣接する柿ノ木平遺跡・上村屋敷遺跡・堰根遺跡において、平安時代末期～鎌倉時代（12世紀～13世紀）の掘立柱建物跡や竪穴建物跡が確認されており、その周囲から白磁四耳壺や常滑産三筋文壺などに代表される中国産および国産の高級陶磁器などが出土している。これは開発領主層の屋敷を中心とした村落の存在を示すもので、同時期の遺構は中津川対岸の落合遺跡や薬師社脇遺跡でも確認されている。盛岡市内において調査例の少ない時期の遺跡でもあり、中津川・米内川合流点の両岸での開発の様子や村落の営みを知るうえで今後の調査研究に期待される。

写 真 图 版



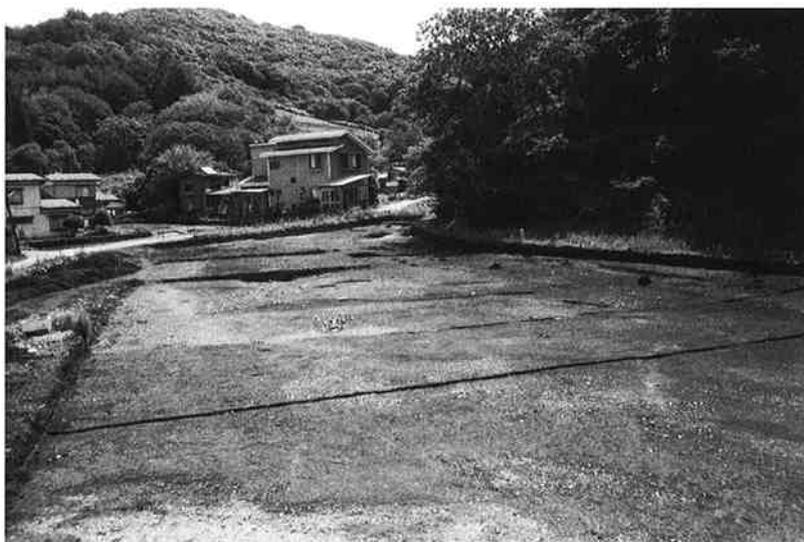
浅岸遺跡群全景（昭和49年撮影）



向田遺跡遠景（北から）

第2図版

第6次発掘調査区全景
(西から)



第11次発掘調査区全景
(北から)



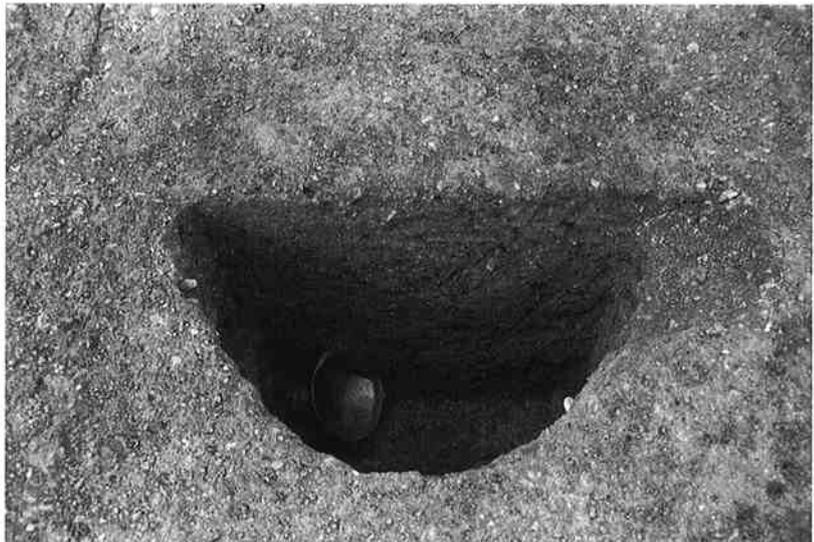
RA001
竪穴住居跡全景 (南から)



RD005
土坑全景（東から）



RD005
土坑土層断面



RD005
土坑遺物出土状況



第4図版



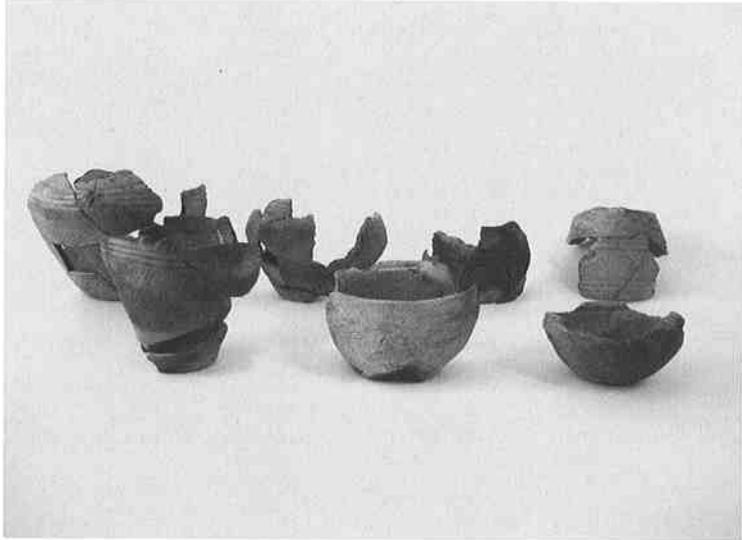
RG504
溝跡群全景（北東から）



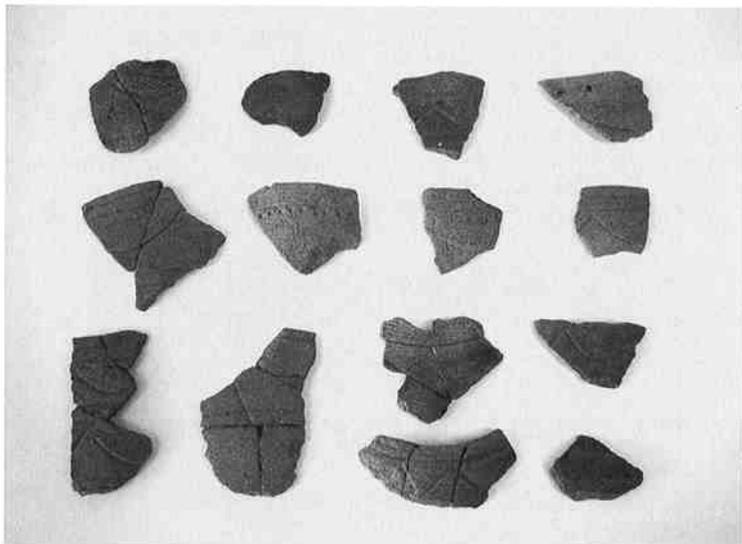
第Ⅱ区遺物包含層
出土状況



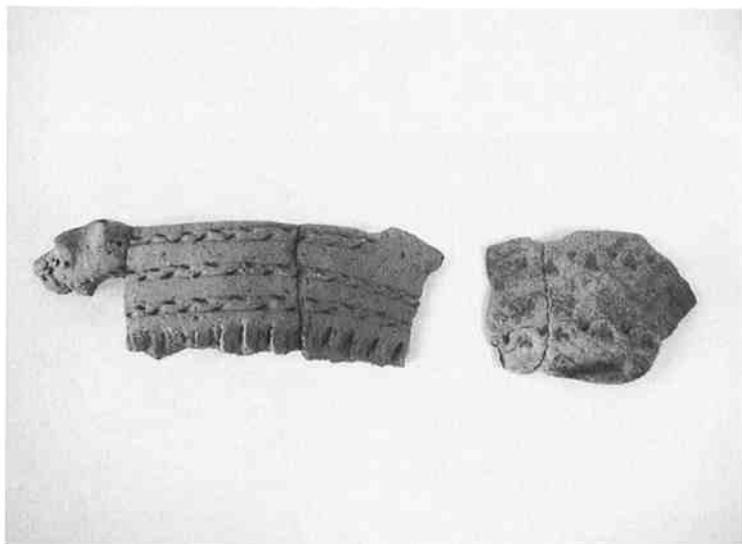
第Ⅰ区遺物包含層
出土状況



弥生時代の土器（前期）

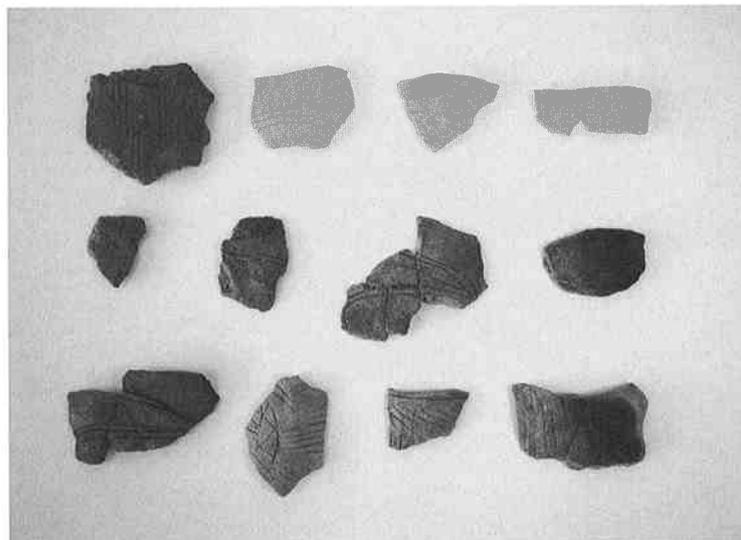


弥生時代の土器（前期）

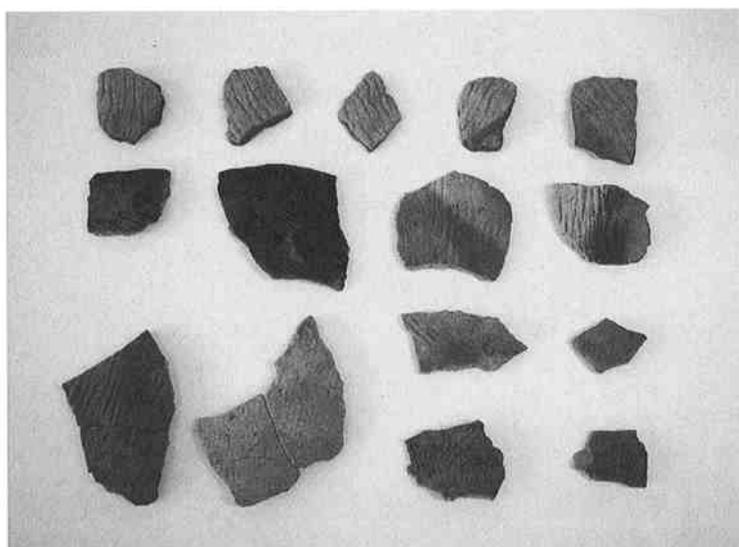


弥生時代の土器（後期）

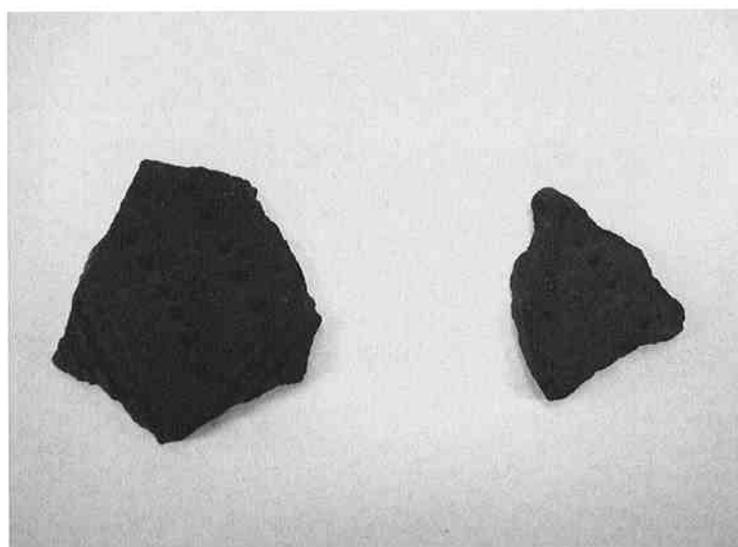
第6図版



弥生時代の土器（後期）



弥生時代の土器（後期）



続縄文時代の土器

報告書抄録

ふりがな	むかいだいせき							
書名	向田遺跡							
副書名	- 浅岸地区土地区画整理事業関連遺跡発掘調査Ⅱ -							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	佐々木紀子・神原雄一郎・藤村茂克 他							
編集機関	盛岡市教育委員会							
所在地	〒020-8532 岩手県盛岡市津志田14地割37-2 TEL019-651-4111 (内7357)							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
向田遺跡	岩手県盛岡市 浅岸字向田・ 字上村 地内	03201		39° 42' 30"	141° 11' 15"	平成11年度 1999.08.17 ～12.10 平成12年度 2000.05.01 ～11.21 平成13年度 2001.04.04 ～11.16 平成14年度 2002.05.07 ～05.30	2,600㎡ 7,360㎡ 8,840㎡ 470㎡	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
向田遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代 平安時代 中世以降	縄文時代 土坑 18 遺物包含層		縄文早期～晚期土器・石器			
			弥生時代 竪穴住居跡 1 土坑 7 遺物包含層		弥生前期・後期土器			
			平安時代 溝跡(群) 4		上師器 須恵器・あかやき土器			
			中世以降 土坑 4 溝跡 10		かわらけ 陶器 古銭			

向 田 遺 跡

－浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－

2003年3月31日 発行

編 集 盛岡市教育委員会文化課
〒020-0835 盛岡市津志田14地割
TEL 019-651-4111 内線7353

発 行 盛岡市都市整備部区画整理課
〒020-8531 盛岡市若園町2-18
TEL 019-651-4111

印 刷 河 北 印 刷 株 式 会 社
〒020-0015 盛岡市本町通2-8-7
TEL 019-623-4256
